

一夏のくせになまいき
だ

シシカバブP

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

外史、それは現実世界で創造された創作世界。

そんな外史の一部管理を任された神がいた。

その神は、今また新しく生まれた外史を見て顔を顰めた。

「えっ？ 何この主人公？」

その外史の主役たる男、織斑一夏のことだが、神は気に食わなかった。

「そうだった！ オリ主送り込んでシナリオ弄ったろ！」

これは、自由爛漫なとある神と、その神に振り回される1組の男女のお話――

「一夏に！ハーレムは！おとずれなあい!!」

注意：

本作は織斑一夏のことをガッツリsager（予定の）お話となっています。
なので、一夏ファンは回れ右でお願いします。

12／3：

完売しました。

次作（※アンチものではありません）

<https://syosetu.org/novel/304289>

目次

原作開始前

プロローグ

第1話 接触

第2話 白騎士事件

第3話 理解者

第4話 専用機

閑話 ここまでの主要な登場人物説明

原作開始くクラス代表決定戦

第5話 入学

第6話 クラス代表

第7話 訓練機貸し出し

76

65

54

50

41

31

25

10

1

第8話 代表決定戦くvs セシリ

ア・オルコットく

86

第9話 代表決定戦くvs 織斑一夏

く

96

第10話 代表決定戦く全試合終了後

く

105

第11話 代表就任くそしてパーティ

へく

115

クラス対抗戦

第12話 中国娘到来

130

第13話 束の計画

143

第14話 クラス対抗戦くvs 凰鈴

音く

152

第15話	招かれざる咎人ゝ帳尻合わせの対価ゝ	163	第21話	金と銀	239
第16話	嵐が過ぎて	175	第22話	叫び	248
第17話	目覚め	189	第23話	それぞれの思い	258
閑話	ここまでの主要な登場人物説明	268	第24話	学年別トーナメント	
その2		201	第25話	偽りの戦乙女	277
インターミッション			第26話	リヴァイヴ	286
第18話	対抗戦翌日ゝGWのご予定は？ゝ	206	臨海学校		
第19話	GWゝSRCへ行こうゝ		第27話	臨海学校1日目	296
217			第28話	臨海学校2日目	305
学年別トーナメント			第29話	v s 銀の福音ゝ愚者の裏切りゝ	316
第20話	2人の転校生	229	第30話	オリ主なんて居なくても	

第31話 分かり合えなかった姉弟、

分かり合えた姉妹 ————— 341

ENDING

第32話 爆弾発言 ————— 350

最終話 宇宙(そら)へ ————— 359

おまけ(胸糞注意) Deus vul —————

t (神がそれを望まれる) ————— 375

原作開始前

プロローグ

一面真っ白で、見渡す限り何もない世界。

正確には、紺のスーツを着込んだ、短髪の男が1人。

その男の目の前が突然光りだした。

しばらくして光が消えると、そこには2人の男女が立っていた。

Is side???

「お疲れさーん。というわけで、次は一夏ラヴァーズ寝取つてき（ドゴツ）痛った！」
開口一番、阿保なことを抜かす目の前の男を、とりあえずローキックで黙らせる。

「シヨウちゃん、開幕ローキックはどうかと思うなー」

「そうか？」

「ロキちゃん相手なら、最初はアイアンクローぐらいにしろかないとー」

「もしもしミナミさん？ さすがにそれは無いよね？ ねえ？」

脛にローキックを食らったスーツの男・ロキの顔は、見事に引きつっていた。^{すね}

「で、まずは次の外史について説明してくれるんだよねあ?」

「ハイ、説明させていただきます・・・」

l s i d e ? ? ?
o u t l

—————

ローキックを食らう少し前・・・

l s i d e ロキ

「おつ、また新しい外史が出来た」

報告書作成をしていた僕は、新しい外史が生まれたことに気付いた。
めんどろなおしごと

外史、それは現実世界で創造された創作世界だ。

「もしくだったら」「この時々があつたら」という想像から生まれ、そこからまた枝分かれするように、無数の外史、並行世界が生まれていく。

そんな外史の一部管理を任された神、それが僕というわけだ。

最初は面倒そうだったんだけど、主神から「少しは働け!」^{オージェン}と言われて、やむなく引き受けた。まあ今はそれなりに楽しんでやってるけど。

「さてさて、今回はどんな世界かなあ？」

視界の右斜め上、両手サイズのふよふよ浮いている水球・外史を引き寄せると、顔を近づけて覗きこんでみた。

この外史はインフィニット・ストラトス、通称ISと呼ばれる、女性しか扱えない飛行パワードスーツが開発された世界で、そんなISをなぜか主人公・織斑一夏が起動させてしまったことから、ほぼ女子校とも言えるIS操縦者育成機関『IS学園』に強制入学させられることになる。

「ほうほう。いわゆる学園ラブコメ・ハーレム系の世界か。王道だねえ」

僕個神としては、ハーレム系は嫌いじゃない。むしろいいと思います。

「で、そんな主人公の一夏くんは、どんな人間なのかな？」

今度は詳細な情報を見たくて、再度水球に顔を近づけて色々確認を……えーつと……確認を……

「えっ？ 何この主人公」

たぶん、今の僕はすごい顰^{しか}めっ面をしてると思う。

正義感を持つのはいい。でもそれを振り回して好き勝手しちやダメだろ。

結果的にうまくいっただけで、めっちゃ周りに迷惑を^{こさ}せてるじゃん。

さらにヒロイン勢の想いもまったく意に介さない、すさまじいまでの朴念仁。

この主人公、出来ればどうにかしたいけど、神である僕が外史に過度の干渉するのは禁じられている。

主人公除去とか精神操作とか、過干渉なんだよなあ……あつ！

「そうだつ！　オリ主送り込んでシナリオ弄つたろ！」

ちようどシヨウとミナミが『外史・ゼムリア』から戻ってくるし、あの2人に行ってもらおうそうしよう。

side output

| s i d e
シ ョ ウ |

「よし分かった……歯あ食いしばれ！ そんな神、修正してやる！」

「アイエエエ!? グーパン!? グーパンナンデ!?」

「なんでじゃねえよ！ 思いつき過介入じゃねえか！」

こんな阿保なことを言ってる神^{ロキ}が、名目上俺とミナミの上司になるわけだ。不本意だが。

ちなみに俺もミナミも神じゃないし、天使でもない。”元”人間と言うべきか。きつかけは元の世界で、俺とミナミの乗った飛行機が墜落したことだ。

俺とミナミの関係は・・・まあ、男女の関係ってやつだ。

大学卒業後、2人で海外旅行を計画、意気揚々とアメリカ行きの飛行機に乗ったものの、太平洋のど真ん中で真つ逆さま。

墜落の衝撃で意識を失って、気付いたらミナミと一緒にこの真つ白空間にいた。

そして間髪入れずに現れたのがロキだったわけだ。

ロキ曰く、自身が管理している世界、外史に入って、物語を円滑に進める現地作業員を募集している。ついては俺とミナミにそれを頼みたいと。

もちろん強制ではなく、嫌なら断ってもいいし、その場合は通常の手続き通り天国か地獄行きの後、記憶消去からの元の世界で転生らしい。

正直悩みはしたが、ミナミが乗り気だったし、俺もミナミと一緒にならいいかと思い、その頼みを引き受けた。

それから今に至るまで、様々な世界、外史を巡ってきたわけだが、ここでは割愛して

おく。

ちなみに外史で死ぬ可能性は当然ある。そうなった場合はこの空間に戻されることになっている。

戦死したこともあれば天寿を全うしたこともあり、それらを加算すると、実年齢はキリスト教を軽く超えていたりする。

「うーん……でも、この織斑君？結構ひどいねー」

「でしよでしよ!？」

「ミナミも賛同するようなこと言うなよ……そもそも、外史の流れを変えるのはご法度じゃなかったのか？」

「だいじょーぶ!」 オーデイン 主神から許可もらってきた!」

「フアツ!？」

おい待て主神!　なんで許可してんの!？」

「『こんな主人公、修正してやれ!　最悪亡き者にしてもかまわん!』だつてさ」

「もうやだこの神々……」

つまり、どうあつても介入確定じゃん。

Inside Show out

Inside ミナミ

IS かー。宇宙作業用↓兵器↓競技用と、コロコロ立ち位置が変わってるみたいだけど、この前行った世界のA C アイマードコア みたいに強いのかなー？

「それでロキちゃん、もうすぐ行くの？」

「うん、こっちの準備が整い次第行つてほしいかなーって、そうだそうだ」

そう言つて思い出したかのように、ロキちゃんがスーツの胸ポケットからメモ帳を取り出した。

「とりあえず介入に必要なだから、2人のIS適性をAにしておくよ」

「IS特性？」

「ISを扱う能力、先天的な才能みたいなものだね」

「へえ、そうなんだー」

「ちよつと待った」

シヨウちゃんがシュバツと手を挙げた。

「2人」つてことは、俺も含まれるのか？」

「もちろん」

「ということは、俺もIS学園に——」

「じゃないと介入できないじゃん」

「ガツテム！」

そう叫ぶと、ショウちゃんは頭を抱えたまま蹲^{うずく}まっちゃった。

「IS学園ってほぼ女子校なんだろう？客寄せパンダ扱い確定じゃねえか……」

「ミナミもいるだろ？がんばれ」

そう言ってサムズアップをかますロキちゃん。さっきのローキックの仕返しかな？
って言ってたら、ロキちゃんの右隣が、私達がここに来た時みたいに光り出した。

「おつ、準備完了みたいだよ」

「はあ、覚悟を決めるか……」

orzしていたショウちゃんだったけど、ため息をつきつつ立ち上がった。

「それじゃあロキちゃん、行ってくるねー」

「いつてらー。2人が向こうに行ってしばらくしたら、こっちから連絡入れるよ」

「りようかい。ほらほらショウちゃん、行こう」

「分かったよ」

ロキちゃんが見送る中、私とショウちゃんは光の中に入っていった。

光に入ると、徐々に意識が遠くなっていく。
次に目が覚めたら、ISの世界にいるのだろう。今までの外史に入った時と同じように。

どんな世界か、楽しみだなー。

I s i d e ミ ナ ミ o u t l

第1話 接触

ショウとミナミが介入することになった『外史・IS』。

しかし現時点ではISは開発されておらず、表面上は2人が元いた世界と変わらぬ日常を送っていた。

Insideショウ

この世界に来て、早5年が経った。

（まさか、”転生”することになるとは思わなかったが・・・）

そう、今までは20代（元の世界と同じ）見た目で外史に入っていたが、今回は学園に入る都合上、赤ん坊に転生しての介入となった。

・・・意識はちゃんとあるのに言葉が話せないって、結構きつかったなあ・・・

そんな俺は北山という家の長男として生まれ、『北山翔』を名乗ることになった。

元の名前と読みが同じなのは有難い。

そうして俺は、周りに怪しまれない（転生がバレない）よう、色々気を付けながら生活し、小学校入学1か月前に差し掛かったわけだ。

ちなみにミナミはどうなったかという・・・

「翔ちゃんー!」

階下から階段を上がってくる音とともに聞こえてくる声。そして

「翔ちゃん開けるよー」

言うが否や、ミナミは俺の返事を待たず部屋のドアを開けた。

どういう因果か、ミナミも同じ北山家に生まれることになった。

しかも、俺と二卵性の双子として。

生まれたのが10分早かったとかで俺が兄となっているが、ほぼ差なんて無いようなもんだ。

そういったわけで、俺は妹である『北山美波』から「お兄ちゃん」系統で呼ばれることはなく、「今まで」通り「翔ちゃん」呼びなのである。

「返事するまで開けるなど、何度言えば分かるんだ? (ほっぺぎゅー)」

「ぐ、ぐふえんなひゃーい・・・」

「まったく・・・で、何の用だ?」

「いたた・・・、お父さんが篠ノ之道場に行くけど、一緒に行くかって」

「篠ノ之、か・・・」

その名前を聞いて、俺は勉強机の引き出しから4つ折りにされた紙を取り出した。

「あ、ロキちゃんからの手紙だね」

「ああ」

先日、俺と美波が5回目の誕生日を迎えた夜、いつの間にか俺の机の上に置かれていた、ロキからの連絡だった。

『ショウとミナミへ』

5歳の誕生日おめでとう。うまくその世界に溶け込めてるようで何よりだよ。

そつちじやまだISは表舞台に出てきてないだろうけど、そろそろ開発者の篠ノ之束が動き出すだろうから、時間の問題かな？

ちなみに君達が生まれた北山家と篠ノ之家は、親同士で縁があるらしいから、接触するなら有効活用してよ。ただ、人付き合いが壊滅的みたいだから、その辺は気を付けてね。

それじゃ、今度はIS学園入学辺りに連絡するから。アデュー！』

「さて、どうしたもんか・・・」

「とりあえず、行くだけ行ってみる？」

「だな」

美波の提案に頷くと、俺は手紙をまた引き出しにしまつて椅子から立ち上がった。

l s i d e 翔 o u t l

l s i d e 美波 l

篠ノ之道場に付いていくことを伝えて、お父さんが運転する車に揺られること小1時間、篠ノ之道場に着いた。

その道場が――

「ふわぁ、大きい道場だねー」

「確かに、でかいな」

「そうだろう」

私達のセリフに、腕を組んだお父さんがうんうん頷く。

神社の境内にあるって聞いてたから、もつとこじんまりとしてると思つてたよ。

そうしていると、道場の正面から誰かが出てきた。

紺色の剣道着を着た、お父さんより少し年上っぽい人だ。

「おお実^{みのる}、久しぶりだな」

「先輩もお元氣そうで」

「おうよ。で、そつちの子達が？」

剣道着の人が私と翔ちゃんの方に体を向けた。

「北山翔です」

「美波です」

「篠ノ之道場の主、篠ノ之柳^{りゅういん}韻だ」

私達に名乗り返すと、柳韻さんはニヤリと笑いながらお父さんの肩を叩き

「ちゃんと礼儀作法がなってる、いい子達じゃないか」

「ははは、ありがとうございます」

満更でもなさそうな顔をしながら、お父さんはポリポリを頭を搔いた。

車の中で聞いた話だと、お父さんは学生時代剣道部で、柳韻さんとはその時の先輩・後輩の仲らしく、その仲が今でも続いているらしい。

「それで？ 2人を連れて来たのは私に紹介するためか？」

「それもあります、道場を見学させようと思ひまして。構いませんか？」

「見学か」

柳韻さんは少し考えるように顎を触ったものの、

「構わんよ。付いてきなさい」

そう言つて、道場に戻つていった。

その後ろを追うように、私達3人も付いていった。

それから道場の中で、門下生の人達の素振りや型練習、柳韻さんとの練習試合（“流し”と言ふらしい）を見学した。

あ、ちなみに今回は幸か不幸か、織斑一夏君や篠ノ之箒ちゃんとは会わなかったよ。

l s i d e 美波 o u t

l s i d e 翔

あれから1時間ほど見学したが、正直あまりぱつとしなかった。

恐らく、今日見ていたのは『剣道』の枠内だからだろう。

あくまで精神修練が主であり、戦闘技術の向上、ましてや命の奪い合いとは縁遠いもの。

仕方ないことだ。むしろいいことだ。それだけこの世界が平和だつてことなんだから。

地球^B外^E工作^T機械^Aに食い殺されることも無ければ、超^{アームズ・フー}巨大兵器の物量に磨り潰されることも無い……

(と、いけないな。前に行った外史に引つ張られてる)

血生臭い考えを払おうと正座した状態で頭を振ると、視界に道場を通り過ぎる何か、いや誰かが映った。

俺や美波より年上、中学生ぐらいの女の子だ。

その子はちらつとこちらを見たが、すぐに視線を戻すと、紙束を抱えながら走っていった。

「どうした翔、飽きて来たか？」

剣道着を着て、他の門下生の人達と一緒に素振りをしていた父さんが、手を止めてこちらに歩いてきた。

ああ、頭を振ったのを見られて、退屈していると思われたか。

「ちよつと外の空気を吸ってきていいかな？」

「あ、私もー」

肯定も否定もせず、一旦頭を冷やそうと言ったんだけど、隣で同じく正座して見学していた美波が手を挙げていた。

「仕方ないなあ。先輩、すみませんが2人を中座させます」

「ああ。むしろ小学校に入る前の子が、1時間近く正座で見学してたんだろ？ 持った方だ」

父さんの声掛けに柳韻さんは一旦手を止めて頷くと、再び門下生との練習試合に戻っていった。

「それじゃあ父さんはもう少し続けるから、車の前で集合な」

「分かった」

「りようかい！」

返事を返して、俺と美波は立ち上がると、道場の出入口に――

「あれ？ 翔ちゃん何か落ちてる」

美波が指さす方を見ると、B4ぐらいの紙が1枚、出入り口前の地面に落ちていた。紙……あの時見えた女の子が落としたのだろうか。

拾ってみると、その紙には細かい図と文字がびっしり書き込まれていた。

「何かの――」

設計図か？ と言おうとした俺の口は、紙の上部に書かれていた文言を見て固まった。

「翔ちゃん、これって……」

「ああ……」

美波も思ったであろう推測に頷きつつ、俺は再度文言に視線を移した。

『宇宙開発用マルチフォームスーツ 仮称：インフィニット・ストラトス』

l s i d e 翔 o u t l

l s i d e 束 l

(どこにいった!? 私の設計図!)

やらかした、そう思いながら、私は地下のラボから大慌てで外に出た。

宇宙に行きたい。そう思い、寝る間も惜しんで描いた、宇宙開発用マルチフォームスーツの設計図。

やつとうまくいきそうだと、ハイテンションだったのがいけなかった。

よもや、その大事な設計図をどこかに落とすとは——!

(部屋からラボまでの間……道場の前!?)

そういうば、出入り口の前で一度立ち止まった記憶がある。あそこで落としたんだとしたら——

そう思つて道場まで戻つてみると、そこには箒ちゃんぐらいの子供が2人いた。

その2人は何かを見るように——ってあれは！

（私の設計図！）

「それ返してっ！」

私が上げた大声に、2人は一瞬ビクツとしたが、こちらの向くと

「この紙は貴方のですか？」

「そうだよっ！だから早く返してっ！」

ああもうっ、早く返せよっ！

「そうですか。はいどうぞ」

男の方が差し出した設計図をひったくると、図面を隅々まで確認。

良かった、擦れて消えたりしてない……

「それにしても、宇宙開発用マルチフォームスーツかー」

恐らく中身を見たんだろう、女の方がそう呟いた。

「そうだよ、文句ある？」

まただ。また言うのだろう。「そんなの出来っこない」と。

うんざりだ。

どいつもこいつも、私のことを否定する。

万一もあり得ないが、私の理論に不備があるというならまだいい。そんな奴、今まで誰もいやしなかったが。

私の理論が理解できない。だから否定する。ことの正否じゃない。自分達大人が理解できないから、「子供の戯言」と切って捨てる。

ふざけるな！

学校の連中だってそうだ。理解できないから関わろうとしない。こつちから願い下げだ！　ちーちゃんだけで十分だ！

「面白そうだよー」「いつかは必要なものだよな」

「・・・は？」

全く想定していなかった2人の返答に、私のオーバースペックな脳細胞は、確かに一瞬停止した――

l s i d e 東 o u t l

l s i d e 美波 l

ふわー、ビックリしたー。

まさか落とし主が、大声上げながら猛ダッシュしてくると思わなかったよー。
とりあえず返せてよかったよかったー

「ちよつと待ちなよ」

「ふえ?」「なんですか?」

紙を返したお姉さんに睨まれてる。なんで?

「さつき言つたの、どういうこと?」

「さつきというのは?」

「面白そうだとか、いつかは必要だとか!」

そう怒鳴らなくてもー・・・目の下すつごい隈になってるし、寝不足でイライラしてるのかな?

「だって、宇宙でぶかぶか浮かぶのって、面白そうじゃないですかー」

「は?」

「それに、知らない場所に行くのって、ワクワクしません?」
ちよつぴり怖いなーとも感じるけど。

「・・・」

さつきまで睨んでいたお姉さんの視線が、翔ちゃんの方に向く。

「このまま人類が増え続けるなら、いつか地球だけでは支え切れなくなるのは自明です。であれば当然、宇宙進出が必須になってくる。そこでこのマルチフォームスーツがあれば、従来の宇宙服に比べて安全性や作業効率の向上が見込めますし、延いては宇宙開発を加速させる起爆剤になり得ます」

「おおー、翔ちゃんかっこいい。」

「つらつらとISの利便性と将来性を並べていつてるよ。」

「貴方もそう思ったから、作ろうとしたんじゃないですか？　面白そうだから、必要だから」

「……」

「ありや、お姉さん俯いて黙り込んでしまった。」

「（何か声かけた方がいいのかなー……ってええっ!）」

「あまりの出来事に、私も翔ちゃんも固まってしまった。」

「あれ？　なんで……」

「そこには、驚いたような顔をしながら涙を流す、お姉さんがいた。」

「まるで、どうして泣いているのか分からないかのように――」

l s i d e 美波 o u t

l s i d e 束

「だって、宇宙でぶかぶか浮かぶのって、面白そうじゃないですかー」

「それに、知らない場所に行くのって、ワクワクしませんー？」

「このまま人類が増え続けるなら、いつか地球だけでは支え切れなくなるのは自明です。であれば当然、宇宙進出が必須になってくる。そこでこのマルチフォームスーツがあれば、従来の宇宙服に比べて安全性や作業効率の向上が見込めますし、延いては宇宙開発を加速させる起爆剤になり得ます」

それを聞いた時、今まで感じたことのないものがこみ上げてきた。

私と同じように、宇宙への、未知への興味を持っている。

私と同じように、宇宙進出が必要という認識を持っている。

私と、同じように――

「貴方もそう思ったから、作ろうとしたんじゃないですか？ 面白そうだから、必要だから」

（ああそうか、そうなんだ・・・）

男の子の言葉で、私は”今まで感じたことのないもの”の正体を理解した。

嬉しかったんだ。

私と同じ頭脳じゃなくてもいい。

私と同じ身体能力じゃなくてもいい。

私と同じ考えを、同じ気持ちを持てる人間に出会えたことが。

私は得られたのかもしれないんだ。

ちーちゃんですらたどり着けなかった、私を”理解”してくれる人に。

ああそうだ、私の理解者になってくれる人なら、名前をちゃんと聞いて覚えなないと！
それならまずは、2人を東さん謹製秘密ラボに招待しよう！そうしよう！

そんな考えをあれこれ巡らせてる今の私は、涙をポロポロこぼしていたけど、すごく
いい笑顔なんだと思う。

l s i d e o u t l

第2話 白騎士事件

l s i d e 翔

本当に、色々ありすぎた。

俺はあの日、篠ノ之道場であつたことを思い返していた。

――――

マルチフォームスーツ（後にISと呼ばれるであろうもの）の感想を言った。

それだけだったはずが、なぜか目の前の女性――恐らくこの人が、篠ノ之東なのだろう――に泣かれ、かと思えば、突然笑顔になって俺と美波の手を引いて歩き出してしまった。

「さあさあ、つちだよー！」

そうして案内されたのは、どこぞの開発室かと言わんばかりの部屋だった。

ちなみに、篠ノ之神社の境内、その隅っこに隠されていた地下への階段を通つて。

…完全に秘密基地だなこりゃ。

「おおー！翔ちゃん翔ちゃん、すっばいよー！」

「でしょでしょ!？」

美波は美波で、なんか普通に意気投合してるし。

「ええつと…」

「おつと私としたことが、自己紹介がまだだったね。私は篠ノ之東だよ」

「は、はい。北山翔です」

「北山美波です！」

「しょーちゃんとなーちゃんだね、よろしくねー」

——ロキの手紙には『人付き合いが壊滅的』と書いてあったし、初対面時もすごい睨まれてたから、接点なしで終わると思っていたんだが…

まさか、その篠ノ之東から自己紹介＋握手を求められるとは、俺も美波も思ってたぞ。

その後は2、30分ほど他愛のない話をしていた。

とはいえ、東さんの話に付いていくのはなかなか大変だった。

なぜなら話の内容が

「最初はね、ISの動力源は融合炉を使おうと思ってたんだよ。でもそれだとねえ」

「原子炉ほどじゃないけど、デブリとかぶつかって壊れた時危なそうだねー」

「そう、そうなんだよ！ さすがなーちゃん、分かってるうー！」
めっちゃ技術的な話だったからだ。

恐らく普通の人が聞いてれば『そもそも融合炉自体が研究段階の技術であって、空想の域を出ないだろ』とツツコミを入れるだろう。

ただ、俺と美波の場合は、東さんの技術力を（物語開始時点——これから10年ほど先の話——ではあるが）知っているため、『近いうちにやるだろう』ぐらいに思っている。
「それで、融合炉の代案に目途はついてるんですか？」
「もちのろん！ それっていうのはね——」

♪
I, m a t h i n k e r I c o u l d b r e a k i t d o w n

美波のポケットから音楽が鳴りだした。確か携帯電話に登録した着うたなんだろうが、なぜその曲にした…

「もしもし？ あ、お父さん？ ごめんごめん、今東さんの一緒にいるの。…うん、翔ちゃんも一緒だよ」

どうやら父さんかららしい。そういえば、外の空気を吸うとか言ってから、結構な時

間になるのか。

「翔ちゃん、お父さんがもう帰るからって」

「分かった。それじゃあ束さん、俺達はこの辺で」

「うー、名残惜しいけど仕方ないかあ」

そう言つて、束さんはスマホ？（市販っぽくない形状してるんだが）を取り出し、何やらポチポチし始めた。

「これでよし！　しょーちゃん、自分のスマホ見てみて」

「はい？」

言われるがままスマホを取り出すと、何やら通知が1件…って、何か知らないアドレスと電話番号が登録されてるんですけど!?

「私の連絡先を入れたから、またお話しようね！　あ、もちろんなーちゃんのスマホにも登録済みだよ！」

「おー！　しゅげー！」

「りよ、りようかいです」

さすが篠ノ之束。この時期からすでに、ハッキングの腕は一流だったのか…

――――

そんなこんなで、気付けば篠ノ之東との初接触から早数か月が経っていた。

俺も美波も近所の小学校に入学し、平和な生活を続けている。

ただ、その平和も長くは続かないだろうと思い始めてもいる。

それは昨日、(あの日から) 月1で来るようになった、東さんからの電話だった。

『しょーちゃん、なーちゃん！ ついに！ ついに完成したんだよ！』

『完成って、あのマルチフォームスーツがですか？』

『確か、インフィニット・ストラトスでしたよねー？』

『そうそう！ 論文もさつきまじめ終わってね！ 来週学会に持っていくんだ！』

通話口から聞こえる東さんの声から、明らかに舞い上がっているのがよく分かる。

そして、俺や美波からすれば『ついに来たか…』という感想でもあった。

今日、今この時間にも、東さんはISの有用性と、将来性を懸命に発表しているのだろう。

そして、東さんはまた全てを否定されるだろう。

それから数日後だった。

各国の軍事基地が何者かのハッキングを受け、日本に向けて何千というミサイルが飛来するというニュースが流れたのは。

そしてそのミサイルを、正体不明の人型が一切の被害を出さずに迎撃したと伝えられたのは。

この一件は、後に『白騎士事件』と呼ばれることになる。

そして、本来宇宙を目指すはずだったISに、『兵器』という業を背負わせることにも。

それは、篠ノ之東の、世界にISを認めさせたいという『希望』が、宇宙進出という『未来』を焼き尽くしたことを意味していた――

第3話 理解者

l s i d e 束

「やった……ついにやった……！ 認められたんだ。私が、私のISが……！」
棚はなぎ倒され、ガラスが割れ、中身が床に散乱した研究室で、私は笑っていた。

ISを発表した日、私は頑張った。

今まで散々否定してきた連中にしたくもない作り笑いをして。どんな阿呆にでも理解できるよう、事細かな論文を用意して。万全の状態で臨んだんだ。

その結果が——最初で最後のセリフが、『子供の戯言』って、何さ……？

理解できないだけじゃなく、理解すらしようとしないのか……！
くそがつ！

その日、私は荒れに荒れた。

そしてサンプルの入った棚を力任せに倒した辺りで、あることを思いついた。

（そうだ、言って理解できないなら、見せてやればいい……ISのすごさを……！）
それから数日後、私はその計画を実行に移した。

ちーちゃんに頼み込んで、私が渾身を込めたIS『白騎士』を操縦してもらった。そして、各国にハッキングをしてミサイルを飛ばし、それをちーちゃんに迎撃してもらった。

予想外だったのは、『白騎士』を脅威に感じた各国が、戦闘機やら軍艦やらを持ち出してきたことだ。

まあ、『白騎士』とちーちゃんの前には路傍の石も同然だったけど。

世間は謎の人型で持ちきりになった。

そのタイミングで、人型——『白騎士』——を作ったのが自分であると公表したのだ。今まで見向きもしなかった連中が、こぞって私に会いに来るのだ。

ISのことを教えてほしいと。ISは素晴らしいと。

〜〜

(っ！ この着信音は！)

「もしもし、なーちゃん!？」

「東さん」

「なーちゃん！ 東さんやったよ！ やつとみんながISのことを認めて——」

「東さん」

え……なーちゃん、どうして、そんな怒った声出してるの……？

「あの『白騎士事件』、東さんが起こしたんですね？」

「う、うん。ISの有用性をあの馬鹿共に理解させるには——」

「どうしてそんなことしたの？」

「えっ……？」

どうしてって、だからISの有用性を……

「確かにISの有用性は広まったと思う」

「なら！」

「でもそれは『兵器』として」

「へい、き？」

なんで？ 私が作ったISは——

「2000を超えるミサイルを単騎で迎撃、各国の海上・航空戦力を返り討ちにする飛行パワードスーツ。それが『兵器』でなくて何？」

「あつ……」

なーちゃんの言葉に、私に達成感と高揚感を与えていた熱が一気に冷めた。それと同じに、スマホを持つ手がカタカタと震え始めた。

「これでISは『兵器』としてしか見られなくなった。もう、宇宙を飛ぶことはない」

「……………っ！」

何で……………？ だって、私は宇宙そらを飛びたかっただけで……………！

「ねえ東さん……………どうして、私や翔ちゃんを頼ってくれなかったの？」

「たよ、る……………？」

「私も翔ちゃんも、東さんのことを理解しようとしてるつもりだよ？」

さっきの声から打って変わって、優しい、母親が子供を諭すような、それでいて、今にも泣きそうな声色で

「辛い時、悲しい時、悩んでる時。愚痴でもいい、東さんが思ってることを話してほしかった。解決できないかもしれないけど、理解させてほしかった。……………でも、東さんは一度も話してくれなかった」

「なー、ちゃん……………」

「私も翔ちゃんも、東さんの”理解者”には、なれなかったのかな……………」

プツ　ツー、ツー……………

「ああ……………ああ……………あああああああああ！！」

通話が切れた瞬間。持っていたスマホが手から滑り落ちた瞬間。私は慟哭した。

理解させてほしかったと、なーちゃんと言った。なのに私は、2人に何も言わなかった。理解してもらおうとしなかった。

それどころか、“理解者”と抜かしておきながら、私から2人を理解しようとはしなかったじゃないか…

そして理解してしまった。

全てを喪った、いや、自ら壊してしまったことを。

宇宙を飛ぶという『夢』を。ISの『未来』を。しーちゃんとなーちゃんという“理解者”を――

l s i d e 束 o u t l

l s i d e 美波 l

「美波」

「翔ちゃん……」

通話の内容が内容だったから、翔ちゃんにも私の部屋に来てもらっていたんだけど、

現行の兵器を凌駕するISの登場と、女性にしか動かせないという欠陥が、男女平等という建前を破壊し、女尊男卑の風潮が強まった。

各国はIS運用条約、通称『アラスカ条約』を締結。建前上はISの軍事利用を禁止し、ISは一種の競技、スポーツになった。

そして肝心のISだが、全世界に普及することはなかった。

なぜなら、最重要機関であるISコアが完全なブラックボックスで束さんにしか作れなかったから。そして何より、その束さんがある日突然失踪してしまったからだ。467個のISコアを残して。

こうして各国は残されたコアを分配・やり繰りしながら、スポーツ競技となったISを研究・開発し、ISの世界大会『モンド・グロッソ』の優勝カップを奪い合うという、ある種の代理戦争を続けていた。

ザーツ……

「中学生生活も今年で最後かし、早いよねー」

「そうだな」

中学3年の6月。梅雨特有の雨の中、俺と美波はそれぞれ傘を差しながら家への帰り

道を歩いていた。

「美波は進路、I S学園で決まりなんだろう？」

「I S適正Aだからねー。それを言ったら翔ちゃんだつて」

「ああまあ、この世界に來た理由がそれなのは理解してるんだが…」

未だ世界初のI S操縦者・織斑一夏が登場していない中で、実質女子校のI S学園を志望とは口にできない。したら社会的に死ぬ。

「追々どうするか決めれば——？」

話しながら十字路を左に曲がると、この雨の中、傘もささずに立ち尽くしている人がいた。

「あの一、どうしたんです…っ！」

その人の声をかけながら近づいた美波がはつとした顔をした。

俺もその人に近づいた。そして美波と同じようにはつとした。

不思議の国のアリスみたいな服装に見覚えはない。だが、紫色の髪、そしてやや血走っているが、あの眼は間違いなく——

「しよーちゃん、なーちゃん……」

「東さん……」

「しょーちゃん、なーちゃん……もう分からないよ……私はただ、ISで宇宙を飛びた
かっただけなのに……それなのに、どうしてこうなっちゃうの……？」

途中で膝から崩れ落ちながらも、東さんの口から出た言葉は、まるで呪詛のようで、そ
れでいて懺悔のように聞こえた。

「……」

ちらつと美波の方を見ると、美波が頷いてみせたので、2人でさらに東さんに近づい
ていく。

そして東さんのすぐ目の前まで行くと、そこでしゃがみ込んで東さんと視線を合わせ
た。

「もう嫌だよお……どうすればよかったのさあ……」

「東さん」

美波が傘を手放すと、東さんを包み込むように抱きしめた。

「やつと、話してくれたねー。東さんの思っていることー」

「なーちゃん……」

「9年もか……抱え込み過ぎだろう、まったく……」

そう言いつつ俺も、いつも美波にやっているように、東さんの頭を左手でポンポンと

撫でた。

「しょーちゃん……なーちゃん……っ！」

美波の一緒に、東さんに抱き着かれた。その拍子に俺も傘を落としたが、そのまま東さんの背中をポンポンと叩いた。

「うわあああああつ……!!」

その日、俺達と東さんは、やつと”^わ理^か解^り者^あにな^えれ^た”んだと思う。

l s i d e 翔一

第4話 専用機

I s i d e 翔一

「じゃーん！ 束さんのラボ『吾輩は猫である（名前はまだ無い）』によろこそ〜！」

あの雨の中で抱き締めあっていた俺達は、あの後どこか吹っ切れたような顔の束さんに連れられて、失踪してから今まで拠点にしているらしいラボに来ていた。

——ここに来るまでに、デフォルメされた人参のようなロケットに乗せられたりしたわけだが。

「おおーっ！ すごいよ束ちゃん！ ISのパーツがいっぱいだーって、ややっ！これって最新型ではー!?」

ラボに案内されてから、ずっとあちこちを見て回っていた美波が、奥に懸架されている赤いISを見つけて声を上げた。

ちなみに、美波が束さんを「ちゃん」付けで呼んでいるが、それには理由がある。

「さすがナミママ、相変わらず目の付け所が違うねえ！ ほらほらシヨウママもこっち

こつち！」

美波の後ろを歩いていた東さんが、俺の方を向いておいでおいでした。

…そう、なぜか東さんが俺と美波のことを「ママ」と言い始めたのだ。

『2人のおかげで、東さんは生まれ変わりました！　なので新しい東さんを生んでくれた2人はママなのです！』

という謎理論によって。

その関係で、美波も呼び方を「束ちゃん」に変えたというわけだ。ちなみに俺は変えんよ。

「これは『紅椿』って言うてね！　今世の中の凡人共が第3世代機を作ろうと躍起になっている中、この『紅椿』なんと第4世代機なのです！」

「えっ？　もう第4世代機を？」

それには俺も驚いた。

ISには世代がある。

束さんが残したISコアを元に、とにかく動く機体の完成を目指した第1世代。

後付武装（イコライザ）によって、用途の多様化を求めた第2世代。

そして操縦者のイメージ・インターフェイスを用いた特殊兵装の搭載を目標としてい

る第3世代だ。

ただし、その特殊兵装の制御が難しいらしく、第3世代機はまだ試験機がほとんど聞いている。(情報源はIS学園志望で色々勉強している美波)

そんな中、第4世代機とは恐れ入る。

「まあまだ試作段階なんだけどね」

そう言つて、束さんはペロツと舌を出しながらおどけて見せた。

「ちなみに兵装は雨月と空裂あまつぎ からわれつて言つてね、レーザーやビームの帯を発生させるんだ」

「つまりエネルギー兵器つてこと？」

「そうだよー。ちなみに、なんで実体弾系の装備じゃないかって言うかねえ——」

「——スペースデブリの除去で使用する時、新たなデブリを作らないように、でしたよね？」

「……さすがショウママ、正解だよ。覚えてたんだね」

「あの頃の話してた中で、結構印象に残ってますからね」

まだ『白騎士事件』が起こる前。今のように3人で他愛なく話が出来ていた時に話題に上がった内容だった。

『スペースデブリカー、確かに難しい問題ですねー』

『ミサイルとか使っちゃうとさ、そのミサイルの残骸が新たなデブリになっちゃうんだよねえ』

『新たなデブリを作らない除去方法ですか……』

『昔ありませんでしたー？ 薬莢も含め、弾頭以外全部火薬で出来た銃つてー』

『あつたねえ。でも全部燃焼薬のミサイルとか、作るの大変そうだよ。しかもなんか美しくない』

『美しくないって……いつそビーム兵器でも作ります？ それならデブリ^じなんて出ようがないですし……なーんて』

『『それだあ！』』

『ファツ!』

「あはははっ、懐かしいなあ」

「9年も経つてますからねえ」

「そっか。あれから9年も経つんだ」

そう言つて束さんは、『紅椿』の肩部装甲を、愛おしそうに撫でた。

「9年、色んなものを見て来たよ。その度にうんざりしたし、失望もした。そして悟った

よ、ISは兵器になったんだって。ううん違う、東さんが兵器に『してしまった』んだって」

『紅椿』を撫でる手を止めて、東さんは天井を仰ぎ見るように顔を上げた。

「それでも……それでも、宇宙を飛びたいって想いだけは、捨てられなかったよ……」

「そうですか……」

そして何気なしに、俺も『紅椿』の肩部装甲を撫でた。

そう、俺は特に意識せず『紅椿』を撫でた。

撫でてしまったのだ。

俺自身、完全に油断していたとしか言いようがない。

『紅椿』はISであり、女性にしか起動できない。

だが例外も存在する。

世界初の男性操縦者（予定）の織斑一夏。

そして、外史介入のためにIS適正を意図的に付与された――

キイイイ……！

俺が我に返ろうが、美波が俺のミスに気付こうがもう遅い。

気付いた時には――

「う……そ……」

『紅椿』を纏った俺と、「あーあ」みたいな顔をした美波、そして俺がISを起動させたことで哑然としてゐる束さんがいた。

l s i d e 翔 o u t l

l s i d e 美波 l

翔ちゃんがやらかした。

よりにもよって、束ちゃんの目の前でISを動かしちやつたのだ。

あーあ、束ちゃん目が点だよー。

「検査……」

「束ちゃん？」

「シヨウママ、今すぐ検査しよう！」

「えつちよつま」

そんな感じで、ラボの奥に翔ちゃんが引きずられていつて30分ほど。

難しい顔をした束ちゃんと、気持ちげっそりしている翔ちゃんが戻ってきた。

「むむむ、まさかシヨウママがIS適正Aとは……」

「ちなみに私もAだよー。学校で受けた簡易検査だけどー」

「えっそうなの？ でもIS適正は遺伝するもんじゃないしなあ…例えば男女の双子でも、男はISを起動できないのは凡人共が実証済みだし……」

そういうえば『白騎士事件』の直後は、そんな検証をした研究機関もあったねー。

「——よしっ！ それならショウママとナミママには、東さんから専用機を贈呈しよう！」

「専用機!?!」

「せっかく2人ともIS適正があるんだし、もらって損はないよ?」

「いやいや、美波はともかく、俺が専用機を持つてたらダメだろ」

あー…確かに危ないかなー。

「どうして?」

「専用機を持つてゐる〓IS動かせる。で、それがバレた場合、最悪どこぞの研究所に送られて、検体扱いされた後、ホルマリン漬けの未来が待つてゐるんですが」

あり得そう。というか、『ISを動かせるのは女だけ〓女は偉くて男はゴミ』なんてアンポンタン思想の女性権利団体に知られたら……うわあ……

「でもでも、待機状態にしておけば問題ないと思うんだよね。それに最悪バレても、IS

学園に逃げ込むって手段があるし」

あつ、そうか。専用機って待機状態にするとIS自体の形状が変わって、アクセサリーみたいになるんだっけ。

それにどうせ、織斑君がISを起動させたら翔ちゃんもIS学園行きが確定するんだし、今持つか後で持つかの違いなだけかも。

「でもなあ……」

「ダメかなあ？（上目遣い）」

「うっ……いやでも、分かってるんですか？ 俺達にIS学園で使える専用機を渡すってことは、『兵器』を載せるってことですよ？」

「うん。正直ISを兵器扱いされるのは腹立たしいけど、ショウママとナミママのため、自衛の一環って考えたらまだ許容できるかなあつて。一応名目上は“競技用”とも言ってるけどね」

「はあ……分かりました。有難くいただきます」

束ちゃんにそこまで言われて、とうとう翔ちゃんも折れたみたい。

「イエーイ！ それじゃあ張り切って作るよー！」

「あつ束さん、ちなみにその専用機って形状や装備について注文付けられます？」

「いいよ？ どんなの？」

「そうですねえ……口で説明するのも難しいんで、書くものもらえます?」

「いいよー。ほいこれ」

束ちゃんから紙と鉛筆を渡された翔ちゃんは、迷う仕草もなく、さらさらの紙に何かを描いていく。

「こんな感じにしてほしいんですが、可能ですか?」

「どれどれ……」

翔ちゃんから渡された紙を受け取って中身を確認する束ちゃん。

私も気になって、横から覗き込んで——って、これって!

「翔ちゃん、これってもしかして」

「俺達が乗る機体って言ったら、これがピッタリだろ」

l s i d e 美波 o u t

閑話　ここまでの主要な登場人物説明

ショウ↓北山翔（きたやま　しょう）

年齢：15歳（外史・ISでの話で、現実世界からの通算では2000歳以上）

出身：現実世界の日本

来歴：

ミナミと一緒に飛行機事故で死ぬはずが、外史に介入して物語を円滑に進める現地作業員になる。

外史の管理を行っている神・ロキの「一夏が気に食わん」の一言で、ミナミとともにISが存在する世界に送り込まれることに。

北山家の長男として転生し、妹として転生した美波とともに『原作』のシナリオに介入していく。

当初は介入の一環として、IS開発者の篠ノ之束と交流を持つが、元々情が無いわけでない（むしろ人並み以上にある）ため、紆余曲折あり束の“理解者”となる。

外史を渡り歩く中で、“戦士の誇りや矜持”に拘りを持つ。特にとある外史で受けた『為すべきことを為せ』という教えに強く影響を受けており、『何かを為すべき場面では、

それを為^せすものの性別に意味はない』という、ある意味男女平等の考えを持っている。
なお、ナデポを標準装備している。

ミナミ↓北山美波（きたやま みなみ）

年齢：15歳（翔の10分後に生まれる）

出身：現実世界の日本

来歴：

シヨウと同じく、外史介入の現地作業員になる。

北山家の長女として転生し、翔とともにシナリオに介入していく。

翔以上に情に脆いところがあり、束の”理解者”になることを望み、実際にそれを叶えた。

外史への介入については、仕事というよりは『旅行』のようなものと感じており、基本的にはその時その時を楽しもうとしている（ロキの軽いノリにも便乗したりする）。ただしシヨウに命の危険が加わりそうな場合は、その外史の重要人物に危害を加えてでもシヨウの安全を選択する（実際それで介入失敗となったケースもある）。

間延びした喋り方や癒し系の雰囲気から、IS原作の「布仏本音」にイメージが近いともいえる。

シヨウほどの出力はないが、ナデポ標準装備である。さらにこちらはハグポ（ハグをしてポツと相手のママになる）を装備している。

篠ノ之東（しののの たばね）

年齢：20代（女性の年齢に言及するもんじやないよ♪ b y 東）

出身：外史・ISの日本

来歴：

言わずと知れた、大天才^{天災}のIS開発者。篠ノ之箒の実姉。

原作通り、天才過ぎて周囲とのギャップを埋められず人間不信になっていたが、翔と美波という”理解者”を得て、多少はマシになる。

その際、翔と美波のことを”シヨウママ、ナミママ”と呼ぶようになる。……東は犠牲になったのだ。美波が持つハグポ……その犠牲にな。

IS学園入学（原作開始）までは、2人の専用機を作ったり、『紅椿』を完成させるべく設計を繰り返したりして過ごしている。

原作よりはマシになったものの、むしろマシになったせいで、妹の箒に対する罪悪感が大きくなり、なかなか自分から接点を持てずにいる。

ロキ

年齢：神様

出身：ヨトウンヘイム生まれのアースガルド育ち

来歴：

ご存知、北欧神話に出てくる悪戯好きの神。

本作では、主神に働くよう叱責され、外史の管理業務をやらされている。『ニートになれなかった僕はしぶしぶ就職を決意しました』

その後は管理の一環として、現地作業員として雇い入れたシヨウとミナミを外史に介らせている。

新しく出来た外史・I Sの主人公、織斑一夏が気に食わないがために、シヨウとミナミを介入させた張本人。史実通りのトラブルメーカーである。

ロキ曰く、「何やってもご都合主義なシナリオで『一夏すごーい』って流れになるし、あんなだけ朴念仁なのに5人？もっど？からの好意を受け続けるとかうらやまけしからん！」とのこと。完全にただの嫉妬です、本当にありがとうございました。

原作開始くクラス代表決定戦

第5話 入学

—— I S 学園

I S 運用協定、通称「アラスカ条約」に基づいて設置された、I S 操縦者やメカニックスを養成する国立高等学校である。

東京湾沿岸にある人工島に存在し、本土からの出入りは海上モノレールのみ。

国際規約により、建前上はあらゆる国家機関に属さず、いかなる国家や組織であろうと学園の関係者に対して一切の干渉が許されないという、地理的にも法的にも『孤島の要塞』と呼べる場所である。

そしてI Sは女にしか動かすことが出来ないため、その操縦者養成機関であるI S学園は、女子校と言って差し支えない。

当然、生徒は全て女子であり、男はごく一部の職員しかいない、まさに女の園であった。

そう、I Sを起動させられる“男”が見つかるまでは。

その報を受けた各国が緊急の適正検査をした結果、”さらにもう一人”男性操縦者が見つかるまでは――

IS学園、1年1組の教室――

学園生活最初のSHRで、クラス中の視線が、ある一点に集中していた。「えー、織斑一夏です。よろしくお願いします」

[[[[...]]]]

名前を言うだけの自己紹介をする”ただ一人”の男・織斑一夏に、さらに視線が集まる。

（「まだあるよね？」
あるよねえ？」）

「以上です！」
ガタンッ！
ドン！

期待のいう梯子を外されて、クラスの大半がコケたり机に頭をぶつけたりしていた。

——ガンツ！

「痛つてえ！」

「自己紹介もまともに出来ないのか、お前というやつは」

「げっ、千冬姉！」

——ガンッ！

「学校では織斑先生だ」

2度目の拳骨で織斑を撃沈させると、千冬が教壇に立つ。

「諸君、私が担任の織斑千冬だ。君達新人を1年で使い物にするのが仕事だ」

「「「きゃあああああつ!!」」」

女子生徒達の（黄色い）絶叫が教室中に響き渡った。

「千冬様！ 本物の千冬様よー！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

「はあ……毎年よくこれだけバカモノが集まるものだ……」

我先にとアピールを行う女子生徒達に、千冬は額に手を当ててため息をついた。

とはいえ、本人も口にした通り、彼女がIS学園に赴任してから恒例となっているわけだが。

「さて、SHRを続けたいところだが……入ってこい」

ウィイイン——

「えっ?」「どういうこと?」

教室のドア（自動）が開くと、騒がしかった教室内が一瞬で静かになった。

l s i d e 翔

「急遽この学園に入学することになった北山翔だ。自己紹介を」

「2週間前の緊急適性検査で適性が見つかってI S学園入学になりました、北山翔です。これからよろしくお願いします」

…予想はしていたが、本当に『I S起動↓拉致られてホテルに軟禁↓受験していた高校の合格取り消し↓I S学園に強制入学』のコンボを決められるとは思わなかったわ。

「「「えええええ!!」」」

うるさっ！ 廊下にいた時もうるさかったけど、それ以上だろ！

「男!? 2人目の男性操縦者!」

「マジで!」

「ああ、お母様私を産んでくれてありがとう! 今度の母の日はちよつと奮発するね!」
最後の人、君は一体何を言ってるのかな?

——バンバンッ

「静まれお前達! 何度もうるさくされたら敵わん!」

織斑先生が出席簿を教壇に叩き付ける音で、ようやくと静かになる。

「さて、北山の席だが、後ろから2番目だ。ではここでHRを終わりとする」

そう言うのと、織斑先生ともう一人の先生（実技試験を受けた時の試験官で、確か山田真耶先生だったか）は教室を出て行った。

「翔ちゃん、こっちこっちー」

そして最後列の席から、美波がブンブン手を振っていた。

自分の席（苗字が同じだから、必然的に名前順で美波の前）に座ると、わらわらと周りの女子生徒達が集まってきた。

ちなみに織斑の方にも集まっているようで、教室の前と後ろで、人口密度が偏っている。

と思つたら、織斑の方に集まっていた人達もなんかこっち来た。

「あれ？ 織斑君の方に行つたんじゃないの？」

「そうなんだけど、なんか篠ノ之さんに連れていかれちゃったのよ」

「そうなの？」

「うん。なんでも2人は幼なじみなんだって」

「へへ」

という女子達の話の横で、俺は適性検査を受ける前に美波から聞いていた内容を思い出した。

突然だが外史とは、現実世界で創造された創作世界だ。

創作。つまり前提として、その世界を作り出すための原点、『原作』と呼べるものがあり、当然この外史にも『原作』が存在する。

あいにく俺は知らなかったが、美波がその『原作』の内容を知っていた。とはいえ、最後に見てから長い時間が経っているから、うろ覚え程度らしいが。

その中で、織斑一夏の周りには様々な女子が引き寄せられるようだ。ざっと挙げると篠ノ之箒

セシリア・オルコット

：I S 開発者である篠ノ之束の妹、後に専用機持ち

鳳鈴音

：中国代表候補生、専用機持ち

シャルロット・デュノア

：フランス代表候補生、専用機持ち

ラウラ・ボーデヴィツヒ

：ドイツ代表候補生、専用機持ち

なあにこれえ。専用機持ちバーゲンセールしすぎだろ。

こいつらを織斑から引き離すのがロキあのやろうからの指示なわけだが…マジかよ…

「ところで、北山君ってナミママと……」

「兄妹だよー」

「えっ！そうなの！」

というか美波……どうしてすでにクラスメイトから『ママ』呼ばわりされてるんだ……？

「——ちよつとよろしくて？」

振り返れば金髪縦ロール奴がいた。

そして集まっていた面々は、危険を察知したのか美波以外は撤収済みだった。

「セシリア・オルコットさん、だったか？」

「ええつと……どちら様？」

いやいや、これ間違いなく下は地雷だろ？

⇒「セシリア・オルコットさん、だったか？」

「ええつと……どちら様？」

「セシリア・オルコットさん、だったか？」

「あら、ちゃんとわたくしのことをご存じですのね」

「一応、専用機持ちについては調べたからな。それで何か用か？」

「世界で2人しか居ない男性IS操縦者がどのような人物であるか見に来たんですわ。北山さんでよろしくて？」

「ああ。こつちもオルコットさんで？」

「ええ、構いませんわ」

その後は特に当たり障りのない会話が続き、チャイムとともにオルコットは引き上げていった。

あの時選択を間違えてたら、きつとすげえ面倒なことになってただろうな…

I s i d e o u t

—————

入学早々の授業は、真耶によるISの基礎項目についてだった。

一般に知られている内容もあるにはあるが、ほとんどが専門的な内容だ。

とはいえ、IS学園を志望し、なおかつ入学試験に合格するだけの实力があるなら、そ

こまで難解でも無いのだろう。
事前に勉強していれば。

「——ではここまでの、質問のある人」

板書を終えた真耶が見回すが、誰一人手を上げない。

「えーつと……それじゃあ織斑君？」

とりあえず目の前の生徒を指名するが、

「……」

「織斑君？」

「っ!? は、はいっ!」

体をビクンツとさせながら、織斑は慌てて返事を返す。

「分からないところがあつたら、遠慮なく言ってくださいねー」

「ええつと……」

「はい」

「ほとんど全部わかりません!」 ガタンツ! ドン!

あまりにもなカミングアウトに、S H Rの時のようにクラス全員（織斑除く）がコケた。

「……はい？」

『お前の授業分からん』と言われた形の真耶は、ほぼ半泣き状態。

「……織斑、入学前の参考書はどうした？ 『必読』と書いてあったはずだが」

「あぁ……間違えて捨てました」

——ガンッ！

「ぐはっ！」

「再発行してやるから、1週間で覚えろ」

「い、いや、1週間であの分厚さは……」

「1週間だ、やれ」

「はい……」

ちなみに織斑は、翔も自分と同じだと思っていたようだが、真耶に当てられた問題をすらすらと答えているのを見て絶句していた。

『原作知識＋適性検査前に受けたI・S開発者直々の授業』は伊達ではないのだ。

なお、休み時間は筈に連れ出され、授業中は席が離れていることもあり、織斑と北山兄妹のファーストコンタクトは未だ果たされていない。

セシリアからの接触はあったものの

「いや、君誰か知らないし」「代表候補生って何?」「教官?それなら俺も倒したぞ?」
と、セシリアの地雷を尽く踏み抜いていた。

第6話 クラス代表

3 限目は、授業ではなく千冬の

「クラス対抗戦に出る代表者を決める！」

という一言から始まった。

「クラス代表者とは、対抗戦だけでなく、生徒会の会議へ出席したり……つまりクラス委員長みたいなものだ。自薦他薦は問わない、誰かいらないか？」

「はい！ 織斑君を推薦します！」

「私も織斑君が良いと思います」

1人上げると、ぞくぞくと織斑を推薦する声が上がっていく。

「お、俺え!? 俺はクラス代表なんて……」

「推薦された者に拒否権などない！」

「ぐっ……」

バツサリ切られた織斑だったが、なぜか後ろ——翔の方——を向いて

「な、なら！ 俺は翔を推薦するぞ！」

「は？」

「なら私は北山君を推薦します！」

「私も！」

今度は翔への推薦がぱらぱらと上がつていく。

——バンッ！

「待つて下さい、納得いきませんわ！」

机を叩いて立ち上がると、セシリアは織斑と翔の方へ視線を向ける。

「クラス代表はISの実力がトップの人間になるべきですわ！イギリスの代表候補生であるわたくし、セシリア・オルコットを差し置いて、ただ珍しいというだけで男なんか代表になるなんて認められませんわ！」

さらにボルテージが上がったのか、セシリアの演説は続き、

「大体、文化としても——」

「そこまでしておけ、オルコット」

「！！！！！！」

突然翔から出た言葉と圧に、セシリアだけでなく、教室にいた全員が固まった。

「オルコット、それ以上口にすれば大きな問題になることは、代表候補生のお前なら理解できるだろう?」

「……っ!」

そう言われてセシリアは、先ほど口にしようとしていた言葉を思い出し、背筋が冷たくなるのを感じた。

『文化としても後進的な国』、もしそれを口に出していたらどうなっていたか。

候補生とは言え、国家の代表がそのような発言をしたら——最悪、日英間の国際問題に発展していたかもしれない——

どんどん顔が青ざめていくセシリアを見て、翔は織斑の方を向いた。

「それと織斑、なんでお前は人のこと勝手に呼び捨てにしてんだよ」

「な、なんでだよ!? 男同士なんだし呼び捨てでいいだろ!」

「男同士なら初対面の相手にも呼び捨てでいいと? んなわけないだろ」

「良いじゃねえか! 細かい奴だな!」

「……はあ、もういい」

織斑のアンポンタンな回答に、今度は千冬の方を見て

「それで織斑先生、一応他薦2、自薦1なわけですが、どうします?」
すると千冬は予め決めていたかのように

「1週間後、第3アリーナで織斑、北山、オルコットの3人で三つ巴の模擬戦を行い、一番勝率の高い者をクラス代表とする！」

と、代表決定戦の開催を宣言した。

その際、IS初心者 of 織斑がセシリアに対して『ハンデはいるか?』『男が女に対してハンデを付けるのは当然だろう』的なニュアンスのことを言つて、クラスメイト達から失笑を買ったのはほぼ原作通りである。

Is side 翔一

なぜか代表決定戦に巻き込まれた。

まあそれはいい。織斑がクラス代表をやりたくないばかりに誰かを巻き込むのは目に見えていた。それが俺だっただけだ。

むしろ問題なのは、オルコットを黙らせるために軽くとはいえ、殺気を叩きこんでしまったことだ。

”男なんか”のくだりはちよつと腹が立ったがまだいい。男が珍しいからって理由で代表に選ばれるのが気に食わないという気持ちも分かる。ただ、自分の立ち位置を弁えないセリフは許容できなかったというか……

——はい、やりすぎました。

ちなみに織斑に関してはお互いもつと叩けばよかったと思ってる。あまりにお話にならなくて、自分から切り上げたわけだが。

そして放課後、山田先生から寮の鍵を渡され、美波と一緒に下校。割り当てられた1210号室で2人して茶を飲んでゐる。

……お察しの通り、美波と同室だ。

寮の部屋は意外と広くて、小さな台所もあつて割と満足している。

……当初1週間は実家から登校のはずが、セキュリティの関係だなんだで急遽入寮させられたのはやや不満だが。

ある程度荷物をまとめてボストンバッグに詰めていて助かった。

『手際が良すぎないか』だつて？ そりや原作知識持ち（美波から又聞き）だし、多少はね？

「翔ちゃん、代表決定戦は専用機を使うのー？」

「いや、出来ればそれは避けたいな」

美波が左腕に付けた腕輪——待機状態の専用機——を振るのを見て、俺も胸元からドッグタグ状の専用機を取り出した。

確かに俺と美波は専用機を持っている。束さんお手製、完全フルオーダーの、この世

に2つとない代物だ。

だが、まだ使うわけにはいかない。

ただでさえ出処不明かつ学園にも知られていない専用機、しかも他に類を見ないこれを不用意に表に出してしまえば、確実に怪しまれる。

『その専用機はどこから来たのか』と。

そうなれば、芋づる式に東さんとの関係が露呈するかもしれないし、I S 開発者・篠ノ之束を狙う各国の陰謀に巻き込まれかねない。

「でも、当日までに訓練機を借りられるかなー?」

「最悪ぶつつけ本番かもな」

「こういう時、東ちゃんのラボで練習してて良かったよねー」

「だな」

あの日、やらかして紅椿を起動させてからI S 学園入学までの間、東さんのラボでI S の操縦訓練を積んできたのだ。しかも休日ほぼ1日中。

ぶっちゃけ、某代表候補生程では無いにしても、和製ミ〇トさんより^{組織}はまともに動かせる自信がある。

——コンコン

「どちらさまー?」

「せ、セシリア・オルコットですわ」

「セシリアちゃんー?」

美波がドアを開けると、そこには確かにオルコットがいた。

とりあえず廊下に立たせておくのもあれだと、美波が部屋に招き入れた。

「それでどうしたのー?」

「あ、あの……北山さん……」

「俺?」

なんだ? クラス代表決めるときに殺気ぶつけた件で抗議しに来たか?

「その……」

「あ、ありがとうございます!!」

「へ?」「ほ?」

え? お礼? お礼ナンデ?

「北山さんがあの時わたくしの話を遮って下さらなかったら、とんでもないことになっていました」

まあ確かに、少なくともクラスの大^日半^本から^{ひんしゆく}響^{ひんしゆく}を^{ひんしゆく}買^{ひんしゆく}ったのは間違いないだろう。それにあのままエスカレートしていったら、もう1人の失^織言^班発^一生^夏器も加わって、收拾が付かなくなってたろうし。

「で、ですから、わたくしの立場と言いますか、誇りを守ってくださいった北山さんに感謝をと……」

「お、おう……」

「ですが!」

「お、おう!」

「代表決定戦とは話が別ですわ! 当日は学園の訓練機で出られるのでしようが、わたくしは専用機『ブルー・ティアーズ』で出場させていただきますわ!」

ビシツと指さして、オルコットは高らかに宣言した。

「模擬戦とはいえ真剣勝負だ。その時使えるものを最大限利用するのは当然だろう」

「それと何処かの誰かさんのように、『男ならハンデを』なんて口になさいませんよう」

「何を言ってるんだ、そんなの当たり前だろう。それに――」

ああ、まずい。こんな場所で言うセリフじゃないのは分かっているんだがなあ……

「戦場^{いくさば}で矛を交える戦士に対して、男だ女だと宣^{のたま}うのは無粋の極みだ」

l s i d e o u t

l s i d e 美波

「で？ 翔ちゃんは賢者タイム終わったー？」

「賢者タイム言うな……」

セシリアちゃんが部屋に戻ってから、翔ちゃんはずっとフローリングの上でo r zしている。

学園ラブコメの世界で、ポロツと『フロム脳』っぽいのが出てきちゃったようなものだからねー。仕方ないねー。

「ぐううう！ いっそ殺せえええ！」

「それはできない相談だねー」

それからしばらくおろづてたけど、やっと心の整理がついたのか、ベツトの上に座り直した。

「とりあえず、明日山田先生に訓練機を借りられないか聞いてみるか」

「そうだねー。ちなみに借りられるとしたら『打鉄』と『ラファール』、どっちがいいー？」

「そうだなあ……機動力が欲しいから、出来ればラファールを使いたいな」

確かに2つを比較したら、打鉄は防衛力重視でラファールは機動性重視だもんねー。

「あれ？ でも入学試験の実技じゃ打鉄使ってなかったー？」

「だからってのもある。試験の時には目立たないように全力は出してなかったからな。それで代表決定戦で全力機動したら、色々疑われるだろ？ だからラファールを使つて

『こつちの方が相性いいつぽいです』って言つて誤魔化す」

「ええ……」

まーやん山田先生ならともかく、織斑先生は誤魔化しきれないと思うけどな……

「まあ、なるようにしかならないだろうさ。とにかく明日次第だ」

「それもそうだねー。それじゃあ今日はもう寝よつかー」

「ああ。明かり切るぞー」

「ほーい。おやすみー」

l s i d e 美波 o u t l

第7話 訓練機貸し出し

「織斑、来週の代表決定戦についてだが、政府から専用機が手配されることになった」

翌日のSHR、伝達事項を言い終えた千冬は、織斑の方を向いて言った。

「織斑君に専用機……？」

「1年のこの時期に専用機って……」

クラスメイト達も、突然のことに動揺が隠せないでいた。

「それを聞いて安心しましたわ。訓練機程度では、わたくしの『ブルー・ティアーズ』の相手なんて無理でしょうから」

横からセシリアも話に入ってくる。

「専用機……」

「そうだ」

「……専用機って、そんなに凄いのか？」

ガターンッ！

教室内全員（織斑本人と千冬を除く）総ズッコケである。

「織斑……貴様しつかりと授業を聞いていなかったのか……」

「おりむ、ISのコアは世界中で467個しかないんだよう？ その貴重な467個の内の1つを、おりむー用に貸してくれるって言ってるんだよう？」

「おおつ、そうなのか」

近くの席の生徒（布仏）の説明を聞いて、織斑はポンと手を打った。

「で、だ。北山については……」

千冬は言い淀むが、

「当然無いでしょうね」

翔はやれやれというジェスチャーで、さも当然のように言った。

「当然って、なんでだよ？」

「織斑、布仏さんの話を聞いてたか？ ISコアは貴重なんだ。本来1つ捻出するのも大変な代物なんだよ」

「だからなんで……」

「あのなあ……もしISコアが1つしか無い場合、ブリュンヒルデ織斑千冬の弟と何の後ろ盾もない男、どっちに渡すかなんて決まり切ってるだろ」

「なっ！ 千冬姉は関係ないだろ！」

織斑が翔を睨みつけるが、

「やつぱり、千冬様の弟君だから……」

「そりやそうなるよね……」

女子達の中では、『やはりか』というヒソヒソ声が聞こえてくる。

織斑は千冬の方を見るが、千冬は躊躇いの顔をして目を逸らした。

「すまないが、北山には訓練機で出場してもらうことになる」

「分かりました。予想通りではあるんで、問題ありません」

「ちよつと待ってくれよ千冬姉——！」

——スパ—ンツ

「ぐあつ——」

「織斑先生と呼べ。そして今言ったことに変更はない」

出席簿アタックで織斑を黙らせたところで、SHRは終了した。

—————

—side真耶—

「訓練機の貸し出しですか？」

お昼休み。職員室の私の席に、北山君と北山さんがやって来ました。

代表決定戦までの間、訓練機を借りられないかという相談のようです。

「基本訓練機は予約制で、来週いっぱい予約済みなんです」

「ああ、やつぱりですか……」

「で・す・が!」

そう言つてタメを作りながら、私は机の上にある書類の内の一枚を取り出しました。

「学園上層部から、男性操縦者に機体を融通するように通達が来てるんです」

「融通、ですか?」

「はい! 代表決定戦までの間、訓練機の内1機を貸し出すことになってます!」

「おおつ、それはありがたいです! 最悪ぶつつけ本番になると思つてましたから」

北山君が喜ぶのも分かります。ただでさえ1人だけ訓練機で試合をしなければなら
ないのに、その訓練機が借りられずに練習もできないでは酷すぎますからね。

「あのー、質問なんですがー」

「? 北山さん、なんですか?」

「織斑君の専用機つて、まだ完成してないですよねー?」

「そうですね、確か、政府から委託された企業で開発中のはずですよ?」

聞いた話では、倉持技研が第3世代機として開発中とか。

「それと、さつき」男性操縦者に機体を融通」つてことは、織斑君も対象なんですよねー

「？」

「ええ、そうですよ」

「……織斑君本人、もしくは織斑先生経由で、貸し出しについて質問されましたか？」

「え、……？」

そういえば、織斑君から訓練機貸し出しに関して聞かれていないし、他の先生方からも連絡は受けていないような……

「おい美波、それってつまり……」

北山君が口元を引きつらせています。もしかしたら、私も引きつってるかもしれないせん……

「織斑君の方がぶつつけ本番になるんじゃないかなー？」

放課後に訓練機貸し出しを行うということで、北山君達が職員室を出て行った後、入れ替わりで入ってきた織斑先生に先ほどの話を確認したところ

「一夏あああ！ お前というやつはああああ……!!」

と、呪詛の様な声を上げながら腹部を押さえていました。

昨日から決めていた通り、ラファールを選択する。

「分かりました。それじゃあ初期化と最適化と最適化を始めましょう！」
フォーマツト ファイッティング

「え？」

ちよつと待った。山田先生今『初期化と最適化』フォーマツト ファイッティングつて言った？

「あの先生、訓練機の貸し出しなんですよね？」

「そうですよ？ 北山君には訓練機を一時的に”専用機”にして貸し出します」

「ファツ！」

「しゅげー」

いや美波さん？ しゅげーじゃないんだが。

「ほらほら、ささつとやっちゃいますよー！」

急かされるように、俺は並んでいた内の1機に乗せられた。

そして山田先生がISに接続されたPCで各種設定を行い、

「はい！初期化と最適化完了です！」
フォーマツト ファイッティング

30分ほどして調整が完了したようで、ISからケーブルを抜いた。

「それじゃあ北山君、ISを待機状態にするためには――」

シユパアアア――

「……あ」

ごめん山田先生、説明される前にやつちやった……束さんのところで何度もやってたから、ついうつかり……

「ええつと……『解除ー』って念じたら出来まして……」

「そ、そうなんですか……」

俺と先生の間に冷たい風が吹いた気がした……。

あ、ちなみにラファールの待機状態は、美波の専用機と同じ腕輪タイプだった。

美波のカラフルなトリコロールと違い、黒ベースに白いラインが1本入ったシンプルなものだ。

—————

こうして、訓練機（期間限定専用機）の貸し出しは終了した。

山田先生曰く、訓練機と違い、アリーナの予約には比較的空きがあるとのこと。

今日もこれから閉場までの間で空きがあるらしいから、動作確認も兼ねて行ってみるか。

「でも翔ちゃん良かったねー。ラファールと翔ちゃんの専用機が変な干渉しないでー」
あ、……その可能性もあったのか……

~~~~~♪

「? 誰からだ?」

スマホのディスプレイを見ると、登録されていない番号。

「もしもし?」

『神界のアイドル、ロキちゃんだよー!』

「……K A O K A W A に謝れ」

ウチのバカ上司

ロキからだった。

とりあえず美波にも聞こえるように、周りに人がいないことを確認してからスピーカーモードにする。

「ロキちゃんやつほー」

『やつほーい! いやあ、次の連絡は入学辺りで言ってたんだけど、なかなかタイミングが合わなくてねー』

ああそうだったな。もう9年も前の話だったから、すっかり忘れてたわ。

「で、連絡事項は?」

『つれないなあ。まあいいや、大したことじゃないんだけどね。どうも2人が介入した影響が、こっちの予想よりも大きくなりそうでねえ』

「……いや、大したことだろ」

「でも、束ちゃんと接触した時点で今更だよなー」

それはそうだ。美波曰く、『原作』の束さんは物語のラスボスの立ち位置らしいからな。そりゃ影響もデカいだろうよ。

『織斑一夏とその周辺は、間違いなく『原作』から大きく乖離すると思うから、気い付けて話』

「それこそ今更だな……」

というか、お前はのために俺達を介入させたんだろうが。

『そんじゃまた、次は年単位で間空かないように連絡するよ。アデュー!』

プツ ツー、ツー……

ホント今更なことばかり話して、ロキからの通話は切れた。

l s i d e   o u t

翔

## 第8話 代表決定戦ゝ V S セシリア・オルコットゝ

クラス代表決定戦当日。

3人がそれぞれ2戦ずつ、計3試合が行われることになり、抽選の結果、対戦順は以下のようなになった。

第1試合 織斑一夏 V S セシリア・オルコット

第2試合 織斑一夏 V S 北山翔

第3試合 北山翔 V S セシリア・オルコット

そして現在、翔は第3アリーナのピットで、美波の手を借りながらラファールの最終チェックをしており、翔と同じピット内に織斑も居るのだが……

l s i d e 翔 l

「なあ箒」

「何だ、一夏」

織斑の横には、幼なじみらしい篠ノ之がいた。

本来ピットには関係者以外立ち入り禁止だが、それを指摘する気はない。それを言うてしまえば、美波も関係者外ってことになるからな。

「俺さ、1週間前ISについて教えてくれって言ったよな？」

「ああ」

ほう、訓練機も借りずに何をしていたのかと思えば、ISの勉強をしていたわけか。参考書を間違つて捨てた、事前知識0なやつだったから、そこを先に補完するつて考へは無しではない。あれ<sup>織斑先生からの執行猶予</sup>全部覚える期限も1週間だったし。

……昨日用事があつて職員室に行った時、山田先生が「やつぱり北山さんの予想通りになつちやいましたゝ!!」つて涙目だったが。

「俺、今日まで剣道しかやって無かつた気がするんだが……」

「……」

「目・を・そ・ら・す・な」

ええー……ないわー……

確かにISは操縦者の身体能力や技術も無関係じゃないけど、そっちに全振りつてどいうことだよ？

織斑に手配されるISつて、どういうものかも知らされてないんだろ？それで近接装備に刀剣類が含まれてなかったらどうすんだ？というか、今気づいたけど、専用機まだ届いてないのか？マジで？

ふと視線をずらすと、美波も「まあ織斑君だしー」つて顔をしていた。ああそうか、「織

斑だから」で全部片付くのか。

「織斑くん！ 来ましたよ！ 織斑君の専用機!!」

そんなことを考えていると、山田先生と織斑先生がピットに入ってきた。

「織斑、大至急初期化と最適化を行う」

「織斑君、こっちに來て下さい」

「は、はいっ!」

「それでだが……北山」

「はい」

「織斑機の準備に時間がかかる。なので予定を変更して、お前とオルコットの試合を先に始めたい」

まあ、そうなりますよね。

ラファール  
こいつの場合も30分はかかってる。それが第3世代機ともなれば、もつとかかってもおかしくはない。

「美波」

「だいいじょぶ! すぐに動かせるよー」

美波からのVサインが返ってきた。

「——とのことなので、先に出ることについては了解しました」

「そうか」

「ただし」

「ん？」

「織斑機の準備が完了するまでの時間が稼げなくても、文句はなしでお願いします」

先に言質を取つとかなないと、あとでグダグダ言われたくないからな。

「当たり前だ。お前は全力で戦えばそれでいい」

「分かりました——それでは」

l s i d e 翔 o u t l

l s i d e セシリア l

『間もなく第1試合を始めます』

（やつとですか……）

『尚、予定を変更して第1試合は北山翔対セシリア・オルコットになります』

「ふえ!!」

て、てつきりあの織斑一夏と対戦すると思っていたせいで、く、口から変な声が出てしまいましたわ！

『両者、アリーナへ入場してください』

アナウンスに従って、ブルー・ティアーズを纏った状態でカタパルトから射出、アリーナに入場。

一瞬眩しさ感じると、反対側から北山さんも入場していました。

「あーつと、オルコット、聞こえてるか」

プライベート・チャネルから、北山さんの声が聞こえてきます。

「ええ、聞こえてますわ。まさか貴方と先に戦うことになるとは思いませんでしたが」

「織斑の専用機を用意してた連中が、なかなか時間にルーズだったようだな」

「あら、いけない方々ですわね」

軽い雑談が終わると、わたくしは改めて北山さんの機体を観察しました。

「やはり訓練機、ですか……」

「まあな。だからって手加減いらないぞ」

「分かっておりますわ」

そうしてわたくしがスターライトmkII<sup>レイザライフル</sup>を展開。北山さんもラファールの標準装備であるウェント<sup>アサルトライフル</sup>を展開したところで

壮絶な撃ち合いが始まりました



l s i d e セシリア o u t

l s i d e 千冬

「なんだよ、ぐるぐる回って撃ち合ってるだけじゃないか」

調整のために『白式』に乗ったままモニターを見ていた一夏が呑気なことを言っているが、私と山田君はそれどころではなかった。

ぐるぐる回って撃ち合う、何も知らなければそう見えるだろう。

だがあれは円状制御飛翔サークル・フライングと呼ばれるもの。

互いに円軌道を描きながら射撃を行い、それを不定期な加速をすることで回避する、高度な機体制御が要求される代物だ。

代表候補生であるオルコットはともかく、1週間ラファールに乗っただけの北山が出るものではない、はずなのだが……

「山田君」

「い、いいえ、入学試験の時にはまったく……それにあの時は、打鉄を使ってみましたし……」

作業の手は止めていないものの、山田君の顔も気持ち青褪めている。

（あいつは一体、何者なんだ……？）

l s i d e 千 冬   o u t

l s i d e 翔

（やつぱり、こちらが押されてるか……）

射撃と回避を続けながら、俺は手詰まりを感じていた。

いくらラファールが機動性重視の機体とはいえ、未改修で第3世代機のブルー・ティ  
アーズを相手にするのは荷が重い。

バイザーからの情報を見ると、ラファールのS シールド・エネルギー Eが3割、ブルー・ティアーズが  
6割になっていた。むしろオルコット相手によく4割も削れたもんだ。

しかも、これはまだ前哨戦だ。なぜならブルー・ティアーズには――

「流石ですわ、北山さん」

そう言って、オルコットは射撃と高速機動を止めた。

「手を抜いていたわけではありませんが、ここで奥の手を出ささせていただきます。お行  
きなさい、『ブルー・ティアーズ』!!」

オルコットから離れた4機のBT、レーザービットが俺の周りを囲む。

絶体絶命……本来なら。だがもし、事前に美波から聞いた情報が正しければ――

——バラバララッ！

「そんな攻撃にあた——えっ!?」

アサルトカノン

やったことは単純。右手にガラムを展開してオルコット本人を攻撃。向こうが回避している間にビットに接近、左手にレイン・オブ・サタディを展開してビットをハチの巣に。

事前情報通り、オルコットは『自分が回避行動をしている間はビットを操作できない』

「くっ！ ですがまだっ！」

オルコットの方も、隠し玉だったであろう2機のミサイルポッドを展開して応戦する。

そしてビットを全て撃墜した時には、ブルー・ティアーズのSEは3割、ラファールは1割を切っていた。

「はあ……はあ……そろそろ、降参なさいますか？」

「降参、降参ねえ……」

SEの残りは1撃圏内。その上、ビットを潰すために撃ちまくったから、装備のほぼ全てが弾切れ。

うーん、これは勝ち目ないかなあ。けど、

「ちなみに、もしオルコットが俺の立場だったらどうする？」

その問いに、オルコットは一瞬虚を突かれたような顔をしたが、

「フフッ……SEが尽きるまで、戦うのみですわ」

「だよなあ」

「なら、最後まで戦おうか！」

残っていたブレット<sup>近接</sup>・スライサー<sup>ブレイド</sup>を展開すると、俺はオルコットに向かって

——ドンッ！

「瞬間加速<sup>イグニッション・ブースト</sup>!？」

ここ<sup>イグニッション・ブースト</sup>まで使わずにとっておいた瞬間加速<sup>イグニッション・ブースト</sup>を使って、真正面から一気に距離を詰める。

そしてオルコットの装甲外部分を狙って

「さ、せませんわっ！」

咄嗟にライフルで庇われるが、そのライフルはオルコットの手から弾かれた。これで

——  
「まだ……っ！ 『インターセプター』！」

オルコットの手にもショートブレードが展開される。

「うおおおおお!!」

「はあああああ!!」

俺はオルコットの首を、オルコットは俺の胴体を切り裂くように得物を振り上げ、そして――

『両者、SEエンプティ。よってこの試合は引き分けとなります』

l s i d e  
翔 o u t l

## 第9話 代表決定戦 vs 織斑一夏

——第3アリーナ、観客席

第1試合を終えて、観戦していた1組の生徒は先ほどの試合内容について盛り上がっていた。

「まさか、オルコットさんと引き分けるなんてねえ」

クラスの下馬評ではセシリアが圧勝だった。

それが蓋を開けてみれば、善戦どころかドローにまで持ち込んでいたのだ。驚かない方がおかしい。

「特に最後の瞬間イグニッション・ブースト加速、すごかったよねえ！」

「あれって、普通2，3年生になってから習うんじゃないかったっけ？」

「そうなの?!」

「北山君すごいなー」

クラスメイト達が翔を賞賛する中、美波は腕を組んでうんうんと頷いていた。

（翔ちゃん、ラボの壁に何度も突っ込んだ甲斐があったねー）

翔は入学前の間、束のラボでISの操縦訓練をすると同時に、イグニッション・ブースト瞬間加速の練習もし

ていたのである。

無論、いくつもの世界を渡り歩いてきた翔とはいえ、いきなりうまくいくはずもなく、制御をしくじりラボの壁に激突した回数は1度や2度ではない。

「こうなつて来ると、次の試合も楽しみだねー!」

「私は北山君が勝つと思うなあ」

「私は織斑君ー」

彼女達の話題は、次の試合に移っていた。

「ところでナミママ、北山君がアリーナで練習してるのはよく見かけてただけど、織斑君って見かけたことないんだよねえ。何か知ってる?」

「あゝ……それはねー……」

美波は一瞬、言っているのかどうか悩んだが

「試合前のピットにいた時に聞いたんだけどー……」

「「「うんうん!」」」

「織斑君って、いつも箒ちゃんと一緒だったでしょー?」

「箒ちゃん……ああ、篠ノ之さんのことね」

「「「それでそれで!」」」

「1週間、ずっと剣道ばかりやってたんだってー……」

「「え……？」」

美波の話を聞いていた全員が絶句した。

l s i d e 千冬

北山には驚かされたが、ともあれ、あいつが時間を稼いでくれたおかげで、一夏の白フイッティング式は最適化が完了した。

「織斑、準備は出来たな？」

「ああ」

そう返事を返す一夏の目には、闘志が宿っているように感じる。

先ほどの試合を見ていた時には反応が薄くてあれだったが、やる気になったようで――

「あんな卑怯なマネ、俺は許さねえ！」

「は？」

卑怯？ 何を言っているんだ？

『間もなく第2試合を始めます。両者、アリーナへ入場してください』

「行ってくるぜ、千冬姉！ 俺があいつの間違いを正してやるっ！」

「ちよつと待て一夏――！」



どういふことか問いたです前に、一夏はピットから飛び出して行ってしまった――  
I s i d e 千 冬 o u t

I s i d e 翔

相打ちになつた俺とオルコットは、同じピットに引き上げて機体の修理と補給を行つていた。

ちなみに修理と補給は、整備科（2年以降に作られる、ISの開発や研究、整備に特化したクラス）志望の生徒がやってくれるらしい。すごく助かる。

「しょーちゃん、修理と補給終わったよ」

「はいよー」

だぼだぼの袖で手を振る布仏さんに、俺も手を振つて合図する。

なぜか知らんが、初対面の時に「しょーちゃんつて呼ぶね」と突然宣言されたのだ。そして肯定も否定もする前に居なくなつてしまい、そのままずっとなのである。

というか布仏さん、整備科志望だったのか。確かにISを乗り回す姿は想像出来ないが……

『間もなく第2試合を始めます。両者、アリーナへ入場してください』

「行くとしますか」

「ご武運を、と言っておきますわ」

ラファールに乗り込んでいると、補給待ちのオルコットが声をかけてきた。

「なんだ、応援してくれるのか？」

「ええ。共に全力を尽くした仲です、それくらいはいたしますわ」

「そうか。なら、ありがたく受け取っておく」

と、オルコットとの会話を終えてアリーナに入場したら、目の前に西洋鎧のような、真つ白い機体に乗った織斑フオーマツトがいた。

どうやら、初期化と最適化の時間はきっちり稼げたようだ。

そして試合開始のブザーが鳴つたと同時に――

「翔！ 俺はお前みたいな卑怯者、絶対に許さねえ！」

いきなり織斑がよく分かんこと言い出したんですが？ しかもオープン・チャネルで。

先程まで歓声に沸いていたアリーナが、水を打ったようになった。そりやそうだ。オープン・チャネルってことは、俺は当然、管制室やピット、観客席にも音声を送られてんだから。

えーつと、とりあえず俺もオープン・チャネルで……

「北山から管制室」

「はい。管制室山田です」

山田先生、調整が終わって移動してたのか。

「先ほどの試合で、俺はオルコットに対して何か卑怯と呼ばれるような行為や違反行為をしましたか？」

「いいえ、公式レギュレーションに準拠した、クリーンな戦いでしたよ」

との回答が返ってきた。

「ありがとうございます……で、織斑。お前は何をもつて俺が卑怯だと？」

「何をだとい!? 最後のあれは何なんだよ！ オルコットさんの首を狙ったあれは！」

いや、何でも何も、相手の弱点を攻めるのは戦いの常識だろうが。過信しすぎるのも問題だが、絶対防御だってあるんだぞ？

「卑怯なマネしやがつて！ あれが男のやる事かよ！ 女相手にそんなことして！」

「なら、弱点にある部分なんか狙わず、ただただ装甲を狙つてると？」

「そうだ！」

ほう……？

「……つまり、互いに全力を尽くして戦つていたオルコットに対して、手を抜くべきだったと？」

「そうだよ！ 女は守るべきものだろ！ 女相手に本気出してんじゃねーよ、男として恥ずかしくないのか！」

なるほど、男は女と戦うなら本気を出すべきじゃない、手加減して然るべきだと。言い換えれば『女には本気で戦う価値はない』と。

ああ、なんだろうな。今までで出会った人達を思い出してきたわ……

——為すべきことを為せ、と後進を導き、自らも為すべきことを為して散つていったとある世界での上官<sup>伊 隅 大</sup>。

——父祖の地と、そこに住む民を守るため、その身を毒に冒されながらも、命を賭して曹魏の軍勢と戦い退けた孫呉<sup>雪 進</sup>の英雄。

——愛した男の魂を守るため、不死者となつて250年もの間戦い続け、最後は輪廻に還つていった鋼<sup>リファンス・サンドロット</sup>の聖女。

皆すごい人達だった。自分の使命や信念、誇りのために最後まで戦い抜いた、尊敬できる女性達戦士だった。

そんな女性達を、『本気で戦う価値はない』と言うのか……

戦士の誇りを……矜持を踏みにじるか……っ!!

「もういい……それ以上嘯さえずるな」

——ドンッ!

「なっ!」

イグニッション・ブースト

瞬時加速で急接近した俺に、織斑が怯む。

その間左腕に展開するのは灰色パイルバンカーの鱗殻、通称『盾殺シールド・ピアースし』。

セシリアの機動力が相手では当てられないと使わなかったそれを——

——ドガンッ! ドガンッ! ドガンッ! ドガンッ! ドガンッ! ドガンッ!

「ぐあああああ!?!」

織斑に向けて、装填された6発全て叩き込む——!

『白式、SEエンプティ。勝者、北山翔』

やっと勝ち星が付いたが、ただただ不完全燃焼感だけが残った――  
l s i d e      o u t l  
翔

## 第10話 代表決定戦～全試合終了後～

代表決定戦の第3試合は前の試合同様、短期間で決着した。それというのも

「いやあ、オルコットさん、激おこだったねえ」

「そりゃあねえ、あんな事の後だもん」

開幕からレーザーライフルで織斑を撃ち続け、近付かれる前にSEを空にして完封したのである。しかも執拗に頭狙いヘッドショットと胸狙いハートショットを仕掛けて。

どう見ても、「男が女の装甲外を狙うのは卑怯」と抜かした織斑に対する意趣返しである。

しかもセシリアの顔が、試合終了までただただ虚無だったのが、余計に彼女の怒りを物語っていた。

「正直さあ、ちよつと織斑君には幻滅しちゃったかなあ」

そう言った女子生徒——相川清香に、周りの視線が集まる。

「最初は女性に優しい人だなあって思ってたんだけど、今日のを見ちゃったらさあ……」「うーん……『女は守るべきもの』って言ってたけど、単純な優しさから言ってるのか、私達女を自分より下に見てるのか分かんなくなるよね……」

「ナミママはどう思う?」

清香に話を振られた美波は、そうだねえと考える素振りを見せると

「織斑君は、1世紀ぐらい生まれるのが遅かったんだと思うな—」

「い、1世紀?」

「うん。第2次大戦より前に生まれていれば、男尊女卑が世界の常識だっただろうから、真意はどうあれ『男は女を守って当然』って考えで全く問題なかったんだと思うんだ—」  
「それって、今の時代では異端だど?」

「そう思うよ—。翔ちゃんは比較的男女平等って考えだけど、それでも今の時世だと良く思われないこともあるから—」

「[[[.....]]]」

美波の感想に、1組の面々は黙り込むしかなかった……

l s i d e 美波—

「翔ちゃん、お疲れさま—」

「ああ……」

第2試合の後、翔ちゃんはすぐに寮に戻っていたらしい。

私が寮の部屋に戻ると、翔ちゃんはベッドに座り、組んだ手の上に頭を載せていた。



これは今までの経験から、かなり自己嫌悪に陥ってるなー。

「ホント、自分ではもつと自制できると思ってたんだけどなあ……」

「うん」

頷きながら、翔ちゃんの隣に座る。

「この外史とは別の話だったのも、分かってるつもりなんだ……」

「うん」

「それでも……大尉や雪蓮の矜持が、献身が全て否定されたような気がして……」

「うん」

翔ちゃんの頭をポンポン撫ぜる。いつも私にやってくれる、『元氣出せ』というサイン。

しばらくそうしていると、翔ちゃんが顔を上げた。うん、切り替えられたっぽいねー。

「とりあえず食堂にいこー。観戦中に飲んだシユワシユワ<sup>炭酸飲料</sup>がお腹の中から無くなつて、ペコペコなんだよー」

「観戦中にシユワシユワつて……ビール片手に野球観戦してたおっさんみたいなこと言うなよ」

うんうん、ツツコミが出来るぐらい元氣になったねー。

——コンコン

「ん？ どちらさまー？」

「わたくしですわ」

「ありや、セシリアちゃんー？」

ドアを開けると、ほんのり湯気の上がったセシリアちゃんがいた。

シャワー浴びたんだろーね。今日の試合でいっぱい汗かいただろうしー。

「北山さん、この度はお礼を申し上げたく参上しましたわ」

「お礼？ いったい何の？」

「わたくし……いえ、わたくしを含めた女性操縦者の誇りを守って下さったことについてですわ」

「おおー。何か話が大きくなってきたぞー。」

「あの時、織斑さんの言葉に貴方が怒りを向けてくださったこと、『女に本気で戦う価値はない』という主張を否定してくださったことで、わたくし達女性操縦者の誇りは守られました」

「そんな影響力、あの行動には無いと思うんだが……」

「いいえ、男性操縦者である織斑さんの主張を、”同じ男性操縦者”である北山さんが否

定されることに意味があるのです」

「同じ男なら、か」

ごめんねーセシリアちゃん、たぶん翔ちゃんが否定してもダメだと思うんだー。言い方が悪いけど、織斑君って『自分の正義、自分の理想』の中だけで生きてるっばいからねー……

もしかしたら「翔は間違ってる！なのにみんな翔のことを肯定する！みんな騙されてるんだ！俺がみんなを助けたいと！」とか言い出す日が来たり……しそうだなー……

「それと、ですね……実はお願いがありまして……」

「お願い？」

「その……わたくしのことを『セシリア』と、よ、よよ、呼んでいただきたいのです……」

「え？」

翔ちゃんにセシリアルートの確変キター（。△。）——！

「その代わりと言ってはなんです、北山さんのことを『翔さん』とお呼びしても、よ、

よろしいでしょうか……?」

「あ、ああ、構わない」

「そ、それでは……これからよろしくお願いします……翔さん」

「分かった……セシリア」

「はいっ!」

初々しい、初々しいぞ2人とも!　ていうか翔ちゃんが初々しいのはダメでは?

別の外史でも、女の子にアプローチ受けてたでしょー。ACフイオナのオペレーターとかー、  
剣仙アネラスちゃんの孫娘とかー。

「それではっ、明日またお会いしましょう!」

そう言つて、セシリアちゃんはルンルンで帰つていった。

「……翔ちゃんつてさー」

「なんだよ……」

「もしかしてちよろイン?」

「止めてくれ美波、その言葉は俺に効く」

l s i d e 美波   o u t

l s i d e セシリアー

わたくしにとつて、男性には悪い印象しかありませんでした。

オルコット家の発展に尽力し、常に堂々としていた母と比較して、婿養子として入ってきた引け目からか、あまり前に立つことのなかった父。

ISが登場し、女尊男卑の風潮が強まると、両親の関係はさらに悪化していききました。その頃からでしょうか。父の瞳に、卑屈さが混ざるようになったのは……。

その後両親が列車事故で亡くなると、わたくしの周りには、親族という名の汚らわしい方々がオルコット家の遺産を狙って群がってきました。

そんな方々から両親の遺産を守るために、わたくしは努力と勉強を重ね、ISの代表候補生という後ろ盾を得たのです。

そして代表候補生としてIS学園に入学した時、わたくしが出会ったのは2人の男性操縦者でした。

織斑一夏さんと北山翔さん。どちらも昨今の女尊男卑に染まらず、自分の意志を持った方達でした。

けれど、お二人には決定的に違うものがありました。

北山さんは、わたくしを『セシリア・オルコット』として見ておりました。

わたくしの強さも、努力も、誇りも。全てをご存知のようで、その上で全力を尽くして戦ってくださいました。……自分と『対等の相手』として。

織斑さんは、わたくしを『女』として見ておりました。

『女は守るべきもの』と言えば聞こえはいいですが、そこに、わたくしが血の滲むような努力の末に得た強さは、代表候補生としての、オルコット家としての誇りがあったのでしょうか――

だからこそ、わたくしは北山さんを……しよ、翔さんのことを……。

(あゝ！やつてしまいましたわゝ！)

「セシリア、いい加減うざいから寝てくんない？ そんなベッドの上でエビみたいに飛び跳ねてないで」

ルームメイトの如月さんが何か言っていますが、今のわたくしには聞こえせんわー！

「……ねえセシリア」

「何ですか？」

「北山君に告白でもした？」

「ふっふっ!!」

如月さんってば、なんてことをおっしゃるんですの!? しゅ、淑女にあるまじき声が

出てしまったではないですか!!

「で、どうなの?」

「べ、別に、告白だなんてそんな……」

「ふーん……」

如月さんは寝袋から出てくると（原因はわたくしの私物が多くてベッドが置けないからなのですが……今度いくつか本国に戻しましょうか）、わたくしの肩を掴むと

「で、何したの?」

「い、いえ、別に……」

「な・に・し・た・の?」

満面の笑みで問いかけて来ないでください、怖いですわ。

「別に……下の名前で呼ばせていただいただけで……」

「ほおうそれで?」

「それと翔さんにも、せ、セシリアと呼んでほしいと……」

「……よし。セシリア、赤飯炊こう」

はいいい!! 赤飯ってあの赤いライスのことですよね!! しかも今から炊くんですの!! どうしてですの!! WHY JAPANESE PEOPLE!?

「大丈夫、飯盒でおこわを炊いたことはある。たぶん赤飯もいけるはず」

「全然安心できませんわー！」

——結局、蹴拳制裁寮長の織斑先生から「こちとら残業で疲れてるんだ、さっさと寝ろ！」と寝かし付けを受けてしまいましたわ……痛い……

l s i d e セ シ リ ア      o u t l



## 第11話 代表就任～そしてパーティへ～

代表決定戦翌日のSHR。教壇には千冬が立っていた。

「さて、代表決定戦の結果、北山とオルコットが1勝1分けて同率となったわけだが「織斑先生」ん？なんだ？」

手を挙げていたセシリアが、席から立ち上がる。

「わたくしセシリア・オルコットは、クラス代表を辞退いたします」

「ほう？なぜだ？」

『『クラス代表はISの実力がトップの人間になるべき』、あの時わたくしはそう言いました。であれば、訓練機でありながらあれだけの実力を発揮した翔さんが代表になるべきだと思います』

「なるほど……」

千冬は少し考え込む格好をしたが、すぐに

「オルコットはこう言っているが、北山から反対意見はあるか？」

「いいえ。どこまでやれるかは分かりませんが、引き受けようと思います」

「そうか……では、クラス代表は北山とする！」

——パチパチパチ！

クラスメイトからの拍手により、1年1組のクラス代表は翔に決まった。もちろん拍手した者の中に、織斑は含まれていない。

むしろ、昨日あれだけ暴言を吐いたにも拘らず平然と出席している織斑に、女子生徒たちは逆に問題追及するタイミングを失ってしまっていた。千冬も指摘しないところを見ると、大事にしたくないのだろう。

「ところでさ、さつきオルコットさん、北山君のこと『翔さん』って呼んでなかった？」  
「そういえば……」

クラスメイト達の視線がセシリアに向いた。

「え……あの……」

視線に耐えられなくなったのか、顔を真っ赤にして髪を弄り始めたセシリアを見た面々は察した。

((セシリアさんマジちよろイン！))

そうしてSHRが終わるかと思われたが、

「ああそうだ。北山、昨日の試合結果に対して、お前にも専用機が手配されることになった。午後は公休にしてやるから受け取りに行くように」

「北山君の専用機い!?!」

最後に、千冬が特大の爆弾を落としていった――

――

――IS学園、整備室に続く廊下

――side翔――

専用機が手配されるらしい。

いや、もうすでに持つてるし。複数持つても同時展開とかできないから、持ち腐らすの確定だし。

しかしあの試合の後ねえ……織斑千冬ブリュンヒルデの弟ってネームバリューばっか見てた連中が、俺の方が有用なデータを取れると踏んで手のひら返して来たか。

とりあえず、受取先である整備室に移動しているわけだが――

「翔ちゃんの専用機、どんなのだろうねー」

さも当然のごとく、美波も隣を付いてきていた。

おかしいな……午後の授業を抜ける形で教室を出て来たのに、どうして全員、美波が

一緒に出て行ったのに当然のように見送ったよ？

そんな疑問が頭の中をぐるぐる回ってるうちに、整備室に着いてしまった。

「お待ちしてました」

部屋の中には、黒髪ロングで眼鏡をかけたスーツ姿の女性がいた。

「私、北山翔さんの専用機の開発を委託されました、スター・ラビット<sup>R</sup>・カンパニー<sup>C</sup>の担当でございます」

「SRC？」

困った。失礼な話だが、知らない社名だ。

そう思っていると、担当者も苦笑して

「ご存じないのも仕方ありません。我が社は最近になってIS事業に参入した、いわゆる新興企業となりますので」

「顔に出てましたか。申し訳ありません」

しかしそんな新興企業が、専用機を作れるのだろうか？ 実際それに乗る身としては、少々じゃないくらい心配なんだが……

「御心配には及びません。なぜなら——」

そう言って、担当さんは肩にかけていたバッグからリモコンのようなものを取り出し

て、ボタンを押した。

すると、まるで映像にノイズが入ったかのように担当さんの姿が一瞬歪み――

「ヘー……いい!! ショウママ、ナミママ、会いたかったよ……!!」

担当さん――もとい、東さんに美波ごと抱きしめられていた。

「た、東さん!？」

「おー東ちゃん、久しぶりー」

「2人に会いたくて、ホロで変装して来ちゃった!……くんかくんか」

おいばかやめろ。

「そ、それで、SRCっていうのは……」

いい加減ハグから抜け出すと、東さんは「もうちよつとく」みたいな顔をしていたが「東さんが新しく作った会社です!（ドンツ）」

「会社作っちゃったのー?」

「うん。もともと隠れ蓑兼資金調達のために建てたんだ。東さんが表に出なくていい様に、人材とか手続きとか色々準備してね。で、そこでショウママに専用機をつて話を聞きつけて……」

「参入したと?」

「ピンポーン♪ こうやって専用機を手配した体にすれば、2人に渡してある専用機を気兼ねなく使えるでしょ?」

確かに、入学時から持つている専用機は、出処の関係でまったく使えないでいた。それが解消されるわけか。仮に問いただされても『SRCって企業から貸与されたものです』で言い逃れできるもんな。

「あ……でもそれだと、美波の専用機はどうします? 俺の専用機を手配したって名目なんですよね?」

「えー、私もこの子を使ってあげたかったのになー」

「だいじょーぶ!」

束さんはバッグの中をゴソゴソ探し始めると、中身の入ったクリアファイルを渡してきた。

「これをちーちゃんに渡せば問題ないよ」

「ちーちゃん……織斑先生にですか?」

「うん。ショウママの専用機を渡したよーって書類と、ナミママにも専用機作ったよーって書類」

「おおー、やったぜー」

美波、嬉しいのは分かったからコロナビアはやめろ。

「さて……名残惜しいけど、監視カメラのハッキングがバレる前に、東さんは退散するよ」

あ、やつぱりそうですか。ホログラムの変装を解いたから、何となく予感はしてましたが。

東さんがまたホログラム発生装置のボタンを押すと

「それでは、今後とも当社とよしなに」

黒髪スーツの女性がお辞儀をしていた。

教室に戻った後（授業の途中だった）、東さんに持たされたクリアファイルを織斑先生に渡すと、中の書類を見た先生は

「なんだこれはああああー！」

と、腹部を押さえながら叫んでいた。手のかかる弟がいるストレスの多い職場だからね。仕方ないね。

書類の内容はというと『双子での対比検証もしたいから、妹の方にも専用機渡すね』的なことが書いてあったそうなの。

ちなみに、織斑先生の胃は授業終了までは持ちこたえた。その後SHRを山田先生に任せると、保健室へ薬をもらいに教室を出て行ったが……

## I s i d e o u t

——その日の夜、学生寮内の食堂

「それでは、北山君のクラス代表就任を祝して、かんぱーいっ!!」

「「「かんぱーいっ!!」」」

食堂の一画で、1組有志が企画した「北山翔 クラス代表就任記念パーティー」が開かれた。

もちろんそれが主目的であるが、クラス内の親睦会も兼用の催しである。

幸い、1組には女尊男卑主義者はおらず、欠席者は織斑と箒だけである。

テーブルには購買で買ってきたお菓子やジュースの入った紙コップが置かれ、立食形式で皆思い思いに談笑していた。

するとそこへ

「新聞部ですー! 話題の男性操縦者を取材に来ましたー!」

1人の女子生徒が乱入して来た。

「私、新聞部副部長のまゆずみ かおるこ薫子よ、はいこれ」



と言つて、翔に名刺を渡す。

「あれ？ もう一人男性操縦者がいるって聞いてたんだけど」

「ええつと……」

織斑のことを聞かれ、皆が言い淀むが

「織斑君は欠席なんですよー。急な計画だったから都合がつかなかったみたいでー」

「あ、そうなんだ」

美波のフラインプレーに、何人かがサムズアップした。

実際、今朝計画されたパーティだから急だったのは事実な上、『都合がつかなかったみたい』と断定はしていないので、嘘は言っていない。

「では北山君、クラス代表となった感想を一言!!」

「そうですね……クラス対抗戦も含め、自分が『為すべきこと』をしますよ」

「おつ、何かぐつとくるフレーズ入れて来たね!」

翔に向けて突き出していたボイスレコーダーを引つ込めると、今度はセシリアに向けて

「それじゃあ次にオルコットさん、北山君と同じ勝率だったのに、クラス代表を辞退した理由について!!」

「翔さんは代表候補生であるわたくしと引き分けましたわ。その実力、そして将来性を

加味した結果、翔さんがクラス代表に相応しいと思ったのですわ」

「うーん、固い、固いなあ。もうちよつと読者を引き付ける部分が欲しいなあ」

薫子は頭を掻くと

「いいや、『北山君に惚れたから』って捏造しておこう」

ボンツ！

「惚れた……とか、そんな……その……」

真つ赤な顔を両手で押さえるセシリアが誕生した。

「え？マジで？——北山君！」

再度翔にボイスレコーダーを向ける薫子。

「オルコットさんに対して一言!!」

「いや、一言って……」

「いいから!」

翔の後ろでは、美波が「いけー翔ちゃん！ナデポだナデポー!」とヤジを飛ばしている。

「これじゃあ公開処刑じゃねえかよ……だあもう！」

観念したのか、翔はセシリアの前に立った。

セシリアの方も、両手で覆っていた顔を上げる。

「セシリア……」

（（ドキドキ……！）（））

「ごめん」

「えっ……」

「『ええっ!?』」

セシリアの目からハイライトが消えかける。

「セシリアが俺に好意を向けてくれることは理解してるつもりだし、嬉しい。それは間違いない」

「……」

「でもな、俺にとってセシリアは、互いに切磋琢磨する相手なんだよ。戦友、が一番しつくりくるか」

「戦、友……」

「だから……まだ俺は、セシリアを異性として見ることはできない」

それは、自分の想いが定まらないうちに半端な返事をしたくない、翔なりのけじめだった。

「……翔さんは先ほど、”まだ”とおっしゃいました。ならばわたくし、諦めませんわ」  
「セシリア……」

「これはわたくしと翔さんの真剣勝負！ 想い敗れるその時まで、全力を持って翔さんを振り向かせて見せますわ！」

「……ははははは！」

突然翔が笑い出したかと思うと、セシリアに向かって右手を差し出した。

「分かった。ならこれから教えてくれ。セシリア、お前のことを」

「ええ、承りましたわ」

セシリアも右手を出して、握手を交わす。

「「セシリア、頑張ってー!!」「ちよろインだと思つてごめーん」

「これはすごいスクープよ!明日の一面間違いないよっ!」

クラスメイトから祝福（一部違うものが混ざっているが）を受けて、自分が公衆の面前で翔に（ほぼ）告白した事に今更気付いたセシリアは、また顔を真っ赤にすると、手で顔を覆つて蹲つてしまうのだった。

—————

——同時刻、学生寮1025号室

自分のベッドに座りながら、織斑は頭を抱えていた。

「なんでだ俺が正しいはずだ男が女を守るのは当然のはずだなのにどうして翔の言葉をみんな肯定して俺を否定するんだおかしいじゃないか絶対おかしいだろ」

織斑は自分の世界に籠つてしまった。

彼にとつて、“守る”というのは特別な意味を持つていた。

かつて自身が異国の地で誘拐された時、I Sを纏つて駆け付けた姉の姿を見て、“誰かを守ること”に憧れを抱いた。

そして幼なじみを助けた過去の経験から、『女』守るもの』という元々彼の中にあつた構図が、さらに強固なものになったのである。

それだけであれば、ただの『正義感の強い人』だけで済んだのだが、彼の考えには問題があった。

彼からすれば、女は全て守るべき、守られるべき対象であり、そこに一切の例外はない。例えその女が自らを守る術を持っていたとしても、例え自力でどうにかしようと考えていても。

相手の能力や思いを顧みない、見方によつては行き過ぎたお節介、大きなお世話とも言える行為。”相手にとつて本当に必要かどうか”、その線引きが出来ないという重大な問題。

さらに『意思を曲げない強さ』という、本来美德とも思える織斑の特性が、問題を致命的なものに変えてしまう。

「そうだ翔に負けたからだあいつに負けたからみんなあいつに騙されてるんだもつと力を手に入れなきゃ力を手に入れて俺が正しいと証明するんだそうすればみんな目を覚ますはずだ」

意思を曲げない。言い換えればそれは、自分が変わることが出来ないということ。だから織斑は周囲を、他者を変えることしかできないし、思考が及ばない。

例えそれが誰からも賛同されない力を持って、誰も求めていない行為であつたとして

も――

「一夏……」

そんな織斑を筈は心配そうに、そして不安な顔で見続けるしか出来なかった……

# クラス対抗戦

## 第12話 中国娘到来

「おはよー北山君。転校生の噂聞いた？」

翔と美波が教室に入ると、クラスメイトの相川清香が声をかけてきた。

「転校生？ この時期に？」

「そう、なんでも中国から来るんだってさ」

「2組に編入されるらしいよ」

「へー」

話を合わせるが、中国という単語で、2人はそれが誰かを察した。  
鳳鈴音。ふうりんおん 中国の代表候補生で、織斑一夏の幼なじみその2である。

「あら、わたくしの存在を危ぶんでの転入かしら」

「はいはい」

「せめて流さずに何か返してくださいません!？」

清香とセシリアの掛け合いをよそに、クラスの話題は別の内容に移る。

「そういえば、クラス対抗戦の優勝クラスには賞品があるんだって！」



「知ってる！ 学食デザートの半年フリーパス！」

「翔（しょー）ちゃん、頑張ってるねー！」

賞品内容を聞いた途端、美波と本音が翔の左右からキラキラした視線を送る。

「1年のクラス代表で専用機持ちのうちと4組だけだし、セシリアと引き分けた北山君なら勝てるよ！」

「その情報、古いよ」

聞き覚えの無い声に、皆が教室の入り口を向くと

「鈴……？ お前、鈴か？」

織斑が驚いたように立ち上がる。

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

少女——鈴音と名乗っていた——が腕を組み、片膝を立ててドアにもたれ掛かっていた。

「何格好つけてるんだ？ すぎえ似合わないぞ」

「んなっ……!!? なんてことを言うのよアンタは！」

（（（うわー、織斑君……）））

「おい」

「何よ!？」

後ろから突然声を掛けられた鈴音は、振り向き様に文句を言おうとして――

――スパーンツ!!

「もうSHRの時間だ。自分の教室に戻れ」

「ち、千冬さん……」

――スパーンツ!!

「織斑先生だ」

出席簿アタックを連続で受けた鈴音は、涙目になると

「また後で来るからね! 逃げないでよ! 一夏!」

そう言い残して逃げるように去っていった。

—————

l s i d e 翔 l

今日は朝から騒がしい。

風鈴音 中国娘がエントリ―したと思ったら、織斑に関係を問いただそうとした篠ノ之が2人仲

良く出席簿アタックを食らったり。

そして昼休み、美波とセシリアを連れて食堂に來たのだが――

「……」「……」

……何が楽しくて、篠ノ之と凰の睨み合いを見ながら飯を食わにやなんのだ……。

「(い、いたたまれませんわ……)」

「(我慢だよセシリアちゃん……)」

俺達3人だけでなく、食堂にいる人達全員、このギスギス空気の流れ弾をもらつていた。

唯一平氣そうなのが、この空気の大元の原因である織斑だつてというのが余計腹立たしい。

「(とりあえず、さっさと食つて出よう)」

「(賛成ー(ですわ))」

皿の上のものを急いで胃に入れて、トレーを持って下げようとしたところで

「ちよつと待ちなさいよ」

件の中国<sup>鳳鈴音</sup>娘に呼び止められたんですが――。

「アンタがもう1人の男性操縦者？」

「そうだが？」

「知つてるだろうけど、もう1度名乗つておくわ。鳳鈴音、中国代表候補生で、2組のク

ラス代表よ。鈴でいいわ」

「北山翔だ。北山と翔、どちらでも」

「なら翔って呼ぶわ。で、翔が1組のクラス代表なんですよ？」

「ああそうだ」

「そつか。本当はクラス對抗戦では一夏と戦いたかったんだけど――」

そこまで言うのと、鈴はビシツと指さすと

「もしあたしと当たっても手加減なんてしてあげないんだから、覚悟しておくことね！」  
宣戦布告された。セシリアといい鈴といい、代表候補生はそうする規則でもあるのか？

「分かっている。こっちだつて全力で戦うつもりだ」

トレーを返却すると、俺は一足先に片づけて入口で待っていた2人に合流した。

その際、俺と鈴のやり取りを見ていた織斑から睨みつけられていたが、そんな知らん。

鈴と違って、お前は承諾も何もなく人のことを勝手に呼び捨てにしていただろうが。

—————

あつという間に放課後の帰り道。いやまあ、さつきまでアリーナで訓練してたんだがな。

実は、俺は今も練習でラフアールに乗っている。

本当は専用機に乗るべきなんだろうが、できればクラス対抗戦まで情報を伏せておきたいからだ。

データの欲しい政府やＩＳ委員会の連中からしたら、面白くないだろうが。

山田先生も「クラス対抗戦では絶対に乗って下さいね？ 絶対ですよ!？」って言うたし。

そういえば、織斑も白式で練習していたのを見かけたな。自分の専用機が手に入つてようやくとらしい。

篠ノ之が横でアドバイスしていたが、「ガツとやってそこでグイッだ！」じゃ誰も分かんたんだろうよ。

さて、そんな寮への帰り道、美波と歩いていると

「あれ？ 鈴ちゃんー？」

美波の視線の先には、道脇のベンチに座り、俯いている鈴がいた。

「アンタは……」

「北山美波だよー」

美波が鈴の正面に立つ。

「辛いことでもあったー?」

「別に……アンタには関係ないことよ」

「そっかー。でもねー」

美波は屈み込むと、鈴と目線を合わせた。

「辛い時は辛いって、言っていいと思うんだー」

「……本当に、アンタ達とは関係ないのよ?」

「それでもいいよー」

「……グスッ」

そして鈴は

「一夏の馬鹿あああ!!」

美波に縋りつきながら泣きじやくった。

l s i d e 翔 o u t

—————

——1210号室の前

l s i d e セシリアー

『R o m e w a s n o t b u i l t i n a d a y』とある通り、翔さんに振

り向いてもらうため、まずは手堅く、お茶に誘うことにしましょう。

茶葉良し。お茶請けのスコーン良し。完璧ですわ。

——コンコン

「どちら様—?」

「セシリアですわ」

「はいはい、ちよつと待ってね—」

いつもの様に美波さんの声が聞こえて来て、少しするとドアが開きました。

「今日はどうしたの—?」

「ええ、お2人とお茶をと思ひまして」

わたくしが持っていたバスケット（紅茶缶とスコーン入り）を見せると、美波さんは少し悩むような顔をなさると

「実は先客がいるんだよね—。それでもいい?」

「先客ですの?」

「どなたでしょう? 山田先生とかでしょうか?」

「いいですわよ。お茶請けのスコーンも少し多めに用意しておりますし」

「分かったよ—。それじゃあ入って—」

美波さんに促されて中に入ると、そこには翔さんと

「あら? 貴女は——」

そう、確か中国代表候補生の凰鈴音さん、でしたか。

「アンタ確か、お昼に翔達と一緒にいた……」

「自己紹介をしていませんでしたわね。イギリス代表候補生、セシリア・オルコットですわ」

「セシリアね……あたしのことは鈴でいいわ」

「分かりましたわ。ところで……なぜ鈴さんが翔さん達のお部屋に？」

よく見ると、鈴さんの目は赤くなっている、まるで泣いた後のようでした。

とはいえ、翔さんや美波さんが鈴さんを泣かせるとは思えませんし、もしかして——  
「……織斑さんと、何かありました？」

「……っ！」

ビクツと肩を震わせる鈴さんを見て、わたくしは何となく確信がついてしまいました。  
た。悪い方に。

「俺達も、詳しい話はまだ聞いてないんだ」

「それじゃあ鈴ちゃん、聞いていいかなー？」

「あの、わたくしが聞いてもいい話なのでしょうか？」

他人のプライベートを無断で聞くのはよろしくありませんわ。

「いいわよ……むしろあたしの愚痴に付き合ってよ」



「はあ……」

そして鈴さんは、これまでの経緯を話し始めました――

鈴さんは小学5年の頃、日本にやってきたそうです。

当時は日本語があまり上手くなく、それが原因でいじめられており、その時手を差し伸べてくれたのが織斑さんだったと。

それがきっかけで彼に好意を抱いておりましたが、中学2年の時に両親の都合で中国へ帰国。

帰国後IS適正が見つかり、努力を重ねた結果代表候補生に。

そして、世界初の男性操縦者として織斑さんの名前が出た時、IS学園行きを希望したそうです。

そこまではただの美談なのですが、問題は帰国する前に鈴さんが織斑さんとした、とある約束なんだそうです。

「あたし、一夏に言ったの……『料理の腕が上達したら、毎日豚豚を食べてくれる?』って……」

「えーつと……」

どういふことでしょう?

「セシリアちゃんー、日本には『毎日味噌汁を作ってくれ』っていうのがあるんだよー。『毎日味噌汁を作るために、ずっと俺と一緒にいてくれ』っていう遠回しな言い方なんだー」

「なるほど」

美波さんの説明で納得出来ましたわ。つまり『毎日酢豚を食べてもらうために、ずっと貴方と一緒にいていいわよね?』という、鈴さんからのプロポーズだったと。

「それで放課後、一夏に聞いたの。『あの時の約束、覚えてる?』って。そしたら……」  
まさか、覚えていなかったとか?

「『酢豚奢ってくれるんだろ?』だって!!」

「んんっ!？」

ちよつと待ってくださいまし。理解できませんわ。どうしてそうなりますの？

「……なあ鈴」

「何よ」

「あの織斑に、そんな変化球が通じると思うか……?」

「うぐっ!」

……鈴さんの口から、まるで鳩尾を抉られたかのような声が出ましたわ。

けれど確かに、翔さんのおっしゃる通りですわ。あの織斑さんに婉曲表現が理解できるとは、到底思えませんわ……。

「そして『酢豚を食べさせる』って部分だけが残ったと……」

切ないっ、切なすぎますわ……っ！

「そこに関しては、奴の鈍感力を見くびっていた鈴にも問題があつたのかもな」

「そうね、あたしにも非があつたのかもね……。勢いで引っぱりたいちゃつたし……」

鈴さんは紅茶（話を聞いている間に、わたくしと美波さんが用意したもの）を飲み干すと

「今度会ったら、引っぱりたいことは謝ってみる」

「そうだな。奴のことを諦めるにしろ諦めないにしろ、あとあと負い目になりそうなのは早い内に片付けとけ」

「分かつてるわ。なんか言いたいこと言ったらスッキリしたわ。今日はありがとね」

そう言つて、部屋を出て行きました。

鈴さんは大変ですわね。あの織斑さんを好きになってしまふなんて。正直、心配にもなつてしまいますわ……。

「心配なのは分かるけど、今は鈴を信じてやろうじゃないか」

顔に出ていたのでしょうか。翔さんはわたくしの頭を、ポンポンと優しく撫でてくださいました。

「そう、ですわね」

——つくづく、わたくしが好きになった相手が翔さんで良かったと思いますわ。

l s i d e   s e   s i r i a   o u t l

## 第13話 束の計画

——クラス対抗戦2日前、スター<sup>S</sup>・ラビット<sup>R</sup>・カンパ<sup>C</sup>ニ前  
l s i d e 翔 l

クラス対抗戦を明後日に控えた日曜日、俺と美波はSRCを訪れていた。

目的は俺の専用機の調整。何せ入学直前の3月末に受け取ってから、まともに起動してないのだ。それに、せっかく練習の時もラファールを使っていたのだ。出来れば対抗戦当日まで隠し通しておきたい。

そしてそれとは別に、束さんに直接会わなければならない理由があったからだ——

「2人とも、よく来たねえ！」

SRC社屋の地下フロア。IS研究開発室で、束さんが俺達を出迎えてくれた。

「それじゃあショウママ、その子を預かるよ」

「ええ、よろしくお願いします」

待機状態の専用機

頷くと俺は、首から提げていたドッグ・タグを外すと、束さんに渡した。

「どれくらいかかるのー？」

「損傷したわけじゃないから、30分くらいで終わるかな？」

束さんは部屋の中央にある装置のドアを開けると、ドッグ・タグを入れた。そして「ポチツとな。はい、あとはシステムチェックが終わるまで全自動なのだー！」

「おーしゆげー！ かんたーん！」

「むふふー！ そうでしようそうでしよう！」

美波の誉め言葉にどや顔。

「それじゃ、終わるまでお茶にしよう！」

そそくさと束さんは、部屋の隅にあつた応接セットのテーブルから紙の山をどかし始めた。

「時間があるなら束さん、少し聞きたいことがあるんですが」

「なにになに？」

「明後日のクラス対抗戦、何かする気じゃありません？」

「……」

束さんの手が止まる。

「……どうしてそう思ったの？」

もちろん「原作知識が」などとは言わない。

「明後日の対抗戦には、各国から人が集まります。特に今年は、世界でも希少な男性操縦者俺と織斑を見るために」

「そうかもね。それで？」

「東さんは今のISの使われ方を是としていない。だから、それを伝えるために何かするんじゃないかなと」

「うーん。でもそれなら、別に明後日じゃなくてもよくない？ 例えば、今すぐ世界中の電波をジャックして演説を始めてもいいわけでしょ？」

面白そうだと顔に書いてありますよ、東さん。

「思ってもいないことを言わないでください。そもそも、各国政府やIS委員会の連中に言つて聞かせて済むなら、今の世界はこんな歪んでませんよ」

「まあねえ。でも、言っても聞かないなら力尽くつて、まるでちーちゃんみたいな発想だねえ」

「違うよ東ちゃん。織斑先生は口で言う前から実力行使だよ」

「ブフッ！」

美波のツツコミ（しかもなんでこれが事実なんだよ……）に、東さんが吹いた。

「それで、いったい何をするつもりなんですか？」

「いやあははは、そこまでバレてるならしょうがないね」

東さんは壁に付いているボタンを押した。すると、壁の一部がシャッターのように上がっていく。上がった場所にはガラスが窓のようにはめ込まれていて、その先には――

「試作型無人IS『ゴーレムI』だよ」

窓ガラスの向こうには、全身装甲型のISが鎮座していた。

「無人機ですか……」

「本来は木星の高重力下みたいなの、ISを使っても有人じゃ危険な領域で作業をするために作ったんだけどね」

「危ない場所はロボットにやってもらおうってことー？」

「そうそう。しかも普通なら人が入るところに大容量コンデンサーとか付けられるから、高出力ビームを装備しても長時間稼働するってメリットもあるんだ。まあ人間ほど柔軟な行動はできないけどね」

なるほど。宇宙進出の先、惑星開発も視野に入れてるわけか。

「で、このゴーレムI君を対抗戦に乱入させるつもりだったんだ。『ISを兵器として使うこと



の意味』をもう1度考え直させるために」

ああうん、理由はともかく、そこは原作通りなのな。

「……それでシヨウママ、どうする？ やめた方がいい？」

「そうですね……」

「やった方がいいと思いまーす！」

シユバツと手を挙げて美波が言った。

「えーつと、ナミママ？」

「翔ちゃんも気付いてると思うけど、学園の授業内容には問題があるんだよー」

「問題？」

「そう、束ちゃんは嫌だろうけど、ISは兵器やスポーツとして見られてるよねー。なのに、それを扱う上での危険性について全然言及がないんだよー」

確かにそうだ。IS使用中の事故などによる負傷や死亡例と言った話が、教科書や参考書にまったくと言っていいほど載ってないのだ。

過度の恐怖心を与えないためとか言うのだろうが、舐めるなど言いたい。自動車免許を取る時ですら、教習所で事故映像を見るというのに。

「だからゴー君を乱入させて、『ISって、使い方を間違えると怖いものなんだ』ってみんなに思ってもらえればいいと思うんだー」

「ナミママ……」

「だけど美波、乱入させるのは良いが、そのあとどうするんだ？」

「え？ 翔ちゃんが片付けるんだよー？」

「フアツ!？」

まさかの俺任せである。

「翔ちゃーん……」 「シヨウママあ……」

2人してキラキラした目で見んな！

「はあ……鈴との勝負はお預けになりそうだな……」

そんなこんなで束さんの『無人機盛大なマツチによるIS学園襲撃計画』が実行されることに決まった。

だが一応、俺からも注文は付けた。言つてしまえば脅かすのが目的であつて死傷者を出したら意味が無いからな。

・乱入する時以外、ビームの出力を（アリーナのシールドバリアが破れない程度まで）落とすこと

・ISに乗ってる奴にしか攻撃しないこと

・ISに乗っていても、SEが切れて具現維持限界した奴は狙わないこと

これで最悪、俺が途中で力尽きても、観客席に被害はいかないはずだ。  
でもなぜだろう、まったく安心できる気がしないのは……。

side out

—————

side???

「ああもう！ ホントに、あいつつてば何なのよお!!」

「……」

「いったい、私はいつまでルームメイト鈴の愚痴を聞き続ければいいんだろう。

「ちよつとテイナ、聞いているの!」

「はいはい、聞いている聞いている」

「しかも言うに事欠いて『貧乳』ですってえ!? ああもうああもう!」

「そう言いながら地団駄を踏む鈴を見た。正確には、彼女の胸部。

そして視線を自分の胸部に移す。

「……フツ」

「テイイイナアア!! アンタ喧嘩売ってんの!」

「はいはい、売ってる売ってる」

「むがー!!」

「で、結局その織斑君とはどうするつもりなの？」

最初は鈴が織斑君を引っぱたいちゃって、それに対して謝ったけど、その後またちよつとしたことから口論になってエスカレート、最後に織斑君が『この貧乳！』みたいなことを言っただんだけ？ 小学生か。

「……あいつが謝るまで、絶対に口利かない」

「ああそう……」

面倒だわー。

「とりあえず、明後日のクラス対抗戦に集中したら？」

私もスイーツのフリーパスは欲しいし。

「そ、そうね」

気を取り直したように見えた鈴だったけど、なんかまた萎れ始めた。

「今度はどうしたの？」

「いやあのね……1組に、北山って兄妹いるじゃない？」

「1組のクラス代表とその妹だっけ？」

「そう。で、一夏を引っぱたいだ日に色々世話になってさ、その時に『あとあと負い目になりそうなものは早い内に片付けとけ』って言われたの……」

「ああ……」

ダメじゃん。せっかく謝ったのに、また喧嘩して作ってるじゃん、負い目になりそうなもの。

「なんて言い訳すればいいのよ……」

「知らないわよ……」

本当に、私のルームメイトは面倒臭いやつだわ……

l s i d e ティナ o u t l

# 第14話 クラス対抗戦ゝVS 凰鈴音ゝ

クラス対抗戦当日。

本来であればもつと前から発表されるはずの対戦カードが、今年は当日になって発表となった。

第1試合 1組 VS 2組

第2試合 3組 VS 4組

初戦から専用機同士の対戦となり、学園生徒達だけでなく、各国の政府やIS委員会  
の関係者もが、どちらが勝つかという話に花を咲かせながらアリーナの観客席（貴賓席）  
に集まっていた。

—————

——第2アリーナ、ピット内

Iside翔一

「しかし、すごい人の数だなあ」

代表決定戦の観客が基本1組だけだったから、今回は単純に4倍。それに加えて各国  
からも人員が来てるわけか。

「クラス対抗戦は学年別個人トーナメントに次いで注目されていますからね！」

俺の独り言に山田先生が合いの手を入れてくれた。

「しかも今年は、男性操縦者の北山君が出場しますから」

「つまり、俺は客寄せパンダですか？」

「えーつと……」

言葉を濁して目を逸らすくらいなら、正直に言うてくださいいよ。却って傷つきますって……。

『間もなく第1試合を始めます。両者、アリーナへ入場してください』

なんて話をしてる間に、アナウンスが入った。

「それじゃあ北山君、頑張ってくださいね！」

「はい」

山田先生の応援に頷くと、専用機の待機状態を解除した。

胸元のドッグ・タグが光り出し、俺の全身を包み込む。

しばらくして光が収まると――

「それが、北山君の専用機……」

「行くぞ、『ホワイト・グリント』」

かつての愛機に模した姿になっていた。

l s i d e 翔 o u t l

l s i d e 鈴音 l

フルスキン  
「全身装甲のISですって？」

IS『甲龍』シンロンを纏って先に入場していたあたしは、向かい側から出てきたISを見て眉をひそめた。

真っ白な全身に脚や肩の一部に黒色が見える、まるでアニメに出てくるロボットをサイズダウンしたかのような外見。

そして、大半のISにあるはずの<sup>翼型</sup>カスタム・ウイングスラストも見当たらない。まさか、背部にスラスタが付いてんの？

「今時全身装甲なんて、えらく時代遅れなものを使うのね、翔」  
「そうかもな。まあ、ロマン以外の目的もあるから期待しとけ」

「あつそ」

プライベート・チャネルで皮肉ると、翔からも反応が返ってきた。

全身装甲は第1世代機で主流だったけど、第2世代機以降SEの技術が発達するに従



い廃れていった代物だ。装甲の重さ分、SEのコンデンサーを積んだ方が効率的ってわけね。

というか、今まで翔はラフ第2世代機アールに乗ってたって聞いてたんだけど？ ある意味退化してない!?

「ま、時代遅れのISだろうと、手加減する気はさらさら無いんだけどね」

「それはもう聞いた」

「それもそうね」

そんな掛け合いをしながら、あたしは双天2基の青龍刀牙月を両手に展開した。それに合わせて翔も、両手に武器を展開する。

出てきたのは大型拳銃、しかも銃身下部にブレードのようなものが付いている。そんなものを2丁、両手に展開しているのだ。

「機体どころか、武器までロマンの塊なわけ？」

「そう言うなって」

「まあいいわ。とりあえず……」

——試合開始のブザーが鳴った

「いつぱつ食らつときなさい！」

——ドオン!!

甲龍の特殊兵装・龍咆<sup>衝撃砲</sup>——空間に圧力をかけて砲身を成形、その時生じた衝撃を砲弾とする不可視の攻撃——を開幕叩き込んだ。

さあ、翔がダメージを受けて怯んだ隙に——

「ダメだろ鈴、不意打ちなら御託を並べる前に撃たんと」

「っ！」

龍咆が……当たってない？ 避けられた!?

「鈴の性格からして、その青龍刀で開幕切り掛かってくると思ってたんだが、砲撃戦が好みだったか」

翔があたしに右手の銃を向けて——

「なら、俺もそれに付き合うとしようか」

——バラバララッ!!

——ガンガンガンッ!!

「なっ！」

咄嗟に前面に出した肩部装甲を銃弾が叩く音に、あたしは背筋が冷えるのを感じた。あの連射速度、拳銃じゃない！ アサルトライフルの類だ！

「勘がいいな。装甲外を狙ったつもりだったんだが」

「……上、等じゃない!!」

双天牙月を握る両手に力がこもる。肩部左右の龍咆を拡散衝撃砲に切り替え――  
「全力で……ぶっ潰すっ!」

一斉射でぶっばなした。

l s i d e 鈴音 o u t

――第2アリーナ、観客席

「しよーちゃん、相変わらず躲すのが上手いね」

「ええ。わたくしとの時も、第2世代機とは思えない回避を見せておりましたから」  
「専用機になって、さらに磨きがかかっているように感じるよ」

開幕の衝撃砲を躲した翔を見て、観客席は沸いていた。

「でも北山君、よく目に見えない砲撃を躲せるよね」

「ナミママ、その辺どうなの?」

「えー、私解説役じゃないんだけどなー」

そう言いながらも、美波は満更でもないようで

「翔ちゃん、ハイパーセンサーで空気の流れを見てるんじゃないかなー」

「空気？」

「あれって空気を圧縮して砲身とかを作つてると思うんだー。だから、空気の流れを見ていれば……」

「砲身の向きとかが分かる？」

「たぶんねー。砲身が見えても、それを躲せるかは別問題だけどー」

「……そりゃそうだ」

美波の解説に、周りが一斉に頷く。

「でも、よく全身装甲であんな高速機動ができるよねえ」

「そうだねー」

美波は相打ちを打つが、心では別のことを思っていた。

（あれで翔ちゃん、まだ全力機動してないんだけどねー）

そう、翔のホワイト・グリントは全力機動をしていないし、翔も極力しないようにしている。

なぜなら、全力機動するとP I C 慣性制御 最大でも7 G 近くかかるからだ。

7 G といえば、戦闘機パイロットがドッグファイト中に気を抜くと『ブラックアウト』を起こすほどの圧力になる。

しかも、P I C を最大稼働させてそれである。おいそれと全力を出すわけにはいかな

い。

「あつ、なんか近接戦に変わったみたいだよ！」

「ホントだ！」

衝撃砲が当たらないことに業を煮やしたのか、鈴音が青龍刀で翔に切り掛かっていくところだった。

観客が試合に熱中する中、美波だけが時計の針を気にしていた。

（そろそろかな………？）

観客席の中で唯一、“これから何が起こるのか”を知っている人間だったから――

――

――side翔――

「そこお！」

――カアンツ！ ガキイインツ！

「くっ………やっぱ鈴は接近戦の方が強いか」

「まだまだいくわよっ！」

戦いは龍咆と04―M A R V Eの撃ち合いから、青龍刀とライフル下部にマウントしたブレードの近接戦に移行していた。

「はっ！ はっ！」

息をつかせぬ連撃に、時に受け流し、時に躲して対処していく。

ホワイト・グリンツのSEはまだまだ残ってるが、むしろ俺の体力の方が切れないか心配になってくる。

それに対して、甲龍のSEは被弾数の割に5割近く残ってるし、鈴自身はまだまだ体力が有り余っているようだ。このフィジカルおばけめ。

「ああもう！ いい加減当たりなさいよ！」

「無茶言うな……」

「それにアンタ、まだその銃しか出してないじゃない！ それしか無いわけじゃないんでしょ!？」

「そりゃあ、まあ」

M A R V E 以外の武器も拡張領域に入っている。  
 02—DRAGONSLAYERとか、SALINEO5とか、EC—O307ABとか……。

「……すまん、まともに使えそうなのこれだけっぽいわ」

「はあ!？」

うん、鈴が呆れるもの分かる。でもレーザーブレード以外、こんなところで使えんよ

！

東さん！　なんでこんなロマン蹂躪装備ばつかなんですか！

一昨日の俺！　東さんから返してもらった時に確認しとけよ！　04—MARVE

（銃剣仕様）が入ってることに浮かれて忘れてたわチクショウめえ！

「はあ……いいわ。とにかく、まだ勝負は付いてないんだから——」

——バリーイイインツ！

「な、なにっ!？」

驚きながら轟音の発生源の方を向く鈴に倣うように、俺も上を向いた。

アリーナの周囲を覆っていたバリアに、ポツカリ穴が開いていた。

——チユイイインツ！

「っ!」

咄嗟に俺と鈴が後退した正面に、赤い光が降り注ぐ。

その光に真下の地面が焼かれ、一部が高熱でガラス化する。

「ビーム兵器、ですって……?」

そしてバリアの穴を通り、こっちに向かって来たのは——

「なんだって言うのよ……!」  
(とうとう来たか……!)

一昨日SRCの地下で見た、試作型無人IS『ゴーレムI』、総勢3機がアリーナ上空に浮かんでいた。

l s i d e   翔   o u t l



## 第15話 招かれざる咎人～帳尻合わせの対価～

突然現れた正体不明のI Sに、観客席は騒然となっていた。

そしてそれは、管制室も同様であった。

——第2アリーナ、管制室

I s i d e 千冬ー

「どうなっている!? 状況の報告を!!」

「アリーナ上空のバリア消失!」

「リーダーには何の反応がありませんでした! 恐らくステルスかと!」

学園の警戒網を突破するほどのステルス性能だと……!?

いや、それよりも生徒と来客の安全確保が先だ!

「アリーナ全域に避難警報! それと教師部隊に緊急出動<sup>スクランブル</sup>を掛けろ!!」

「了解! 第2アリーナ全域に避難けいほ……っ! 警報が鳴りません!」

「なんだと!」

「それだけではありません! 観客席の扉がロックされた上、格納庫の隔壁も閉鎖! こちらのアクセスを受け付けません!」

（学生の避難も、教師部隊の出撃も封じられたのか……！）

「こちら管制室織斑だ。北山、凰、応答しろ」

私はアリーナ内にいる北山と凰をコールした。

『凰です。聞こえてます』

『北山です。こちらは現在謎のISと睨み合ってる状態です。そちらの状況は？』

「……正直芳しくない。現在何者かのハッキングを受けていて、教師部隊によるそちらの救援はおろか、観客席にいる生徒の避難すら出来ない状態だ」

『最悪な状態なのは分かりました。しばらくは俺と凰だけでどうにかしろってことです  
ね？』

「すまない……。こちらでも、他の教師陣や3年生達にハッキングの解除を急がせて『U  
nknowmが動き出しました！』っ！」

くそっ！最悪だ！

「北山！凰！交戦を許可する！ 生き残ることを最優先に、教師部隊の到着まで持ちこ  
たえてくれ！」

『了解！』

通信が切れ、私はマイクを置いた。

「織斑先生……」

「山田君、手を止めている暇はない。一刻も早くハッキングを解除するんだ」  
「はい！」

学園のセキュリティを抜くほどのハッキング……お前なのか、東……

l s i d e 千冬 o u t

l s i d e 翔

「というわけだ。悪いが、襲撃された時にアリーナにいた自分の不幸を呪ってくれ」  
「何言ってるのよ。それはお互い様でしょ」

そうこう言ってるうちに、3機のうち2機が俺達に向かって突っ込んでくる。

「1機は任せて構わないな？」

「当たり前でしょ？ 先に倒して助けに行つてあげるわよ！」

「そりやどうも！」

俺と鈴が左右に分かれると、それを追いかけるように向こうも2手に分かれた。

「さて、頑張つて（盛大なマッチポンプの）相手しますか」

謎のI Sと向かい合ったところで、俺は展開済みのM A R V Eの下部ブレードで切り掛かった。

——カキイインッ！

固った！ 首部分に当たったはずなのに、めちやくちやいい音したんですけど!?

「まあそれならそれで、やりようはあるんだけどな」

右手を MARVE から 02—DRAGONSLAYER<sup>レイザー</sup>に切り替え。形成したレイザー刃で再度切り掛かる！

——ズバンッ！

袈裟懸けに切られた敵の右腕部と頭部が宙を舞った。

然しもののゴーレムも、高出力のレイザー刃は防ぎ切れないようだ。

「翔!? アンタ——!」

「鈴、こいつら無人機だ」

「無人機!? ?でしょ!」

「嘘じゃない」

そう言つて、左手の MARVE で地面に落ちた部位を指した。

「……ホントだ、血が出てない」

こういう時に、ハイパーセンサーって便利だな。ここからでも地表に落ちたものがよく見える。

さて、鈴の方を援護するか。

俺は再度レイザー刃を作ると、鈴と対峙していたゴーレムを背後から切り捨てる。こ

れで2機目か。

「誰も助けてなんて言っていないんだけど？」

「そんなこと言っていないで、さっさと最後を倒すぞ」

「分かっている——つて、翔、アンタ——」

鈴が指さす方を見ると、レーザー刃がどんどん短くなっていって——消えた。

「エネルギー切れ!!」

「ちよつと! まだ1機残ってるのよ!」

くそつ! てつきりSE依存の武器だと思い込んでたけど、武器固有のエネルギー使うのか! 装備の確認を怠ったツケが、こんなところで回ってくるなんて……!

と思つてたら、最後の1機がおもむろに腕を上げた。見えたのは、真つ黒い腕から生えている、砲口——

「まっずー!」

——チユイインツ!

次の瞬間、高出力ビームがホワイト・グリントの右肩装甲を掠めた。

さらに、いくらかのSEを削ったビームはほぼ減衰なしで、観客席のシールドバリアに直撃する。

——パシイインツ!

バリアは……良かった、突破されてない。だけど……

「翔！ 結構まずい状態かも！」

「ああ……今のビームがバリアに当たったことで、生徒達がパニックを起こし始めた」  
眼前には、我先にと出入り口に殺到し、開かない扉を叩く生徒達が見えていた……

l s i d e 翔 o u t l

l s i d e 箒 l

「一夏！ おい聞こえないのか、一夏！」

周りがパニックを起こしている中、席に座ったままの一夏を揺するが反応が無い。

「分かったよ、箒。分かったんだ……」

「一夏？」

「白式が、どうして千冬姉と同じ零落白夜を使えるのか……」

そう呟くと一夏は立ち上がり、出入口に殺到するクラスメイト達とは反対の、最前列の方へ歩いて行く。

「そうさ……こんな時のためにあつたんだ……」

「一夏……何を言っている……？」

「鈴や翔じゃあ、今戦ってるアイツを倒せない。アイツを倒すには、一撃必殺の強い力が

「必要なんだ……」

「いち、か……?」

「そうだ……! 零落白夜を持った俺が!」

最前列まで来た一夏は、右腕をかざすと

「来い、白式!」

白式を纏い、雪片式型を抜いて――

「つ! 止せ一夏! 止すん――!」

気付いて声を上げた時には、すでに手遅れだった。

バキイイイインツ!!

零落白夜で観客席のシールドバリアを、私達を守っていたものを斬り裂いていた――

「俺がアイツを倒す! そうだ! 俺が倒して、みんなを守るんだ!」

そのまま一夏は上空へ、謎のISに向かって舞い上がっていった。

「なぜだ……なぜなんだ、一夏……」

残されたのは、自分達を守っていたものを失い、パニックが頂点に達したクラスメイ  
ト達。

そして、啞然とした顔で立ち尽くさない私だけだった……

l s i d e o u t

Inside セシリアー

(なんて事をしてくれましたの……っ!!)

美波さんと一緒に、パニックの中で怪我をした人の手当てをしていたわたくしは、心の中で思わず舌打ちしてしまいました。

敵の攻撃で破られたのならまだしも、自分からバリアを切り裂くなんて！

しかもここには、自衛できない方々が大勢いるんですよ!?

「セシリアちゃんー。最悪、出入り口の扉を破壊してでもみんなを逃がすべきだと思うなー」

「ええ、確かにそうですわね……」

器物損壊だとか、もはやそんなことを言ってられる場合じゃないですわ。

「分かりました。ブルー・ティアーズの武装を一点集中すれば、扉を破れると思いますわ」

そう言つて、ブルー・ティアーズを展開しようとした時、

「きゃああああああっ!!!」



クラスメイト達の悲鳴に顔を上げて見えたのは、

ただ闇雲に突撃をかける白<sup>白式</sup>ISに対して攻撃を加える謎のISと、

背後に何かあるかも考えずに回避しようとして失敗し、攻撃が掠って墜落していく  
お馬鹿<sup>織班一夏</sup>さんと、

迫りくる、ビームの赤い光――

「……っ！」

その瞬間、思わず目をつぶってしまいました。

ですが、待てどもビームの衝撃来ず、ゆっくり目を開けると

「あ……ああ……」

見えたのです。

謎のISとは違う、先ほどの白とも違う、白<sup>ホワイト・グリント</sup>閃光の背部が――

l s i d e    セシリア    o u t

l s i d e    翔――

観客席にビームが迫った時、俺は半ば無意識にホワイト・グリントを全力機動で動か

していた。

「ぐッ……！」

全身装甲を耐Gスーツ代わりにしても、7Gもの圧力がかかる全力加速。だがそのおかげで、何とかビームと観客席の間に割り込むことが出来た。（盾になりそうな装備はない……これで何とかするしか……！）

展開したのはEC—O307AB<sup>レーザークャノン</sup>。だがチャージするような時間はない。だから、両肩3門ずつ6本の砲身を無理やり前面に展開して——！

「持ちこたえろおおお！」

ミシミシミシッ！！

ジジジジジジ——ッ！！

ビームと接触し、砲身が圧壊する音と、高熱で溶解する異臭が立ち込めてくる——！  
そして6本の砲身が砕け、咄嗟に胴体を隠すように構えたMARVEも破壊され——  
SEを残り2割まで削ったところで止まった。

「はあ……はあ……」

「翔ちゃん!?」「翔さんっ!」

後ろから美波とセシリアの声が聞こえる。良かった、無事だったか……。

何とか防いだ……けど、次が来たら無理だな……。

MARVEを始め、装備のほとんどが全損やエネルギー切れで使えない状態だ。

……出来れば最後まで使いたくなかったが、そうも言ってられなくなったか。

(特攻紛いのマネだしなあ……あとで絶対2人に泣かれそう……けど、こうなったら——  
——)

「覚悟を決めてやってやるよお!」

——ドンッ!

次弾を撃たれるより先に、イグニッション・ブースト瞬時加速でゴーレムに張り付く! そして羽交い絞め

にした状態で上空のバリアの穴まで上昇して——

(残存SEを圧縮——)

同時に脚部、胸部、および肩部の整波装置を展開。頭部カメラアイの防護シャッターを閉鎖。

(圧縮エネルギー、臨界に到達——)

「——ぶちかませええええええ!!」

防御用のSEを圧縮・解放することで、周囲の全てを閃光と衝撃で薙ぎ払う、  
アサルト・アーマー  
 A。A。

最後のゴーレムが、その光と轟音の中に消えていくのを、ハイパーセンサーで確認して

俺の意識は落ちた。

l s i d e      翔      o u t l

## 第16話 嵐が過ぎて

——第2アリーナ、管制室

Iside 真耶ー

「Unknown最後の1機、シグナル・ロスト反応消失!」

「終わった、のか……?」

私の報告に、織斑先生はそれしか呟くことが出来ませんでした。

「北山君、嵐さん、聞こえ——」

とにかく状況を確認するため、北山君と嵐さんに通信を繋いだ途端

『翔おおお!!』

嵐さんの悲痛な声に慌ててアリーナのカメラモニタを見ると、具現維持限界で展開解除された北山君が落下していくのが見えました。

『くっ!』

嵐さんも追いかけてようと思いますが、落下スピードが速すぎます!

私は最悪の結末を覚悟しました。

……けれど、北山君が地面に叩き付けられることはありませんでした。なぜなら——

「別の……全身装甲……?」

映像の視界外から全身装甲のISが現れると、北山君を受け止めていたのです。

全身淡い青色で、両肩にどういう意味か『UN』と『14』のマーキングが施されている機体……。

「新手か!」

「サーチ開始……っ! 学園のデータベースに該当あり!」

「何!?!」

「機体名『不知火』、操縦者は……北山さんです!」

「北山……北山妹か!」

対比検証としてお兄さんの北山君と共に貸与されて、これまで使用していませんでしたか……あれが……!

北山君を抱えた北山さんは、そのままピットへ移動していきました。……はっ、それどころじゃない!

「こちら管制室山田です! 第2アリーナWピットへ至急医療班を寄越して下さい!」  
リミット・ダウン  
具現維持限界で展開解除するほどだったんです! 無傷なわけありません!

「織斑先生！ ハッキングが止まりました！」

「なんだと!?……教師部隊に出撃指示！ アリーナ周辺を搜索、残敵がいなか確認させろ！」

「了解！」

タイミングが良すぎる気がします……けれど、今は一刻も早く事態を収拾するのが先決です。

「なぜあんなマネをした……一夏……！」

小声だったこともあり、織斑先生の悲痛な声は、私にしか聞こえていませんでした……。

l s i d e 真耶 o u t

——スター<sup>S</sup>・ラビット<sup>R</sup>・カンパニ<sup>C</sup>ー地下、研究開発室

l s i d e 束

「シヨウママ……」

ゴー君のカメラアイから送られてきた最後の映像には、展開解除されて宙に投げ出される、シヨウママが映っていた。

「どう……して……」

シヨウママの注文通り、ビームは観客席のバリアを破らないように調整していたのに。当初はそれで問題なかったのに。

だからこそ、ハッキングを仕掛けたのに。観客を逃げられないように、今起こってることをしっかり認識させるために。

まさか、バリアが内側から破られるなんて想定していない。

「いっくん…… あそこには箒ちゃんだったのに……」

今回の襲撃を計画したのは私だ。だからこれは逆恨みなのかもしれない。

でも……それでも、この事態を引き起こした「親友の弟」に、怒りを禁じえない。

もしシヨウママが身を挺して守ってくれなければ、他の観客もろとも、箒ちゃんも消し炭になっていたかもしれない。

私はまだ、箒ちゃんに、謝れてないのに……！

「——そうだ、お見舞いに行こう。東さん特製の医療用ナノマシンとか用意して！」

棚の中を引っ掻き回し、お目当てのものを拡張領域に放り込むと、私は大急ぎで研究室を出て行った。

l s i d e   e a s t



——I S 学園医務室、集中治療室

I s i d e 美波

翔ちゃんは、まだ目を覚まさない。

ピットから担架でここに運ばれて、医療ポッドに入れられて、そのままだ。

「……」

私もセシリアちゃんも、何を話すでもなく、ただただポッドの横で椅子に座って、ガラス部分から見える翔ちゃんの顔を見ていた。

内臓の損傷、全身の火傷、擦傷に至っては数えきれないほど。

いつ死んでもおかしくない重症だった。仮に峠を越えても、なにかしらの後遺症は残るかもしれないと、お医者さんからも言われた。

——ピコンッ

その音が、自分にメールが届いた音だと気付くのにしばらくかかった。

スマホを取り出してディスプレイを——

『差出人：東ちゃん 件名：その窓開けてー』

「っ！ セシリアちゃん！ その窓開けるよ！」

「は、はい!？」

セシリアちゃんの返事を聞く時間も惜しんで、私は部屋に1つだけある窓の鍵を外して開けた。すると

「東さん！ 参、上！」

東ちゃんが、窓からスライディングで飛び込んできた。

「ナミママ！ ショウママは!？」

「こっち！」

「えっあの……」

「ごめんセシリアちゃん！ 今は時間が惜しいから！」

「容態は!？」

「お医者さんの話だと、内臓の損傷と火傷、それと無数の擦傷！」

「よしっ！ それくらいならこれで……!？」

そう言うのと、東ちゃんは注射器を拡張領域から取り出して、一緒に出したアンプルの中身を詰め始めた。

「ナミママ、ポッドを開けて！」

「りようかい！」

「ちよつ、勝手にそのような……!」

ええいつ、止めるなセシリアちゃん!

「これを血管注射でブスリと……これでよし!」

翔ちゃんの右腕に注射を打つと、ひと段落着いたとばかりに東ちゃんは額の汗を拭くような仕草をした。

「東ちゃん、これで翔ちゃんは大丈夫なんだよね……?」

「もち! 東さん特製の医療用ナノマシンを注射したから、2, 3時間で元に戻るはずだよ」

「そっか……」

それを聞いて気が緩んだのか、私は崩れ落ちるように椅子に座り込んだ。

「あ、あのー、美波さん?」

「あえ?」

「こちらの方は……?」

あつそうか。セシリアちゃん面識なかったもんねー。

「篠ノ之東だよー」

軽ーい感じで東ちゃんが自己紹介をした。昔は私や翔ちゃん以外、相手の顔すら見ようとしなかったから、これでも成長したんだよねー。

「篠ノ之束!!? ああ、I S 開発者の!!?」

「そだよー」

あゝ、セシリアちゃんのテンプレな驚き方に、束ちゃん喜んじやつてるよー。

「それで、篠ノ之博士」

「ん?」

「翔さんに打ったナノマシン? ですが、副作用などは……」

「おいおい、この束さんが作ったものに、副作用なんてあるとでも? ……」

Exac<sup>その通りです</sup>tory

「ちよおおお!!?」

セシリアちゃん、おちよくられてるから。

「それで束ちゃん、どんな副作用なのー?」

「このナノマシンは体の新陳代謝を活性化させることで、傷の治りをものすごく早めるってものなのです」

「I S 学園でも治療用ナノマシンはありますが、それ以上のものなのですか?」

「チツチツチツ、束さんの方が遥かに高性能なのだよ」

あれ? 学園のより高性能ってことは……

「もしかして、”治療のために、体中から大量のエネルギーを消費する”ってことー?」

「ナミママせいかい！　だから目が覚めたら、今度は空腹で動けなくなってると思うよ」

それなら、今度病室に来了時にいっぱい食べ物持ってくればいいねー。

「さて、あんまり長居するとちーちゃんに見つかりそうだから、今日はこれで帰るねー」  
束ちゃんはその言うのと、来た時と同じように窓からスライディングで病室を出て行った。

l s i d e 美波 o u t

—  
???

l s i d e 翔

辺り一面、真っ白な世界。

これはあれか？　死にロキ部屋行き戻ったか？

『いいえ、貴方はまだ生きています』

突然の声に振り向くと、そこには見知った奴がいた。本来、いるはずのない奴が――

「これは一体、どういう仕組みなんだ？　なあ……フィオナ」

かつて別の外史で出会い、先Unknown代からホワイト・グリントを引き継ぎ、戦い、別れた時のままの姿で、彼女はそこにいた。

『正確には、私は貴方の知るフィオナ・イエルネフェルトではありません』

「どうということだ？」

『貴方が私を操縦していく中で、貴方の記憶の中の『フィオナ・イエルネフェルト』が焼き付き、そして私が生まれました』

『私を操縦』って……おい、つまりそれって……

「まさか、お前は……」

『そう、私は——』

『私は、ホワイト・グリント。IS『ホワイト・グリント』の、コア人格です』

「ISコア……」

『だから、私はホワイト・グリントであると同時に、フィオナ・イエルネフェルトでもあります』

東さんから、ISコアの深層には独自の意識があるとは聞いていたが、まさかこんな風に相対することになるとは……。

「あゝ……とりあえず、今はフィオナと呼んでおく」

『分かりました』

「それでフィオナ、俺はまだ生きてるんだな？」

『はい。Q Bによる内傷、ビームを受けた際の熱による火傷、AA使用時の衝撃によ

クイックフースト

る外傷、および展開解除され落下した際の衝撃で気を失っている状態です』

うん。死んでないだけで、結構ボロボロだな。

『とはいえ、『ドクター』が訪れたようなので、心配はしなくてよいかと』

「ドクター……東さんか？」

俺の問いに、フィオナが首を縦に振る。

『さあ、そろそろ意識が覚醒する頃です』

「そうか……」

心なしか、眠気のようなものを感じて来た。

『それではまた、いつかお会いしましょう……マイ・マスター』

「その顔で……マスターは……違和、感が……」

最後まで言い切ることが出来ずに、俺はまた意識を失った。

l s i d e o u t l

——I S 学園、理事長室

l s i d e 千冬ー

私は理事長室で今回の顛末、その詳細を説明していた。

しかし今回は、轡木理事長だけでなく、I S 委員会日本支部長の男も同席していた。

「なるほど、大筋の話は理解できました」

理事長は頷くと、向かいのソファに座っている支部長の方を向き

「I S 委員会としては、今回の件をどう判断されていますか？」

「謎のI S の侵入とハッキングを許した件については、警備プランの再考と提出を学園側に要求する旨で、各国とも意見が一致しています」

警備プランの再考だと？ どれだけ強固にしよう<sup>東</sup>とあいつが相手では意味がないぞ

……！

だが、あいつがやったという確証がない以上、やらざるを得ないか……

「そして各国はおろか、国内でも意見が割れているのが……織斑一夏の処遇についてです」

「なっ！ どういうことですか!？」

なぜ一夏の処遇などという話になる!？」

「どういう？ あれだけの問題を起こしたのですよ？ 多くのI S 操縦者の卵を死なせ



かねないマネを」

一夏がシールドバリアを破壊したことか……!」

「……委員会の意見がまとまらないため、今回の彼の処遇については、学園側にお任せします」

「……分かりました」

理事長が頷いた。状況は良くないが、なんとか学園内で収めることができそうか……。

「それでは私はこれで」

そう言つて支部長は立ち上がると、部屋のドアに向かって歩いていたが

「それとこれは独り言なのですが」

「? なんですか?」

「最初に今回の事件内容が知らされた時、『織斑一夏を研究所送りにしよう』という意見もあがっていました」

「なっ!」

一夏を……研究所送りだとい?!

「委員会内で多数決を取った結果、ギリギリ規定数を満たさず流れましたがね」

「そうですか……」

「ただ、反対票を入れたメンバー全員が口にしていましたよ」

『千冬様の弟でなければ、何の躊躇いもなく研究所送りにしたのに』、と  
ブリュンヒルデ

「……っ!!」

「それでは、改めて失礼します」

「——待ってください」

「何ですか？」

「貴方は……貴方はどう思われているのですか？」

ドアノブを握ったまま

「……私には年の離れた従妹がいますね。今はIS学園に在籍しています」

振り向いた支部長の目は

「北山翔。彼がいなければ、あの時、あの場所<sup>対抗戦の観客席</sup>で、死んでいたでしょうね……どこかの誰かのやらかしの所為で」

怒りと憎悪がこもっていた——

Inside 千冬     out

## 第17話 目覚め

l s i d e 翔一

目が覚めると、病室らしい部屋のベッドの上だった。

「……知らない天井だ」

まさか、自分がこのセリフを言うことになるとは思わなかった。

とりあえず起き上がろうとして……うん、普通に上半身は上がるな。どうやらフィオナが言ってた『ドク<sup>東</sup>ター』<sup>さん</sup>がどうにかしたのだろう。

「翔ちゃん？」

声のする方を向くと、ちょうど部屋のドアを開けた美波だった。

「おう」

「翔ちゃん……」

美波はツカツカと俺の方に歩いてくると

——パチンツ！

「痛った!？」

不意打ちデコピンは卑怯じゃありません!?

「翔ちゃん無理すぎー」

さらに追い打ちをかけるように、美波が俺の頬を両手でサンドして  
「私も、セシリアちゃんも心配したんだよー?」

「……」

「もー、ちゃんと分かってるー?」

「分かってるって」

そりゃ、分からんわけないだろ。

そんな涙目で言われたらさ……。

「ただいま、美波」

いつものように、頭をポンポンと撫でる。

「うん。おかえり、翔ちゃん」

——グウウウーツ!

「……」

「……」

まあ、何というか……

俺の腹の音だ。

「……プツ！ アハハハハハッ！」

もう、2人して笑うしかなかった。

「翔ちゃん、ロマンなさすぎー」

「しょうがねえだろ、寝てたって腹は減るんだよ」

「それについては、束ちゃんが原因なんだけどねー」

そう言つて、美波は昨晚のことを話し出した。

AAでゴーレムを撃破したものの、展開解除されて真つ逆さまに落ちたこと。落下した俺を美波が不知火でキャッチしたこと。

そのまま学園内の集中治療室に運ばれたこと。

後遺症が残る可能性を伝えられたこと。

束さんがやってきて、医療用ナノマシンを注射したこと。

そのナノマシンの効果で、一般病室に移されるほどに回復したこと。

「で、翔ちゃんが空腹で仕方ないのは、ナノマシンの副作用なんだってー」

「まあ、火傷と内傷で後遺症が残る可能性に比べたら、許容内のデメリットだな」

「だねー」

——コンコン

「美波、翔はまだ——って翔!？」

鈴だった。

「翔! アンタもう大丈夫なの!？」

「おう、見ての通りだ」

「そっか……」

鈴はそう言うのと、ベッドの横にあったパイプ椅子に座り込んだ。

「そうだ、結局クラス対抗戦はどうなったんだ?」

「あんなことがあったのよ? 中止よ中止」

「だよねー」

それもそうか。当たり前のことを言いちまったな。

「それより、今回の件、箝口令が敷かれるらしいわよ」

「箝口令?」

「そう。『IS学園が襲撃されるなんて、IS神話に傷がつく』って、女性権利団体から

「IS委員会経由で圧力がね」

「そうか……」

ありもしない神話を守るために、事実を隠蔽するつもりか。

束さん。どうやら、言っても聞かないどころか、事を起こしても無視し続けるつもりらしいですよ。

「誰から聞いたのー?」

「箆口令のことを聞かされた時、千冬さんからチラツとね」

「鈴ちゃん、織斑君と幼なじみだから、織斑先生ともその頃から面識あるんだもんねー」

「う、うん……」

「? どうしたのー?」

美波が不思議そうな顔を見ると、鈴は俺と美波の顔を見て

「2人に、言っておかなきゃならないことがあるの」

「?..」

「あたし……」

「一夏のこと、諦めたから!」

「……そっかー」

「……理由を、聞いてもいいか？」

「転入すぐに、一夏を引っぱりたいことあったでしょ？」

あつたな。色々勘違いされた酢豚の件。

「実はさ、あの後一夏に謝ったんだけど、別のことで喧嘩になっちゃってさ」

「あれほど負い目を残すなど言っただのに……」

「それ今は言わないでよ！　で、あたしもその時は頭に血が上っててさ、口も利かなかったのよ」

何があつたかは知らないが、かなりお冠だったんだな。

「でもホントはさ、仲直りする気はあつたんだ。……その時はまだ、一夏のが好きだったから……」

頑張って作り笑顔を作ろうとして失敗した鈴は、顔を俯かせて

「でも、一夏が観客席のバリアを破つたのを見た時……ダメになっちゃった」

「……」

「あいつ、昔から『俺が守る』って口癖のように言ってたのよ……でも、ホントは何も考えてないって、あれを見て、分かつちやつたから……あの時、あたしを助けてくれた時も、たぶん、何も考えて……何も思ってた……」



「鈴ちゃん……」

俯きながら、パタパタと涙を流す鈴を、美波がゆつくりと抱きしめた。

「だから、あたし……」

「うん」

「ナミママの子になる！」

「んん!？」

どうしてそうなった

l s i d e 翔 o u t l

——学生寮1025号室

l s i d e 千冬 l

「どうしてだよ千冬姉！」

先ほど決まった一夏の処遇について伝えに来たのだが、案の定か。

「どうして俺が懲罰房なんかに！」

2 週間の懲罰房行き。それが一夏に科された処分だった。

だが、本来ならもつと厳罰に処されるはずだった。それを何とか減刑してもらい、2 週間になったのだ。

「織斑、お前、自分が何をしたのか理解していないのか？」

「分かっているさ！ みんなを守るために戦ったんだからな！」

守るだと？

「……観客席のシールドバリアを破ることがか？」

「それは……でも、みんなを一刻も早く助けるためには仕方なかったんだ。必要なことだったんだよ！」

「その結果、戦闘に参加、いや乱入したお前は敵機のビームを食らってあっさり撃墜、ビームはそのまま観客席を目指し、最悪生徒達が犠牲になっていたかもしれないわけだが？」

「わざとやった訳じゃない！……不可抗力、そう、不可抗力なんだよ！」

「……なるほど、不可抗力か」

「そう、不可抗力さ！ それに、結局みんなに被害はなかったわけだし、結果良ければ全てよしだろ？」

「北山が被害を受けただろうが」

「翔？ 別にあいつのことなんかどうでもいいだろ」

「……は？」

その言葉を聞いた時、私の頭の中は真っ白になった。

どうでも、いい……？

「あいつも俺の『女は守るべきもの』って考えを理解したからこそ、ああなっただけなんだし。男なら女を守って当然。その過程で傷つくのも当然、だろ？」

「……」

どうして……どうしてそんなことを言うんだ、一夏……

「だから俺がやったことは正しいし、懲罰房行きなんか何かの間違いさ」

もう、だめだ。これ以上、一夏に何かを口にさせたら――

「……一夏、右腕を出せ」

「？ あ、ああ」

突然言われた一夏は、条件反射で右腕を出した。

私はその腕を掴むと、白式の待機形態である白い腕輪を外した。

「な、何するんだよ千冬姉！」

「警備員」

私の声に、部屋の外で待機していた偉丈夫な警備部員——数少ない男性職員——が4人、中に入ってきた。

「織斑を、懲罰房に」

「なっ！千冬姉?!」

驚く一夏をよそに、警備部員4人の内、2人が一夏の腕を左右から掴み、残り2人が前後を固める。

「くそっ！離せよっ！がふっ！ううう!!」

途中で他の生徒達に見つからないよう、口に猿轡をかまされ、さらに頭から麻袋を被せられて、一夏は連行されていった。

そんな一夏を、私はジッと見送ることしかできなかった。

「千冬さん……」

部屋の奥から、これまでのやり取りを見ていた篠ノ之が出て来た。

「織斑先生だ、篠ノ之。織斑の件に変更はないぞ」

「……」

「こればかりは、私でもどうにもならない。」

「なあ、篠ノ之」

「何ですか？」

「お前は、今でも織斑を……一夏のことを想っているか？」

「……分かりません」

「そうか……」

それだけを聞くと、私は白い腕輪をスーツのポケットに仕舞うと、部屋を後にした。

l s i d e 千冬 o u t

l s i d e 束

「だ、やっぱりそうなるかあ」

サーバを片っ端からハッキングしてみた

ネット上の情報を漁ってみたけど、やっぱりIS学園襲撃について一切情報が無かった。

「箝口令……ちーちゃんか、はたまたIS委員会とかいう凡愚共か」

まあいいや、そっちがその気なら、こっちだって考えがあるもんね！

「ん？ なんだろこれ」

情報漁りしてた時に出てきたのかな？ IS学園編入者？

……ほほう、これは面白そうだ。

「ナミママに教えてあげよーっと！」

私は壁に貼り付けていたスマホを取ると、ナミママの番号をコールした。

「——あ、ナミママ？ 東さんだよー！ うん……あつ、シヨウママ目が覚めたんだ！ 良かったー！」

シヨウママもあれから目が覚めて、ナノマシンに持てられたエネルギーを補給するために食堂でドカ食いしてるんだって。

……私以外にナミママの子が出来た？ ほう、それは一度顔合わせが必要そうですねあ……。えーつと、セシリア、だっけ？ あの金髪ドリル娘とも、シヨウママとの関係についてOHANASHIが必要そうだしね……。

「つとそうだ。それでさあ、今ネットサーフィン<sup>ハッ</sup>したら面白そうな情報があつてね。なんでも、1組に編入生が2人入ってくる予定みたいなんだけど——」

「そのうちの1人、」 3人目の男性操縦者「なんだって」

l s i d e 東 o u t l

## 閑話 ここまでの主要な登場人物説明 その2

織斑一夏（おりむら いちか）

年齢：15歳

出身：外史・I Sの日本

来歴：

外史・I Sの本来の主人公。ヒロイン勢の想いを全く意に介さない鈍感ボーイ。

本来、ご都合主義と言わんばかりに、どんな行動をしても『一夏すごい』という流れになるはずだったが、本作では翔と美波が介入したため、原作ではなあなあで済まされていた彼の悪い部分がクロースアップされてしまい、本人の意志の強さ（自分から変わろうとしない姿勢）も相まって、自己中心的な言動が目立つようになってしまった。（本作が「改悪」や「原作リスペクトが無い」と言われる所以）

原作では『ワールド・ページ』を通じて心境が変化、ヒロイン達を意識し始めるのだが、本作ではここまで人間関係が拗れた以上、関係修復は絶望的と思われる。

そもそもこのお話、『ワールド・ページ』まで続くの？

篠ノ之箒（しののの　ほうき）

年齢：15歳

出身：外史・ISの日本

来歴：

外史・ISのヒロインその1。篠ノ之束の実妹。

序盤はほぼほぼ原作通りで、一夏一筋。

剣の腕が鈍っていたからといって、代表決定戦までの1週間、一夏に剣道ばかりやらせていたダメっ子でもある。一夏も途中で断れよ。なに当日になってから言い出しているんだ。

クラス代表決定戦での一夏の発言から、自分の心の中にあつた一夏との間に齟齬を感じるようになるが、それでもまだまだ一夏Loveであり、代表決定戦で大敗し、精神的に追い詰められている一夏のことを心配している。

が、クラス対抗戦<sup>バカリ</sup>での出来事<sup>ア壊件</sup>で、とうとう一夏への想いに罅<sup>ひび</sup>が入り始める。

セシリア・オルコット

年齢：15歳

出身：外史・ISのイギリス



来歴：

外史・ISのヒロインその2。イギリスの代表候補生。

元祖ちよろイン（アニメ版で一夏に惚れる理由を尺の都合でカットしたのが原因）だが、本作では理由があってもちよかった。

原作と違い、本作ではPONは比較的少なく、英国貴族としての誇りは保てている模様。

オリ主の翔に惚れて「絶対に振り向かせて見せる」宣言をするなど、原作より積極的である。強い。（迫真）

また、本作とは全く関係ない余談だが、作者はオルコツ黨員である。

凰鈴音（ふあん りんいん）

年齢：15歳

出身：外史・ISの中国

来歴：

外史・ISのヒロインその3。中国の代表候補生。

一夏が昔の約束を誤って覚えていた件（酢豚事件）で落ち込んでいたところ、翔と美波に出会い、一夏が約束を理解していなかった悔しさと悲しさから、美波に縋りついて

泣いてしまう。

そう、”美波に縋りついて”泣いてしまったのだ。

それが原因で美波のハグポが発動してしまうが、その時はまだ一夏への想いがあつたため問題なかった。

しかし、クラス対抗戦後に一夏のことを諦めたことから、そのままハグポの浸食を受け、ナミママの子になってしまった。束さんとおそろし。

織斑千冬（おりむら ちふゆ）

年齢：24歳（束と同ね（記述はここで終わっている））

出身：外史・ISの日本

来歴：

織斑一夏の姉。1年1組担任兼1年生寮長兼茶道部顧問という、長い肩書を持つ。さらにそこにブリュンヒルテという肩書も持っている。情報過多である。

弟のことで頭を痛めているが、本作では頭どころか胃腸すら痛めるほどに苦労している。

そもそも千冬が一夏の保護者として、きちんと事態への介入、一夏への教育と矯正ができていれば、ここまで事態が悪化することは無かつただろうに。

とはいえ、一夏の意志の強さ（頑固さ）と、言動が突発的過ぎて気付いた時には手の施しようもないことが多々ある状況で、それは酷というものか。

山田真耶（やまだ まや）

年齢：22歳

出身：外史・ISの日本

来歴：

1年1組の副担任。通称まーやん。

苦労人なのは原作準拠。ただし、千冬が一夏に手一杯で真耶を弄る余裕が無いため、ダメージは原作より少なめ。（一夏からのダメージはきつちり入っているが）

ドジっ娘気質は消えておらず、第5話で一夏がセシリアに言った「教官？それなら俺も倒したぞ？」は、原作と同じ彼女の自滅である。

第17話時点で、一夏に対して悪感情を持っていない稀有な存在。  
嫌なことがあると、酒飲んで寝て忘れようとするタイプ。

## インターミッション

## 第18話 対抗戦翌日くGWのご予定は？く

クラス対抗戦中の翌日、SHRの時間。いつもより賑やかさに欠けた教室に、千冬と真耶が入ってくる。

「みなさん、明日からGゴールデン・ウィークWに入ります。それが明けると本格的にIS実習が始まりますから、事故や病気に気を付けてくださいね！」

「「「はい」」」

「それではSHRは終わり——」

「せんせー、織斑君はどうしたんですか？」

クラスを代表して、鏡ナギが自分の席の右隣——織斑の席——に視線を向けながら聞いた。

「それは……」

「織斑は授業には出ない」

と、千冬が代わりに答える。

「どういうことですか？」

「織斑は対抗戦で独断専行に走ったため、GW明けまで謹慎処分となった」

謹慎処分、ものは言い様である。

そしてこれが、千冬が織斑の減刑を願い出てまで2週間の懲罰房行きにして、すぐに執行した理由でもあった。

GWを挟めば、織斑だけが教室にいない時間が減る、孤立感を薄められるのではないかという考えからだった。

「それではSHRを終わる!」

有無を言わさないかのように話を切ると、千冬が教室を出て行き、慌てて真耶も後を追いかけて行った。

Isidore翔一

「シールドバリアを破って生徒達を危険に晒したことについて、織斑姉弟から謝罪も弁明も無し、か」

「何とも釈然としませんわね……」

「先生も、弟の織斑君を庇いたいのとは分かるけどねえ……」

「教師としてそこは分けてほしかったな」

「そうだそうさ」

S H Rが終わり、俺の席に集まってきた面々。（俺、美波、セシリア、相川さん、布仏さん）

元凶は織斑だが、先生にもとばっちりが行つた。いやむしろ、織斑の保護者として必要な処置を怠つた先生が悪いのか。

「あの時北山君がいなかったらどうなつてたことか……」

「命の恩人だね」

「ホントだよー」

周りのクラスメイトからの褒め殺しが恥ずい。

なんでも、謎のI Sが撃破されたのは知つてたが、それが俺の手によるものだと思つたのは今朝になってからだったとか。

「そういえば、G W明けにまた転校生が来るんだつてー」

「えっ！ ホント!?!」

「どこ情報?!」

「それは秘密だよー」

「うわー、ナミママ教えてよー」

美波が転校生の話をしだしたことで、他の女子達も美波の周り（つまり俺の周りにも）

集まってきた。

「なんでも、フランスとドイツから2人来るんだってさー」

「2人も!? 今年は転校生がいっぱいだあ!」

「例年ではあり得ないぐらいですね」

集まっていたクラスメイト達は、転校生の話題で盛り上がり始めた。

「翔さん」

「ん? どうした?」

「転校生というのは、昨晚の……?」

「ああ、そうだ」

そう、昨晚のことだ――

――

――学生寮内の食堂

ガツガツ ムシヤムシヤ――

「あ、あのお翔さん? もう少し落ち着いて召し上がっても……」

「セシリアちゃん、それは無理だと思うな――」

ああ無理だ。なにせ死にかけの体を治すだけのエネルギーを持ってかれたんだ、とにかくカロリーを胃にぶち込むことしか考えられん。

いつも食う唐揚げ定食、ここまで空腹だと全然味の感じ方が違うな。それにミックスフライ定食、初めて頼んだけど結構美味いな。

そうこう考えているうちに、注文していたものは8割方胃袋の中に消えていた。

「それにしても、さすがは篠ノ之博士ですわね。あれだけの傷が、1日足らずで完治するなんて」

「確かに、すげえ技術だよなあ」

そう言いながら、勢いで注文していた『マカロン5種』とやらを食べようと手を……ありや、手が届かない。

「セシリア、すまんけどそれ取ってくれるか」

「それ……ああ、このマカロンですわね」

セシリアはマカロンの乗った皿を手にとると、乗っていたマカロンを手にとって

「はい、あくん、ですわ」

「へ？」

ええつと、セシリアさん？　つまりそれは、そういうことですか……？

「ささ、あくん」

マカロンを俺の口元に差し出した状態から、まったく動かないセシリア。

「あ、あーん……」



覚悟を決めて（ある意味諦めて）、マカロンを食べる。……味なんか分かんねえよ。  
というかセシリア、お前まで顔赤くしてどうすんだよ……。

今は周りに人がいないから良かったものの、前に会った新聞部の先輩とかがいたら大変な目に遭ってたぞ……。

「編入生ー?」

この恥ずかしい流れをぶった切ったのは、いつの間にか誰かと通話していた美波だった。

「そうなんだー。……うん、分かったー。翔ちゃん達にも伝えておくねー。それじゃまたねー」

通話を切ると、美波はスマホを仕舞いながら

「東ちゃんからだったよー。翔ちゃんが動けるようになって、喜んでたよー」

「そうか。今度会ったらお礼を言わないとな」

「そだねー」

とはいえ、ホワイト・グリントがほぼ全損状態だから、近いうちに東さんの所SRCに行つて修理を頼まなきゃならんだろうな。

「それで美波さん、編入生というのは？」

「あ、そうそうー」

セシリアからの質問に、美波はポンと手を叩く。

「束ちゃんもネットサーフィンしてて知ったらしいんだけどー」

ネットサーフィン……ああ、ネットサーフィン<sup>どこかにハッキング</sup>ね。

「GW明けに、フランスとドイツの代表候補生がIS学園に転校してくるんだってー」

「それは……」

「言い方は悪いが、鈴<sup>男性操縦者目当て</sup>のご同類が遅ればせながら、つてところか」

「だろうねー」

確か、シャルル（シャルロット）・デュノアとラウラ・ボーデヴィツヒだったか。

美波から聞いてたが、どっちも専用機持ちなんだよなあ。前も思ったが、専用機バーゲンセールしすぎなんだよ。

織班入学まで、専用機持ちは3年1機、2年2機、1年2機（セシリア含む）の全5機だったのが、現時点ですでに9機だ。（5＋織班＋俺＋美波＋鈴）

そこからさらに2機追加とか、1学年だけで元の全数を倍にしているじゃねえか。

「あ、それと束ちゃんが、鈴ちゃんとセシリアちゃんに会いたがつてたよー」

唐突に思い出したかのように、美波が話題を変えた。

「篠ノ之博士が、わたくしと鈴さんにですの?」

「うん、セシリアちゃんとは『OHANASHIしたいな』って言ってたよー」

「……セシリア?」

「なぜでしょう……『少し、頭冷やそうか……』という幻聴が……」

「なんか、めっちゃ震えてるぞ……?」

—————

「お、思い出したらまた幻聴が……」

「またセシリアが震えだしたよ……」。

「それで翔ちゃん、GWはどうしよつかー」

「差し当たり、ホワイト・グリントを直してやりたいな」

「それじゃあ、初日はSRCに行こっかー」

「美波の予定はいいのか?」

「私は2日目に鈴ちゃんと買い物行く約束してるから、それ以外なら問題ないよー」

「そういえば、SHRの前に鈴が来て約束してたな。」

『ナミママ! GWのどつかで駅前のショッピングモールレゾナンスに買い物行こう!』

「そう言つて、美波にしがみついていたな。大昔流行っただつこちゃん人形かよ。」

「マジで東さんと同じように、ハグポにやられてるな……」。

「あの、翔さん」

「おつ、幻聴からは解放されたか？」

さつきまで消えかけてた、目のハイライトは戻ってるみたいだな。

「そ、それはさておき……SRCですが、わたくしも同伴させていただけないでしょうか」

「束さんに会うためか？」

「ええ。どうせお会いするなら、早い内の方が良いと思ひまして……」

「俺は構わないぞ」

「私もいいよー」

という軽い調子で、俺達3人のGW初日の予定は決まった。

l s i d e 翔 o u t l

l s i d e 真耶 l

「やっぱりダメですか……」

クラス対抗戦で襲撃してきたISの残骸を解析していた私は、すごく困ってしまいました。

だってこれは……

「山田君、解析の結果は出たか?」

織斑先生が部屋に入ってきました。

「一応出ました……凰さんや北山君の証言通り、人が搭乗する箇所に大型コンデンサーを搭載した無人機でした」

「……ISコアは?」

「無理ですね……コアの破損が酷すぎて、登録されているものの判断もできません」

「そうか……」

そう、北山君が撃破した無人機のコアは、2機がレーザーブレードの直撃で大半が溶解。残った1機に至っては機体ごと粉々に粉碎、いいえ崩壊していました。これでは解析のしようがありません。

「ご苦労だったな。今日はもう上がるかい」

「いいんですか?」

「いいさ。山田君にはGW明けに頑張ってもらうからな」

「え……?」

GW明けに、頑張る?

「実は先ほど、IS委員会欧州支部から学園宛てに連絡が来てな」

そう言うのと織斑先生は、ここに来てからからずと持っていた大判封筒から紙を取り

出すと、私に見せてきました。……え？

「GW明けに、フランスとドイツから2人、転校生が1組に入ってくるようになった」

「しかも、片方は“男”だ」

「ええつと……それって……」

私が戸惑っていると、織斑先生は私の肩を叩き、

「寮の部屋割り、再調整を頼む」

……決めました。今日はもう帰って、お酒を浴びるように飲んで寝ましょう。

l s i d e 真 耶   o u t

## 第19話 GW～SRCへ行こう～

——スター<sup>S</sup>・ラビット<sup>R</sup>・カンパニー<sup>C</sup>地下、研究開発室

Isideseシリアー

「やあやあ、みんなよく来たねー!」

GW初日、わたくしと鈴さんは翔さんと美波さんに同伴する形でSRC、いえ篠ノ之博士の元を訪れました。

「し、篠ノ之博士!? IS開発者の!?!」

「そだよー」

目を見開いて驚く鈴さんを、博士がニヤニヤした顔で見えています。

恐らく、わたくしが初めてお会いになった時も、こんな感じだったのでしょう。

そして開発室の機材を借りたいと、翔さんと美波さんが少し席を外した時でした。

「東さんも、2人には一度会わなきゃと思ってたんだよね」

「へ?」

驚いていた鈴さんの両肩に博士の手が乗り、

「お前もナミママの子なんだってねえ……?」

「ひい！」

「そうなるよ、東さんとお前は、姉妹ってことになるんだけど……」  
博士、目が座ってますわ……。

「困ったなあ……東さんの妹は、箒ちゃんだけで十分なんだよ……」

「あ、あの……」

「あん？」

いえですから博士、柄が悪いですわ……。

「だからさあ……ナミママの子になるの、諦めてくんないかなあ……？」

「そ、その……」

「なんだよ」

「義姉妹ってことじゃダメですか!？」

「はっ。」

り、鈴さん？ 何をおっしゃっていますの？

「あ、あたしは、ナミママから離れる気、ありません！ だ、だから、それで何とか……」

「……」



博士は鈴さんを睨みながらも、腕を組んで考えておりましたが……

( ∇、 ) b

許されたー!?

「つまりだ。実妹は箒ちゃん、義妹はお前つてことでもいいんだ？」

「は、はい……先にナミママの子になったのは、博士ですし……」

ああ、鈴さん緊張と恐怖で肩がビクンビクンしてますわ。

「……お前、名前は？」

「ふあ、凰鈴音です」

「……よし、今から君はりっちゃんだ！」

言うなり、博士は鈴さんをハグして——ハグですよ!?

「え、ええええ!？」

「東さんの義妹になったんだ。つまりは身内なわけだね」

「は、博士……？」

「NON! 義理とはいえ姉妹なんだから、名前か『お姉ちゃん』って呼ぶの!」

「ええ!?! ええつと……東姉?」

「いっくんとちーちゃんみたいだけど……まあよし！」

美波さんから聞いておりましたが、身内とそれ以外の差が激しいですわね。

そして博士は、鈴さんをハグから解放すると、こちらに向き直りました。

「それで、セシリアだったわけ？」

「え、ええ。先日はきちんとした挨拶も出来ませんで——」

「ああ、そういうのはいいよ」

博士は手を振って、話を遮りました。

「束さんが知りたいのは、『君はシヨウママの何なのか』ってこと」

「翔さんの？」

「うん」

「わたくしは……」

色々思い浮かびましたが、どれも博士の聞きたいことではないでしょう。だから――

「わたくしは、翔さんの“戦友”ですわ」

「戦友？」

博士が首を傾げました。

「『わたくしは翔さんの恋人ですわー！』みたいなこと言い出すと思ってたよ」

「本当はそう言えれば良かったのですが……今のわたくしはそうなりたくて、戦ってま

すのよ」

「戦うう？」

「ええ。翔さんはおつしやいました。『互いに切磋琢磨する相手、戦友だ』と」

「……」

「だからまだ、わたくしを異性として見ることはできない、とも」

「それって、振られたってことじゃん」

「いいえ」

「え？」

わたくしがあつさり否定したからでしょうか、今度は博士が先ほどの鈴さんのように目を見開いておりますわ。

「翔さんは、まだ」とおつしやいました。ですからわたくし、諦めないことにいたしましたの」

「……」

「今わたくしは、翔さんに振り向いていただくために、真剣勝負の真つ最中ですよ」

「……はっ」

「あははははははははっ!!」

「いやあ、まさかこの東さんが、そんな予想の斜め上なこと言われちゃうとはねえ！」  
「お気に召しまして？」

「いいよ、最っ高！……でもね、これだけは言っておくよ」

大笑いしていた博士は、唐突に真顔になると、凍えるような瞳で

「シヨウママもナミママ同様、東さんの”理解者”で、大切な存在だ。悲しませるような真似したら……分かってるね？」

「あり得ませんわ。わたくしにとっても翔さんは”大切な存在”ですの」

それは自信をもつて……あらゆるものを賭けてでも言えますわ。

「言い切ったよ……まあいいや、りっちゃんともども、仲良くしようか」

怯まず答えたわたくしに対して、博士はわたくしに右手を差し出しました。

「ええ、よろしくお願いしますわ、篠ノ之博士……いいえ、東さん」

l s i d e セ シ リ ア   o u t

l s i d e 美波

「やっぱりデユノア社の状況は切迫してたね」

「そうだな……」

SRC

「この機材を借りてデユノア社の情報を探してみたけど、かなり切羽詰まっていたよ。」

第3世代機の開発に出遅れたせいで、EUの次世代機選定計画に参加できず、フランス政府からも援助金の打ち切りを予告されてるんだよねー。

そこから社長派と副社長派の派閥争いに発展、妾の娘であるシャルロットちゃんの暗殺計画を知った社長が、彼女を逃がそうとIS学園への編入を画策。

ところが、それを知った副社長派が女権団経由でIS委員会に横やりを入れて、男装をさせてスパイを命じたとー。

成功すれば良し、失敗してもIS学園への編入を進めたのは社長だからってことにして、罪を全部被せちゃえて寸法らしいねー。ドロドロだー。

「それで翔ちゃん、これからどうするの？」

「何も」

「あれ？」

「助けないのー？」

「とりあえずは様子見だ。あとはデユノアがどう動くか次第だな」

「白馬の王子様になるチャンスだよー？」

原作通りなら、彼女はまさしく、白馬の王子様を待つお姫様だしねー。

「そんなものになる気はない」

「セシリアちゃんの王子様になるのが先だもんねー」

「そういうのはいいから。それにな……」

「自分の命運がかかっているのに、助けてくれる王子様をただ待つような、自分の足で歩くことをやめた奴に、その先を生きる資格はない」

「……そだねー」

私達は神様じゃないからねー。（一応神の眷属扱いだけど）  
ロキちゃんの部下

『助けて』と声を上げず、手を伸ばしもしない子は、助けられないかなー。  
それでも、出来る限りは助けたいなー。

「お待ちせ——つて、なんで……？」

先に部屋に入った翔ちゃんが怪訝そうな顔した。私も中を覗くと

「りっちゃん!!」

「束姉っ!!」

束ちゃんと鈴ちゃんがハグしあつて、それを虚無顔で眺めてるセシリアちゃん。シニールだねー。

「それでセシリア、どうしてこうなった？」

「一から説明いたしますわね……」

虚無顔から疲れ顔にクラスチェンジしたセシリアちゃんに、私達が席を外した後のことを聞いた。

束ちゃんと鈴ちゃん、義姉妹かー。桃園の誓いかなー？

l s i d e 美波 o u t

l s i d e 翔

「束さん、ホワイト・グリンツの修理と一緒に、お願いしたいことがあります」

「ん？ 何かな？」

「武装です。蹂躞兵器ばかりで対人装備が少なすぎです。おかげでクラス対抗戦は、MARVEだけで鈴とやり合う羽目になりましたよ」

「ええ、いいと思ったんだけどなあ、天使砲」

天使砲って……確かに両肩に展開したら、翼っぽく見えるけど……。

「とにかく、近接武器とライフル系が欲しいです」

「むー、分かったよお。拡張領域にはまだ空きがあるはずだから、出来上がったら詰めて

おくね」

「頼みます」

いやホント、頼みますよ……。

「それと、1つ気になったことがあるんですけど」

「なに〜?」

「織斑のIS、あれって……」

「零落白夜、だね?」

東さんは困ったような顔をしながら、頭を掻きつつ椅子に座った。

「正直、東さんも分からないんだよねえ」

「織斑の白式って、東さんが用意したんじゃないんですか? 紅椿のプロトタイプとして」

原作では、東さんが倉持技研にあつたものを弄つたって聞いてたけど。

「東さんが? ないない! 3月まではショウママとナミママの専用機作ってたし、4月からは会社建てた後、ゴー君作ってたんだもん。そんな暇ないよ」

あ……そう言われればそうか。



「そもそもあれは、ちーちゃんの単一仕様能力なはずだし」  
零落白夜

「ましてや、二次移行していい機体で使えるはずもない、ですか」  
セカンドシフト

「そうなんだよねえ……。シヨウママ、何か推測とかある？」

「そうですね……。突拍子もないものですが」

「それは？」

「東さん、ちよつと……」

「え？」

推測を話す前に、東さんに顔を近づける。

「ちよ、ちよつとシヨウママ？ 嬉しいけどこんなところで」

「プロジェクト、モザイカ」

「……っ!？」

東さんの顔が、驚愕に染まる。

「あの姉弟なら、何があってもおかしくないでしょう」

プロジェクト・モザイカ。遺伝子操作により、究極の人類を人工的に作ろうとした、狂

気の計画。あの織斑姉弟はその成功体だ。

どんな遺伝子の弄り方をしたかは分からないが、もしかしたら、通常の姉弟以上の一致率の可能性だってある。ISが『同一個体』と誤認するほどの。

「その計画のこと、箒ちゃんには……」

「言うわけないでしょう。恐らく学園内で知ってるのは俺と美波、あとは当事者の織斑先生だけだと思いますよ」

「そっか……」

気が抜けたのか、束さんは座っていた椅子にもたれ掛かっていたが、

「あー、束さんでも結構心が疲れたから、ナミママに癒してもらおうって、りっちゃん！ ナミママの右腕にべったりだっこちゃんとかうらやまけしからん！」

「束姉、まだ左腕が空いてるよ？」

「いやっふうううう！」

すぐに立ち上がると、美波に向かって突撃していった。

やれやれ……。

l s i d e o u t l

## 学年別トーナメント

### 第20話 2人の転校生

GW明けの初日。誰1人欠けることなく、1組の生徒達は教室に揃っていた。そう、誰1人。

GW明け、つまり織斑の謹慎（実際は懲罰房入り）が解かれた日でもあった。

「……」

周りは誰も、織斑に話しかけることをしない。

それも仕方ないことである。いくら罰が与えられたからと言って、身勝手な行動で自分達を危険に晒した事実是不変なのだ。

しかし織斑本人は、まったく別のことを考えていた。

（どうして俺がこんな目に遭わなきゃならないんだ俺はみんなを守るために助けるために戦ったんだぞそれなのになんでそんな目で見るんだよおかしいだろ）

懲罰房に入られても、織斑は何も変わらなかった。

彼は悪意無く、むしろ善意で行動していた。

だからといって、その行動が常に正しいかは別問題であり、それが相手に求められているかもまた、別問題である。

織斑には、それが理解できない。

—————

—side翔—

「皆さん、おはようございます」

S H Rの時間になり、山田先生と織斑先生が教室に入ってくる。

全員が席に着いたのを確認すると、織斑先生がこちらを再度見回した。

「まず連絡事項だ。来月から全員参加の学年別トーナメントが開催される。それに伴い、GWの前から予告していた通り、今日から本格的な実機訓練が開始される。そして、I Sスーツの注文申し込みを今日から開始する。モノによつては注文しても届くのに時間が掛かる事もある、なるべく早く注文しておけ。購入し忘れたり、当日までに届かなかった者は、学園指定のスーツを使用するように。もしスーツ無しで来た奴は……学園指定の水着か下着で授業を受けて貰う」

((（うわあ……）))

クラス全員ドン引きである。例年なら笑うところなのだろうが、今年は俺や織斑男がいるわけで……。

「私からは以上だ。山田先生」

「はい」

連絡事項を伝えると、織斑先生は山田先生と交代した。

「今日はなんと！ 転校生を紹介します！ しかも一挙に2人です！」

「「「知つてまーす！」「」」」

「ええっ!？」

タメた分、クラスからまさかの反応に驚く山田先生。

「フランスとドイツからなんですよね!？」

「ど、どうしてそれを!？」

追加情報に、山田先生はさらに慌てる。

すみません、うちの妹が美波フライングしました……。

「そ、それでは、2人共入ってください!……」

どうにか気を持ち直した山田先生がそう言うと、扉が開き、噂の2人が入って来た。

「失礼します」

「……」

明るい笑顔を浮かべる金髪と、ムスツとした表情の銀髪。

情報通りなら、金髪がフランスで、銀髪がドイツの専用機持ちだったか。

そして金髪の方だが……

「え？　男……？」

クラスの誰かが呟いた。

まさか、“3人目”が来るとは誰も予想してなかっただろう。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。僕と同じ境遇の方がいると聞いて転校して来た——」

金髪の自己紹介を聞きつつ、ここからの流れを知っている俺と美波は、あらかじめ準備していた耳栓を装着。そして——

「「「きやああああ——っ！」「」」

うわー……みんなの声で窓がビリビリいつてるよ……

「男子！3人目の男子!!」

「しかも美形！守ってあげたくなる系の！」

「このクラスで良かったあ〜〜！」

自己紹介を途中で遮られたデュノアが、この状況に笑顔のまま固まっている。

それはいいんだが……

（どうしてみんな、デュノアが女だつて気付かないんだ……？）

見た目は中性的と言えなくもないが、体格といい声といい、どうみても男装した女でしかないんだが。ちよつとは疑うぐらいしようや。

——バンバンッ

「騒ぐな。静かにしろ」

「そうですよ。それにまだ、自己紹介が終わつてませんよ〜」

入学日の時のように、出席簿を教壇に叩き付けて黙らせる織斑先生。

「挨拶しろ、ラウラ」

「はい、教官」

促された銀髪の少女は、織斑先生に対して敬礼する。

「ここで敬礼はよせ。ここは軍ではないし、私ももう教官ではない。私の事は織斑先生と呼べ」

「はい、了解しました」

そしてまた敬礼する彼女に、織斑先生は諦めたかのようにため息をつくど、

「……もういい。自己紹介しろ」

「はい」

彼女はこちらを向いて休めの姿勢をする。

目を引くのは、長い銀髪と左目の眼帯、そして小柄な体格だろうか。ぱつと見、鈴と同じか低いぐらいか。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「あの……以上、ですか？」

名前だけのあつさりな自己紹介に、山田先生が確認を取るが、

「以上だ」 ガタンツ！ ドン！

大半がコケたり机に頭をぶついたりしていた。

みんなノリが良すぎやしないか。

「ムツ？」

みんながコケている間に、彼女——ボーデヴィツヒとはとある1点に視線を止めると、そちらに向けて歩いていく。

織斑の方に。

「……貴様が、織斑一夏か？」



「そうだけど?」

織斑がいつものスマイルで答える。

謹慎帰りで、よくそんな顔ができるな。呆れを1周回って尊敬しそだよ。

「……そうか」

それだけ言うのと、ボーデヴィツヒは踵を返した。

おや? 美波から聞いてた話だと、ここで『私は貴様など認めない!』とか言つて、織斑をひっぱたく流れなはずなんだが?

「朝のSHRを終わる。この後は2組と合同での実技授業だ。全員ISスーツに着替えて速やかに第2アリーナに集合しろ」

織斑先生の号令で、あっさり(あっさり?) SHRが終わった。

「織斑、同じ男子としてデュノアの面倒を見てやれ」

織斑先生はそう言うのと、山田先生と教室を出ていった。

(ねえねえ翔ちゃん、どうしてデュノア君を織斑君に任せたんだろー?)

(たぶん、織斑を孤立させないためじゃないか?)

(ああ、なるほどー)

そう、織斑は今1組で孤立している。あの篠ノ之ですら、対抗戦前より接触が減つてる気がするしな。

だがデュノアは、あいつのこれ<sup>様々</sup>までの経緯<sup>なやらかし</sup>を知らないから、フラットな気持ちで付き合えると判断したのだろう。

「さて。俺もそろそろ行かないと、授業に遅れるな」

なんか、織斑とデュノアが他クラスの女子達と追いかけてっこしてるけど……俺しくらね。

l s i d e 翔 o u t l

l s i d e 美波 l

翔ちゃん達が出て行った後、私達はI S スーツに着替えてアリーナに……つて、あれラウラちゃんー？

「ラウラちゃん、アリーナの場所分かるのー？」

「問題無い。学園内の地理は把握済みだ……それと、私をちゃん付けで呼ぶな」

ラウラちゃんに心底不満そうな顔で言われちゃったけど、やめる気はないかなー？  
教室を出て行くラウラちゃんを、後ろから追いかける。

「それとね、ラウラちゃんに1つ聞きたいことがあるんだ」

「だから、ちゃん付けはやめろと」

「1つ、聞きたいことがあるんだ」

「……はあ、なんだ？」

よし競り勝った！

「もしかしてなんだけど、ラウラちゃん、織斑君を引っぱたこうと思ってなかった？」  
「ほう？」

私の質問に、ラウラちゃんが興味を持ったかのように声を上げた。

「なぜそう思った？」

「なんとなくが半分。あとは、ラウラちゃんの目かなー？」

「目だと？」

「うん。色んな感情の混ざった目だったよー。羨望と、怒りと、それに……失望かなー？」

「……」

私の話を聞いたラウラちゃんは、一瞬驚いたような顔をしたけど、すぐに元に戻って  
「ああ、正解だ。私は最初、織斑一夏を殴ろうと思っていた」

「やっぱりー」

「だがな、奴の目を見て、殴る気も失せた」

「どうしてー？」

するとラウラちゃんは、フンツと鼻を鳴らすと

「奴には、殴る価値すらないことが分かったからだ」

l s i d e 美波 o u t l

## 第21話 金と銀

## ——第2アリーナ

「来月に学年別トーナメントが開催される。これは諸君の現在の实力を見るためのもので、原則全員参加だ。よって、今日から実技の授業は実戦を想定した戦闘訓練を行う。訓練機とはいえ、ISである事実は変わらない。事故を起こさぬよう気を付けろ！」

「「「はいっ！」」」

「まず最初に、模擬戦を見学して貰う。凰とオルコット、前に出る」

千冬に名指しされ、並んでいた列から鈴音とセシリアが前に出る。

「織斑先生、わたくしと鈴さんで戦えばいいんですの？」

「いや。対戦相手は——来たぞ」

千冬が視線の先を生徒達も追う。すると、こちらに向かって来るISの姿があった。

そのISは空中で急減速すると千冬の横、鈴音とセシリアの前で着地した。

「「や、山田先生!？」」

まさかの人物に、鈴音とセシリアが声をハモらせて驚く。

「凰、オルコット、お前達の相手は山田先生だ」

「分かりました。どちらが先にやりますか？」

「ああ、勘違いするな。お前達と山田先生、2対1の模擬戦だ」

その言葉に、2人が不満そうな顔をした。

「それはちよつと……」

「先生、いくら何でもそれは……」

いくら現役の学園教師とはいえ、代表候補生2人を相手取ることが可能なのだろうか。鈴音とセシリアの顔は、そう書かれているようだった。

「安心しろ。今のお前達ならすぐに負ける」

「ほう……」

千冬のその言葉には、2人も黙ってはいられなかった。

「そんな風に言われちゃあ」

「ええ、引き下がる訳には行きませんわね」

お互いを見て頷くと、2人は甲龍とブルー・ティアーズを展開する。

「では……始め！」

千冬の合図で、模擬戦が始まった。

l s i d e 翔 l

やっぱりまーやんには勝てなかったよ……。

前衛の鈴に、後衛のセシリア。うまい具合に役割分担ができていたんだが、山田先生が一枚上手だった。

射撃で鈴をうまく誘導し、セシリアが気付いた時には、フレンドリーファイアをさせられていた。

それによつて甲龍はSE切れ。残ったブルー・ティアーズも狩られてしまった。

それでも、山田先生にもいくつか有効打を与えていたから、惨敗にはならなくて良かった良かった。ボロ負けしてたら慰めるのが大変だった。

「これで皆もIS学園教師の実力が分かっただろう。以後は敬意を持って接するよう  
に」

そう締めくくると、織斑先生は手を叩き、

「では、実習を始める……その前に、織斑、前に出る」

「は、はい」

織斑が織斑先生の前に出る。

「お前にこれを返しておく」

そう言つて織斑先生が懐から取り出したのは白い腕輪。

それって白式？ 懲罰明けたらさっそく返すの？ 大丈夫なん？

「俺の白式！」

「いいか、本来ならお前に白式を返すのはまだ先だったが、『データ取りと自衛の為に専用機は必要』という学園の判断で今回返すことになった。前回の様なマネは許さんかな」

「分かったぜ千冬姉！」

——スパーションツ!!

「織斑先生だ」

あかん、これ全然分かってないやつだ。

織斑先生、めっちゃ苦虫噛み潰したような顔してるし。

「さて、改めて実習を始めるが、まず最初に班を作る。専用機持ちは全員前に出る」

そう言われて、俺達専用機持ちが前に出た。

俺、美波、織斑、セシリア、鈴、そしてデユノアとボーデヴィツヒ。7人もいるのか

……。

「実習では、お前達が班のリーダーになる。7人の班を作るので、出席番号順にリーダーの前に並べ」

織斑先生の指示に従いみんなが動き始め、班が出来上がった。

俺の班は……相川さんと鏡さん、それに布仏さんか。



他の班はというと、デユノアの班になった娘は大喜び。

鈴とセシリアの班は、先ほどの模擬戦で善戦していたためか、そこそこ賑やか。

ボーデヴィツヒ班は、班員が話しかけても「ああ」とか「そうか」みたいな反応しか返って来ず、すぐく取っ付きにくそうだった。

織斑の班に至っては、ほぼお通夜状態だ。奴自体が腫れ物のような扱いで、微妙な空気が流れていた。

この後、各班に1機ISが支給され（リーダーが専用機に乗って運び）、それを使って起動から歩行、停止までの一連の動きを1人ずつやることになった。

途中、ISを立ったまま停止させて、次の人が乗れなくなるアクシデントがあったが、何とか全員が時間内に終わったようだった。

ちなみに、一番早く終わったのは織斑班だった。そりや、和氣藹々とした会話もなく、さっさと解散したくてもくもくとやってたらそうなるわな。

—————

授業が終わり、訓練機を片付けた後、俺、美波、セシリア、鈴の4人で学食に来たわけだが……

「相席いいか？」

「おー、ラウラちゃん」

そう、まさか銀髪の方からこっちに來るとは思わなかった。

「だからちゃん付けはやめると……いや、もいい」

どうやら何度も言ったらしいが、残念だが諦めてくれ。

「えつと……」

「ああ、自己紹介はいらん。この学園に來る際に、専用機持ちの情報は調査済みだ」

「それでラウラ、聞いてもいいか？」

とりあえず、ラウラ（話し合った結果、お互い呼び捨てにすることに決まった）には聞いておきたいことがある。

「なんだ？」

「お前がここに來た理由、織斑の情報収集が目的じゃないのか？」

「知らん」

「は？」

「知らんって……」

「私は軍司令部から、IS学園へ行くように指令を受けたただけ。その目的までは知らされていない」

「『need to knowの原則』、というわけですか……」

「そういうことだ。私は指示に従えばいい。あとは軍の上層部が判断するだろう」  
なるほどな。

「それにな……」

ラウラの視線を追うと、そこには織斑とデュノアがいた。正確には、デュノアにあれこれと話しかける織斑と、それを苦笑いで聞いているデュノアが。

「あれの情報を持つて帰っても、何の価値もないと思うがな」

「し、辛辣……まあ否定しないけど」

鈴、苦笑いはするが否定はしないのな。

「むしろ、私はお前の情報の方が有用ではないかと思っている」

「俺？」

「ああ、日本に来る前に調べた。入学して1週間でイギリス<sup>セ</sup>の代表候補生<sup>リ</sup>と引き分けたのは、賞賛に値する」

「お、おう……ありがとう」

「そうですわ、翔さんはすごいですのよ」

「そうだよー」

「まあ確かに、翔のIS操縦技術は大したものよね」

褒められるのは嬉しんだが、もうちょい人のいないところでお願いできないか……？

恥ずい。

「というわけで、しばらくお前のことを観察させてもらうぞ」

そう言つて、ラウラはニヤリと笑つた。

うゝむ……なんか小さい織斑先生みたいだと感じてしまった。

l s i d e 翔 o u t

l s i d e シャルル

放課後。山田先生に寮の鍵をもらった僕は、自分の部屋となる1025号室にいた。

僕が女だつてバレてないみたいで安心したよ……。

この学園では生徒は寮暮らしで、他の生徒と相部屋になるらしい。

僕のルームメイトは――

「改めてよろしくな、シャルル」

「う、うん。よろしく、織斑君」

そう、1人目の男性操縦者である織斑君だった。

ある意味、僕の目的のためには都合が良かったといえるんだけど……

「シャルル、晩飯食いに行こうぜ」

「あ、先に荷物を片付けたいから、先に行つててよ」

「そうか？ 分かった」

そう言つて、織斑君は部屋を出て行つた。

「はあ……」

織斑君が部屋から離れたのを確認すると、僕はため息をついた。

実家のデュノア社から言われたのは、『男性操縦者・織斑一夏と、その使用機体のデータを盗んでくること』。

そのために、僕を男と偽つてIS学園に送り込んだ。

本当は、こんなことしたくない。けど、僕にはどうすることも……。

「そういえば……」

言われたのは織斑君だけだけど、もう1人、男性操縦者がいたつけ。確か名前は……

「北山、翔……」

I s i d e シ ャ ル   o u t

## 第22話 叫び

l s i d e 翔一

デュノアとラウラ  
2人の転校生がやってきて、1週間が経った。

まず、織斑とデュノアが同室になった。気になったのは、元々同室だった篠ノ之がこれといった抵抗もせず部屋を出て行ったことだ。大丈夫だろうか？

織斑はクラス内で孤立していたし、仲良く出来そうな相手を見つけてご機嫌らしいが、どうなることやら……。

と思っていたら、昨日から織斑とデュノアの様子がおかしい。

あ、(男装が)バレたなこれ。

そのデュノアだが、時折考え事をしているのか、明後日の方向を向きながらため息をついている場面をよく見る。

原作で織斑が口にした『俺が守る！』という言葉を真に受けてのものなのか、はたま  
た――

一方、ボーデヴィツヒは孤立して  
いなかった。

ラウラは反応こそ薄いが、話し方に傲慢な感じはない。そのため、最初こそ取っ付きにくそうだったクラスメイト達だったが、『ああ、そういう人なんだ』と分かってしまえば、それなりにコミュニケーションが取れているらしい。

ロキが言っていた『原作との乖離』が、織斑の次に大きいのがこいつじゃないだろうか？

—————

と、そんなことを考えていた放課後。アリーナで自主練をしようと、更衣室で着替えていると

「あれ？ 北山君？」

「デュノアか」

件のデュノアが、更衣室に入ってきた。

「デュノアもこれから自主練か？」

「うん。織斑君とね」

「そうか」

織斑がこの後来るのか……早めに出よう。

「ねえ、北山君」

と思つてたら、デュノアに呼び止められた。

「なんだ？」

「もしもの話だけど……」

デュノアが目を細める。

「もし自分が鳥籠の中の鳥で、それでも大空を飛びたかったら……北山君ならどうするか？」

「鳥籠を出て、大空を飛ぶだろうな」

「……即答なんだね」

俺の回答に対して羨ましそうにしているが、

「どうしてそんなことを聞いてきたかは聞かないけどな……」

「誰かが鳥籠の扉を開けてくれるのを待ってたら、飛べないまま終わっちゃうぞ」

それだけ言うと、俺は更衣室を出て行こうとした。だが、

「え、それってどういう——」

少し離れたロッカーの陰で着替えていたデュノアが、俺に聞き返そうとして——  
「……デュノア、とりあえず前を隠せ」

俺はそれだけ言うと、顔を背けた。



「え？ き、きやあああああつ！」

そう、デュノアは着替えの途中……つまり、上半身裸の状態――

俺は織斑じゃないんだがなあ……。

――side翔 out――

――

――その夜、1210号室

――side美波――

「じとー……」

「あの一、美波さん？」

「翔ちゃん、いつから織斑君になったのー？」

「いや別に、そんなつもりじゃ……すまん」

はい、素直に謝ってよろしー。

「それで、シャルロットちゃんでいいんだよねー？」

「う、うん……でも、どうして僕のことを？」

「むふふー、私の情報網を甘く見ちゃいけないぜー」

とはいっても、束ちゃんとの機材を借りてだけどねー。

「一応、こちらはデュノアのことをある程度は知ってる。デュノア社が追い込まれてい

ること、情報を得るためにスパイを命じられたこと」

「ぜ、全部知ってたんだ……」

シャルロットちゃんが啞然とした顔をする。まあ、最近知り合ったクラスメイトが、自分の事情を全て知ってたらそうもなるよねー。

「俺の予想だが、デュノアが女だってこと、織斑にもバレてんだろ」

「……うん」

シャルロットちゃんは一瞬驚いてたけど、翔ちゃんの問いに頷いた。

「で、だ。織斑のことだから、『俺が守る！』とか言いながら、IS学園特記事項第21項辺りを盾に時間を稼ごうとか言ったんだろ」

「ど、どうしてそこまで分かるの……?」

原作知識様だねー。

「無意味だな」

「……っ!」

うわー、翔ちゃんばっさり切るねー。

「そもそも時間稼籠城戦ぎなんて、問題解決援軍の当てがあって初めて意味がある。そうじゃなきゃジリ貧になるだけだ」

「……」

ダンマリつてことは、シャルロットちゃんも思うところはあったわけだー。

「……なら、どうしろっていうのさ!」

俯いてたシャルロットちゃんが、顔を上げて叫ぶ。

「デュノア社って大企業が相手なんだよ!」 しかも男装させて転校なんて無茶が通るってことは、フランス政府だって絡んでるかもしれないんだ! そんな状況で、どうしろっていうのさ!」

涙を流しながら、それでもシャルロットちゃんは叫び続ける。やっぱり、シャルロットちゃんもそれぐらいは分かってたかー。

「それとも何!」 『助けて』って言えばいいの!」

「そうだ」

「え……?」

翔ちゃんの言葉に、シャルロットちゃんが固まる。

「もちろん、助けを求めたからと言って、必ずしも助かるとは限らない」

「なら……!」

「けどな、助けも求めず、ただ自分の不運を嘆くだけの奴を、誰が助けるんだ? いや、織斑は守るんだったか。何の打開策もなく」

「……」

「翔ちゃん、いじめすぎだよー」

そろそろ止めに入るかなー？

「ねえ、シャルロットちゃんー」

「北山、さん？」

まだ目に涙を溜めているシャルロットちゃんの頭を撫でる。

「辛い時は、誰かを頼ったっていいんだよー」

「たよ、る……」

「うん。だから、困った時は『助けてー』って言えばいいんだよー」

「だって、助けを求めても……」

「それでも、シャルロットちゃんが思ってること、話してほしいなー。解決できないかも  
しれないけど、理解したいからー」

「美波……」

だってもう、東さんのあの時のようなこと、嫌だもんー。

「……言って、いいのかな……？」

「いいんだよー」

「助けて、くれるの……？」

「少なくとも、私や翔ちゃんは出来る限り手を貸してあげるよー」

そうやって、シャルロットちゃんを撫でていた手をよける。

「……すけて」

最初は小さかった声。けれど

「誰か助けてよお！ 僕は普通の女の子として生きたかったんだ！ こんな、男装してスパイみたいなマネなんてしたくないんだあ!!」

喉を枯らさんばかりに叫んだそれは、間違いなくシャルロットちゃんの本心だったんだと思う――

l s i d e 美波 o u t

l s i d e シャルロット

「さて、デュノアを助ける方法についてだが……」

「え？ あ、あるの？」

だって、大企業や国が相手なんだよ？ そんな簡単に……

「一番簡単なのは、学園に助けを求めることだ。『無理やりスパイにさせられました』つてな。そこから国際I S委員会に告発して、フランス政府とデュノア社――場合によつ

ては I S 委員会の欧州支部もだが——に強制査察が入れば、お前を縛るものはほぼほぼ無くなる」

「そうだねー。そのタイミングでフランスから亡命すれば、シャルロットちゃんは専用機を渡されるぐらい優秀なんだし、日本政府も亡命を受け入れるんじゃないかなー」

確かにそれなら……でも……

「ただしこの方法を取った場合、デュノアの父親はもちろん、今回の件に絡んだデュノア社の社員やフランス政府の人間も牢屋行きになるだろう」

「そう、だね……」

つまり僕は、自分とお父さん達、どちらかを取るしか——

「だからここでプラン B だ」

「え?」

プラン、B?

「翔ちゃん、それフラグだよー」

ふ、フラグ?

「まあフラグはともかく、これを見てください」

そう言つて、北山君は紙の束を渡してきた。

「これは……!」

そこに書いてあったのは、僕が聞いていた話とは違っていた。

社長派と副社長派の派閥争い。僕の暗殺計画。お父さんが、僕を逃がそうとI S学園への編入を決めたこと――

「でも、それならどうして……」

今まで、あんな冷たい態度で、僕を娘とも思わないようなことを……。

「シャルロットちゃんを守るためだろうねー」

僕を、守る？

「わざと不仲を演じることで、副社長派の標的から外そうとしたんだろうな。結局暗殺計画は立てられて、慌ててI S学園へ送ったわけだが」

「そん、な……」

それが本当なら、僕はそんなお父さんを……

「それを踏まえてだな……」

「これまでの罪、全部副社長派に押し付けちまおうか」

ニヤツと笑った北山君は、事も無げにそう言った。

l s i d e シャルロット o u t

## 第23話 それぞれの思い

―side 美波―

「それじゃあ、少しの間辛抱してねー」

「うん。よろしくお願いします」

最後に頭を下げると、シャルロットちゃんは部屋を出て行つた。

「シャルロットちゃん、すぐに女の子に戻れないのは可哀想だけどー……」

「仕方ない、ちゃんと仕込みを済ませてからじゃないとな」

「……そうだねー。それじゃあ」

私はスマホを取り出すと、最近も掛けた番号をコールした。

『やつほーナミママ！ どしたのー？』

掛けた先は束ちゃん。

「束ちゃん、ちよつとお願ひがあるんだー」

そう言つて、私は束ちゃんにこれまでのことを話した。

『うーん……』

「あ、もしかして、忙しかったー？」



束ちちゃんだって、いつも暇なわけじゃないもんねー。

『いやあ、手は空いてるんだけどねえ』

「？」

『ねえ、ナミママ……』

束ちちゃんは、いつもと違う真剣な声で

『どうして、その子デュノアの娘を助けようとするの？』

「どうして、かー……」

それらしい理由は色々言える。シャルロットちゃんに貸しを作るためとか、デュノア家に恩を売るためとか。

でも、束ちちゃんには本心を伝えたいな……。

「……」 似てたから、かなー？」

『似てた？』

「うんー」

そう、似てたんだー。

「周りに自分の境遇を理解してくれる人がいない。助けを、手を伸ばせる相手もない。」

それって、すごく辛いことだよねー」

天才過ぎて周囲とのギャップを埋められずに孤立した、かつての誰かのように……。

「だから、手を伸ばしてくれたなら、ちゃんと理解して、助けてあげたいんだー」

『……そっか』

そういう束ちゃんの声は、得心が行ったような感じだった。

『いいよ、そういうことなら束さんも協力しよう！』

「ありがとー」

『あ、でも最後に確認しときたいことがあるんだ』

「なにー？」

『その子、"ナミママの子"にならないよね？』

「ほ？」

えーつと、つまり、鈴ちゃんみたいになるかってことー？

「たぶん無いと思うなー」

『あつ、そうなんだ！ 良かった良かった！』

そ、そんなに喜ぶことかなー……？

『それじゃあ、準備が出来るまですこし……学年別トーナメント、だっけ？ その辺りまで時間頂戴ねー』

「うん、分かったよー」

その後は少し雑談をして、束ちやんとの通話を終えた。

l s i d e 美波 o u t

—————

l s i d e シャルロット

北山さん達と話をした翌日。僕はいつも通り登校していた。

北山さん曰く、情報工作をするための時間が必要で、それまでは僕が女だってバレないようにしてほしいって。

だから、いつも通り……。

「シャルル、行こうぜ」

……こんな感じで、昨日から一夏がずっと付きっ切りなんだけど。

どうも、僕が昨日帰りが遅かったのが原因らしい。

「お前が女だってバレないように、俺が守ってみせる、な？」

「う、うん……」

一昨日までなら、その言葉にすぐ安心できたと思う。でも……

(だけど、一夏。君は僕をどうやって守るつもりなんだい……?)

『問題解決の当てがない時間稼龍城戦ぎはジリ貧になるだけ』

北山君が昨日言っていた言葉だ。

今なら分かる。そうなる前に、僕は自分の足で足掻くべきだったんだ。

僕を助けようとしてくれたこと、守ると言ってくれたこと、それは本心からだと思われ。だけ……

(ごめんね一夏……でも僕は、守られるだけのお姫様はやめるよ)

l s i d e シャルロット o u t t e r

l s i d e 翔一

「今年の学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦闘を行うため、2人組での参加する。なお、ペアが出来なかった場合は抽選で選ばれた生徒同士で組んでもらう」

今日のSHRは、織斑先生のその言葉から始まり、それだけで終わった。

「トーナメントまであと2週間、いや、ペアの締切は6日後か」

「そうみたいだねー」

SHRの終わり際に配られた申込書を見ながら、締め切りまでの日数を逆算していた。

さて、誰と組むべきか……。

「翔さん？」

「ん？」

振り向くと、につこに笑顔のセシリアが立っていた。

「わたくしと組んで、くださいますよね？」

「お、おう……」

思わず返事をしてしまったが、まあセシリアならいいかな。

「あ、美波はどうす——」

「ナミママー！あたしと組もー!!」

……うん、パートナーには困らなさそうだな。

—————

「失礼しました」

トーナメントの申込書を職員室に持って行った帰り道、曲がり角の先から

「それでは、ドイツで再びご指導いただくことは無い、と？」

「ああ。私には私の役目がある」

この声……織斑先生と、ラウラか？

「役目ですか……生徒の大半が危機感に疎く、ISをファッションか何かと勘違いしている、この学園ですか？」

「そうだ。むしろ、そういった連中の勘違いを正すのが、私の役目だ」

「……分かりました」

それだけ言うと、ラウラは去っていった。

「それで？ 盗み聞きは感心せんぞ」

「なら、こんな廊下でシリアスな話はしないでくださいよ」

別に気配を消してたわけじゃないが、やっぱり気付かれてたか。

「……北山」

「何ですか？」

織斑先生は真剣な顔をする

「対抗戦の件、本当にすまなかった」

頭を下げた。いやいや、こんな廊下ですることじゃないでしょ！

「ちよ、織斑先生」

「大丈夫だ。次の授業は移動教室だから、こっちに來る生徒はいない」

「そういう意味では……」

いや、そういうのも心配はしてましたけど……。

「私の、現場指揮官としてのミスであり、あいつの姉としてのミスだ。それでお前に被害が……」

「……謝罪は受け取りました」

出来れば公の場でとも思ったが、織斑先生も立場があるのは理解できる。

「それで？ 織斑はその件については何と？」

「いや、それは……」

織斑先生がどもる。ということは、まあ、そういうことだろう。

「織斑先生、他人の家庭の事に口出しするべきでは無いとは思いますが、一度あいつと話し合うべきだと思いますよ」

「話し合う？」

「ええ」

首を捻られるが、そんな難しい話じゃない。ただ――

「言わなきや、伝わらないことだってありますから」

東さん然り、デユノア然り。たぶん、織斑姉弟も――

l s i d e 翔 o u t l

l s i d e 千冬 l

「言わなきや伝わらない、か……」

北山がいなくなった廊下で、私はあいつの言葉を呟いていた。

会話自体は今もしている。ただ、それは教師と生徒という枠内だけだ。

思えば、最後に一夏と家族の会話というものをしたのは、いつだったろう？

少なくとも、I S 学園の教師になってからは一度も無かったと思う。

（臨海学校が終われば、夏休みだ。それなら、まとまった時間が取れるはず……）

その時が来たら、一夏と腹を割って話そう。

あいつの本音を聞いて、私の本音を話して。お互いに、思っていることを全て吐き出そう。

今まであいつの保護者として、家族としてやれなかったことをしよう――

l s i d e 千冬 o u t l

l s i d e ラウラ l



（教官は、やはり動かないか……）

そう思いつつ、意外と冷静な自分に少し驚いている。

司令部から指令が来た時は、日本行きにかこつけて、教官にドイツへ戻ってもらおうとばかり考えていた。

だが日本に、IS学園に来てから、その考えに自分の中で待ったがかかった。

『生徒の大半が危機感に疎く、ISをファクションか何かと勘違いしている』、それは私の本心だ。

だからこそ、こうも思ってしまう。『教官ほどの人でなければ、ここにいる連中を正せないではないか』と。

かつてのモンド・グロッソ第2回大会での事件で、ISの光と闇の両方を身を持って体験した教官なら。

で、あれば……

（私自身が強くなるしかない……教官のように、もっと力を……）

l s i d e ラウラ o u t

## 第24話 学年別トーナメント

学年別トーナメント当日。

各国政府関係者、研究所員、企業エージェントなど、錚々たる来賓がIS学園へやってくる。

3年にはスカウト、2年には1年間の成果の確認、そして1年も上位入賞者にはチェックが入るとあって、生徒達も皆やる気に満ちていた。

そして開会式から少しして、対戦表がアリーナの電光掲示板に表示された。

l s i d e 翔一

「1回戦目からラウラか……」

「手強そうですね……」

そう、Aブロック1回戦目から、ラウラ・篠ノ之ペアとやり合うことになった。

ラウラが強いのもそうだが、今まで篠ノ之がノーマークだったせいで、まったく情報が無いのが痛い。

「それで、作戦はどうしますの？」

「そうだなあ……」

セシリアの問いに少し考えるが

「正直、ラウラ相手に1対1は避けたいな」

慣性停止結界

「AIC、ですわね？」

「ああ、俺は直接見たことが無いがな。セシリアは？」

「わたくしは欧州連合のトライアルで一度だけ」

慣性停止結界、対象を任意に停止させることが出来るんだったか。

「正直、実体弾が主武装の翔さんとは、相性が良くありませんわね」

「ああ、だからセシリアには悪いんだが……」

—————

「来たか……」

俺達がアリーナに入ると、すでにラウラと篠ノ之が入場していた。

「まさか、1回戦目からぶつかるとは思わなかったがな」

「それは私も同じだ」

やる気満々だなあ。それに釣られてなのか、篠ノ之も真剣な顔で打鉄の葵を構えている。

「それじゃあセシリア、作戦通りに」

「ええ、承知しておりますわ」

俺達もM A R V Eとスターライトm k I I Iを展開したところで

——試合開始のブザーが鳴った

「なっ!」

ラウラが驚く声が聞こえた気がした。

まあ驚くだろう。なにせ俺はラウラを完全に無視して、篠ノ之に向かって呐喊してつたんだから。

「待てっ! くっ!」

ラウラが俺を追いかけようとするが、そこをセシリアのブルー・ティアーズが牽制で押し留める。

「申し訳ありませんが、しばらくわたくしと踊っていただきますわよ!」

「くっ! 小癪な!」

「北山が相手か!」

「おう、我流剣術どころか、喧嘩殺法で申し訳ないがな」

俺達の作戦、それは簡単に言えば『篠ノ之から先に倒してしまつて、1対2の状況にしてしまおう』ということだ。

そのために、セシリアにはしばらくの間、ラウラを引き付けてもらうことにしたのだ。「別に構わん。いくぞ！」

言うが早いか、篠ノ之が上段の構えから突進してきた。

「そんな織斑みたいな突撃、当たるとで——っ！」

「甘いっ！」

唐竹割から刃を傾けての薙ぎ払いだよ！ 少し装甲を掠つちまつた。

「こんのー！」

——バラバラララッ！

引きながらMARVEの弾をばらまくが、篠ノ之の奴、うまく躲しやがる。

「はあっ！」

——ガキイイインッ！

下段切り上げからの上段振り下ろしの流れにもまったく淀みがなく、俺はMARVEを交差させて受け止めるしかなかった。完全な罅迫り合いだ。

「篠ノ之流を舐めないでもらおうか」

「いやあ、しくつたかもなあ」

当初の予定では、篠ノ之を速攻で倒すつもりだったが、そもいかなくなりそうだ。

l s i d e 翔 o u t l

l s i d e セシリアー

「くうっ！」

まさか、箒さんがあれほど戦えるとは計算外でしたわ！

本来であれば、すぐに翔さんと合流して、ラウラさんと1対2で戦う予定でしたのに。

「私もだが、そちらもあいつの強さは予想外だったようだな」

「ええ、正直一度も戦うところを見ていませんでしたから」

こうやって悠長に話しながら戦えるのも、武装の特性がわたくしに利があるから。

「ふっ！」

ラウラさんが距離を詰めてA I Cを使おうとしたところを高速移動で回避、そのままレーザライフルで攻撃……やはり躲きますか。

「ちっ、やりづらい」

そう、A I Cは任意の物体を停止させる力を持っています。それは言い換えれば、実体のないエネルギー攻撃は止められないということ。

ですが、それでラウラさんを攻略できたわけではありません。

「ならば！」

肩部に搭載されている複数のワイヤーブレードが、わたくしに襲い掛かります。

「っ！」

「そらそら！」

——ガインッ！

「きやう！」

1撃もらってしまいました……まだ、いけますわ！

（ここは使い時、ですわね……）

正直、こんな序盤で使いたくはありませんでしたが、背に腹は代えられません。

「お行きなさい、ブルー・ティアーズ！」

わたくしは4機のビットを展開、ラウラさんを取り囲みます。

「はっ！ お得意の無線ビットか！」

周囲を取り囲まれているのも構わず、ラウラさんがわたくし目掛けて突撃してきました。

「知ってるぞセシリア！ お前は自分が回避行動を取ってる間、ビットを操作できないとな！」

そう言いながら振り下ろしたプラズマ手刀を回避したわたくしを、ラウラさんが追撃

しようとしたところで

——パシイイイン！

「ぐあつ！ なん、だと……!?!」

『回避している間はビット操作できない』そう、以前のわたくしでしたら、ですがわたくしも、いつまでも進歩が無いままじゃありませんのよ？

「……なるほど。あの篠ノ之だけでなく、お前も予想外だ」

「誉め言葉として受け取っておきますわ」

「誉めてるさ。だがな……」

「勝つのは私だ！」

そう言つてラウラさんが再度プラズマ手刀を展開したところで

——ラウラさんのIS『シユヴァルツェア・レーゲン』に、異変が起きました。

l s i d e セ シ リ ア   o u t



Isideraウラー

(まったく、世の中うまくいかないものだな)

当初の予定では、2人目の男性操縦者の翔と戦って、奴の情報を収集するはずだった。だが蓋を開けてみれば、奴は篠ノ之とチャンバラを始め、私はセシリアとやり合うことになった。

しかもセシリアめ、事前情報にあつた弱点を克服していたか。

「……なるほど。あの篠ノ之だけでなく、お前も予想外だ」

「誉め言葉として受け取っておきますわ」

「誉めてるさ。だがな……」

ああ、確かにお前は強い。それは認めよう。だが――

「勝つのは私だ!」

プラスマ手刀を展開して、セシリアに肉薄しようとした瞬間だった。

Existence<sup>北山翔</sup> of Sho<sup>の</sup> Kitayama<sup>存</sup> Confirmed<sup>確認</sup>.  
Eliminate<sup>ターゲットを排除する</sup> the target.

《Valkyrie Trace System》……boot.

(な、なんだこれは!?! ヴァルキリー・トレース・システムだ?!? なぜこんなものがレーゲンに――)

その疑問を口にもすることも無く、私の意識は落ちた――  
l s i d e ラウラ o u t l

## 第25話 偽りの戦乙女

—side翔—

「な、なんだあれは……」

篠ノ之が啞然とした顔をしていた。

そうしている内に、ラウラがレーゲンごと、どす黒い粘土のようなものに飲み込まれていく。

「マジかよ……」

確かに原作通りではあった。が、今のラウラがまさか、とも思っていた。

だが、あれはまちがいなく……。

「翔さん！」

「北山！」

——ヒュンツ！

「ぐあつ！」

セシリアと篠ノ之、2人の声が聞こえるか否かのタイミングで、俺の首少し手前を何かが通り過ぎる。

「つああ、やつぱそうなるか……」

絶対防衛があるとはいえ、首を飛ばされそうになって背筋が冷たくなった俺の目の前には、粘土細工のIS——いや、ブリュンヒルデがいた。

そのブリュンヒルデもどきが、同じく粘土細工のような刀を手に、ずっとこちらを睨んでるような気がした。

（ヴァルキリー・トレース・システム……というか、織斑先生の全盛期強すぎるんだが!?）  
篠ノ之相手なら多少は見えてた剣筋が、全然見えなかった。

こりや、近接戦やったら勝ち目はねえな。  
なんて思ってたら

「うおおおおおおつ!」

……なーんか織斑さん家の一夏君が、零落白夜発動させながらブリュンヒルデもどきに向かって呐喊してったんだが。

——バキイインッ!

「ぐはっ!」

あ、峰打ち食らって吹っ飛んでった。ついでに気絶でもしたのか、展開解除もされたようだ。なんだかなー。

——ヒュンッ！

「つて、やっぱ狙いは俺か！」

織斑が相手の時は、自衛程度の攻撃だったのが、俺相手だと絶対殺すマシーンになつてやがる！

『緊急事態発生、緊急事態発生。トーナメントは一時中断します——』

避難アナウンス！ クラス対抗戦の時と違って、今回は警報もちゃんと鳴ってるのか！

『管制室織斑だ。北山、オルコット、篠ノ之、今のアナウンスは聞いたな？ 制圧の為に教師部隊を派遣する。お前達は何とかして離脱しろ』

「離脱したいのは山々なのですが、どうも奴さんの目的は俺のようでして」

『何だと？』

「さつき織斑が——」

『ちよつと待て。なぜそこで織斑が出てくる？』

なぜって……（ヒュンッ！）危なっ！ せめて通信してる時ぐらい攻撃待ってくれませんか!?

「……織斑先生、先ほど一夏が、敵に呐喊をかけて返り討ちに遭いました」  
『……』

通信越しでも、織斑先生が絶句してるのがよく分かる。

『それで、織斑は……』

「気絶しておりますわ」

『……分かった。篠ノ之は織斑を回収して離脱。北山とオルコットは篠ノ之の離脱を援護してくれ』

まあそれが妥当か。まさか生身の織斑を放置するわけにもいかないだろうし。

「分かりました。それじゃあセシリア、篠ノ之」

「分かりましたわ」

「ああ、分かった」

それを合図に、俺達は3方に散った。

篠ノ之は織斑を回収に、俺とセシリアはブリュンヒルデもどきを左右から挟む位置に。

「それで翔さん、どうするつもりですか？」

「とりあえず、接近戦は絶対NGだ」

織斑じゃないが、絶対に返り討ちに遭う自信がある。

「では、アウトレンジから？」

「その通り。1対2で悪いが、チクチク叩かせてもらおう」

MARVEの弾丸を再装填して、両手に展開する。

「さて、と。ときにセシリア、ダンスは得意か？」

「は？ ダンスですか？ 上流階級の嗜みですから、当然踊れますが、突然なんですか？」

「いやなに、こちらラファールから専用機になって、それなりに思い通りに動けるようになったと思ってな」

「代表決定戦の時のように、俺と輪舞ロンドを踊ってくれるか？」

「……ええ、翔さんがどれだけ上手くなったか、見せていただきますわ！」

セシリアがスターライトmkIIIを構えると同時に、俺達は踊り出した。

ブリュンヒルデもどきを中心に置いた、円状制御飛翔サークル・ロンドを――

l s i d e o u t l

l s i d e 箒

「す、す……」

気絶している一夏を回収して、ピットに移動しながらも、私の目はそちらに釘付けになつていた。

あの粘土細工の様な I S、間違いなく、かつての千冬さんだった。

私でも勝てないであろう、全盛期のブリュンヒルデ。

それを、あの 2 人は完全に抑え込んでいた。

敵がどちらかを攻撃をしようと動けば、もう片方が射撃して動きを止める。

それを円を描くように回りながら、徐々にダメージを蓄積させていく。

北山も、接近戦では勝てないと踏んで遠距離戦に切り替えたのだろう。

それでも、あの 2 人の息があつた動きに、羨ましい気持ちを持つのはなぜだろう。

(私も、一夏とあなることができたら……)

無理だと分かっているながらも、私はそう考えずにはいられなかった。

l s i d e 箒 o u t

l s i d e 千冬



「す、す……い……」

山田君の驚く声に、誰も反応できずにいた。

（北山とオルコット……代表決定戦の時より、精度が上がっているのか）

円状制御飛翔を使い、敵を事実上全方位から攻撃する。

口にすれば簡単だが、それを相手の反撃をも抑えながらとなれば、話は違ってくる。  
本当にこれを、1年生がやっているというのか……？

「お、織斑先生！」

「どうした!？」

「敵が……いえ、ボーデヴィツヒさんが！」

山田君に言われてモニターを見ると、そこには、粘土細工の私がドロドロに溶けて、破損したシヴアルツェア・レーゲンと、気を失っていると思われるボーデヴィツヒだけが残っていた。

「教師部隊、アリーナに到着しました」

「また後手に……いや、教師部隊でレーゲンを包囲。しばらく待つて異常が無ければボーデヴィツヒを収容させろ」

「了解」

「それとWピットに医療班を待機させろ。映像で見えないだけで、北山やオルコットが

無傷とは限らん」

「あの、織斑君は……」

「……ボーデヴィツヒと一緒に収容してくれ」

周りに被害を被らなかつたとはいえ、今回もやらかした弟に、私は頭と胃が痛くなるのを感じた。

むしろ今回こそ、クラス対抗戦以上に来賓が多いイベントだったのだ。そんな場で、あのような行動を見られてしまったのだ。

おそらく、前回の対抗戦以上に、一夏の処遇について厳しい意見が出ることだろう。

（だが、一夏を研究所送りになどするわけにはいかない……い）

例えばどんな罵詈雑言を投げかけられようと、それだけの圧力をかけられようと、それだけは絶対に防いでみせる。

一夏を、唯一の家族を守るために――！

l s i d e 千 冬   o u t

l s i d e 束

「あーもー！　誰だよこんなマネしたのー！」

さつきまでこつそり学年別トーナメントを覗き見してた私は、今すつごく不機嫌だつ

た。

「VTS!?! あんな不細工なもの、束さんのISに載せるなんて信じらんない!」  
外部から強制的にISを操作するう? やつてることが寄生虫じゃないか!

「まったく、今束さんが忙しくなかったらぶつ潰してやるところだよ」

今はナミママからのお願いを聞くためにあれこれやってるから時間が無いけど、これが終わって手が空いたらとつちめてやる!

まあデュノア社の副社長派だっけ? こいつら元々真つ黒だったから、あとちよつとで全部の罪上乘せが完了するんだだけだね。

つと、それよりも重要なことがあつたんだっけ……。

「箒ちゃんに専用機、あげようかなあ……」

今回の件も見てたけど、やつぱり箒ちゃんにもショウママやナミママと同じように、自衛のためにも専用機を持たせてあげたいと思っちゃうよ。

だって、このまま箒ちゃんに何かあつたら……よしつ、決めた!

「やつぱり箒ちゃん用の専用機を用意しよう!」

まずは、ほぼほぼ完成した紅椿をベースに、防御性能を充実させて――

l s i d e 束 o u t l

## 第26話 リヴァイヴ

l s i d e ラウラー

(ああ、これは夢だな……)

そう思ったのは、目の前に見えたのが、かつての私だったからだ。

試験体C-0037。私に『ラウラー・ボーデヴィツヒ』という名前がつく前の、識別上の記号。

そう、私は人工合成された遺伝子から作られた、いわゆる試験管ベビーだった。

思えば、生まれた時から私は、周りの目を見て育ってきたと言えるだろう。研究者共の、好奇や狂気の目を見て……。

そこから、私の人生は波乱万丈だったといえるだろう。

戦うための技術や知識を体得し、好成績を収めてきた。

それが『ヴォーダン・オージェ』——疑似ハイパーセンサーとも呼ぶべき、視覚情報の伝達速度と、動体反射の強化を目的としたナノマシン移植処理——の事故により、『出来損ない』の烙印を押された。

そんな落ちぶれていった私を、教官が拾い上げてくださった。そして再び、部隊内で

最強の座に返り咲いた。

私は教官を、織斑千冬を尊敬している。

自分を救い上げてくれた恩人として、1人の戦士として。

だからこそ、教官の弟・織斑一夏のことを知った時、私は奴を許せなかった。

クラス代表決定戦での暴言、クラス対抗戦での独断専行。どれも教官の顔に泥を塗る行為でしかない。

なぜ、自らの失態の責が姉、保護者である教官にも及ぶと気付かないのか。

だから、I S学園へ来た時、1組の教室で奴を見つけた時、1発殴らなければと思っていた。

「……貴様が、織斑一夏か？」

「そうだけど？」

だが、そんな考えすらも、奴の目を見た時に失せた。

（ああ……だから貴様は、あのような行動ばかり取ったのだな……）

世間一般では、笑顔の似合う好青年と言うのだろう。

だが、奴の目は、奴の目の奥には、狂気が混じっていた。奴は、現実を見ていない。

かつて研究所にいた、自分の理論を否定され、それを認められずに狂ってしまったとある研究員のような。

（これからあの男は、どうなるのだろうか……）

そんな意味もないだろうことを思いながら、私の意識は遠くなっていた――

l s i d e ラウラ o u t

l s i d e 千冬

「……報告は、以上です」

私は前回と同じく理事長室で、轡木理事長とI S委員会日本支部長に報告をしていた。

「そうですか……」

「V T S……アラスカ条約によって、研究・開発・運用が禁止されている技術ですが、まさかドイツが……」

理事長も支部長も、今回起こった事件には頭を抱えていた。

何せ、大国に数えられるドイツが国際条約破りと言える真似をしたのだ。

「とりあえず、ドイツ政府と研究機関に関しては、国際I S委員会が強制査察を行うよう調整中です」

「そこらはお願ひします。それで織斑先生、V T Sの詳細についてですが」

「はい」

私は頷くと、先ほど解析を終えた山田君の報告書の束をめくる。

「ボーデヴィツヒのシュヴァルツェア・レーゲンに密かに仕組まれていたVTSですが……とある条件によって起動する仕組みだったようです」

「とある条件、ですか？」

「はい……」

「件のVTSは……『北山翔の存在を確認した時』を条件に起動、彼の殺害まで動き続けるというものでした」

「北山……”2人目”の？」

「はい」

「なるほど……織斑君が気絶した後放置されていたのは、殺害対象ではなかったから、というわけですか」

「恐らくは」

「そういえば、織斑一夏についてですが……」

来たか！　だが、研究所送りには絶対……！

「今回、IS委員会からは特にありません」

特に、ない？

「前回と違い、今回は彼が勝手に負傷しただけ、それ以外の被害はありませんでしたからね」

そう言うと、支部長は理事長に向き直り

「とはいえ、彼が勝手をしたのも事実ですから、今回も処遇は学園側にお任せします」  
「分かりました」

良かった、これで……

「織斑先生、安心されては困ります」

「え？」

支部長からの指摘で、私は我に返った。

「今回彼が勝手をしたことで、私を含めた委員の大半が懸念しているのですよ。『織斑一夏は前回の失態を全く反省していないのではないか』とね」

「……っ！」

「『次に何か問題を起こした場合、織斑一夏は専用機剥奪の上、研究所送りとする』。これ



は国際ＩＳ委員会、および日本政府の決定事項です」

「そん、な……」

それは、一夏に対する最後通牒だった。

「ですので、しっかり手綱を握っててください」

それだけを言うと、支部長は理事長室を出ていった。

――side 千冬 out――

――

――side 美波――

昨日のラウラちゃんのＩＳが暴走した事件で、トーナメントは中止になっちゃった。

一応、データ取りのために全員一回戦だけはやるらしいけどねー。

「ねえナミママ、今日ってデュノア君とボーデヴィツヒさん、休みなのかなー？」

「そういえば、もう少しでSHRなのに、席にいないね」

「うーん、私も分からないな」

「そつかり、ナミママも知らないか」

クラスみんなに話を合わせているけど、シャルロットちゃんの原因は大体分かっている。

だつて昨日の夜、東ちゃんから連絡があつたんだよねー。『準備完了、明日の朝決行』つてー。

「み、みなさん、おはようございます……」

まーやんが教室に入ってきたけど、すつごいフラフラしてるー。ということは、たぶんそうなんだろうなー。

「連絡事項ですが……ボーデヴィツヒさんは昨日の怪我の様子見ということで、今日はお休みになります」

ありや、原作みたいに翌日復活とはならなかったかー。

「それと、今日はですね……みなさんに転校生を紹介します」

「「「ええええええ!!」」」

「て、転校生ですか!?!」

「この前、デュノア君とボーデヴィツヒさんが来たばかりですよ!?!」

クラスのみんなも驚いてる。2人入って、翌月またとか普通ないもんねー、普通はー。

「転校生と言いますか、すでに転校していると言いますか……」

まーやん、どう説明したらいいかいろいろ悩んでたみたいけど

「えっと、入ってきてください」

「失礼します」

「え……う？」

誰かが漏らした声が、教室中に響いた気がした。それぐらい、みんな静まっちゃったよー。

昨日まで男子の恰好をしていたシャルロットちゃんが、スカート姿で出てきたら、ねえ。

「シャルロット・デュノアです。改めてよろしくお願いします」

『デュノア』君はデュノアさん”でした』ということです。はあ、また部屋割りか……」

「「「ええええええ!!?」」」

うーん、みんな反応がいいねー。

「まずはみんなに謝罪します。騙していてごめんなさい。私が男としてIS学園に転校したのは、デユノア社から男の振りをするよう命令されていたからです。それも社内の派閥争いの結果そうなったもので、今朝その原因が無くなったため、女に戻る事が出来ました。」

理由があつたとはいえ、みんなを騙していたことに変わりはありません。それでも、私はこれからもこのクラスで学んでいきたいんです。どうかこのクラスにいさせてください。お願いします！」

そこまで言い切ると、シャルロットちゃんは深々と頭を下げた。

今頃、デユノア社副社長派の黒い秘密が暴露されて（ついでに今回の件の罪も全部被せられて）、次々に逮捕者が出ているんだろうな。束ちゃんが国際IS委員会のサーバにハッキングして、直接情報を送ったらしいし。

残ったデユノア社内部もいくらかは荒れちゃうだろうけど、そこまではカバーし切れないから勘弁してね。

（あとは、クラスのみんながどう思うかな……）

私達は出来る限りのことはした。でも、それをクラスのみんなが認めてくれるかは別問題だからね。

——パチパチパチ！

「私はデユノアさんが悪いとは思わないよ」

「そうだよ！ そんな事情があつたんじや仕方ないよ」

「大変だったねえシャルロットさん」

「これからもよろしくね、シャルロットちゃん！」

シャルロットちゃんはポカンとした表情をしていたけど、しばらくすると目の端に涙を浮かべながら

「ありがとう、みんな！ これからもよろしくね！」

最初に転校してきた時とは全く違う、飛び切りの笑顔をした。

l s i d e 美波 o u t l

# 臨海学校

## 第27話 臨海学校1日目

「海だあっ！」

バスの中で、クラスの誰かが言った。

学年別トーナメントの事件があつて数日。ラウラも回復（レーゲンも予備パーツを使つて復旧が完了）した頃に、臨海学校の日となつた。

バスの中では、隣同士の席で盛り上がる声が聞こえ、皆テンションが上がっているのがよく分かる。

「楽しみだなあ！」

「いつもは北の海ばかりだったからな。私も楽しみだ」

フランスとドイツから来た2人（トーナメント後に部屋替えて同室になった者同士）は、その中でも特にはしゃいでいた。

「翔ちゃん、そろそろ起きなよー」

「んあ……もう着いたのか」

「もうちよつとで着くよー」

「そうか……じゃあもうちよつと寝られるな……」

「あーもー、翔ちゃーん」

……若干名、眠気の方を優先している者もいるが、バスは順調に目的地へ向かつていった。

（どうしてだ俺がシャルを守るって言ったじゃないかなんで北山さんに助けてもらったって話になるんだ男の俺が守らなきゃならないはずじゃないか）

約1名、またもや自分の世界に嵌まり込んでしまったものも含めて――

――

「ではみなさん、私に付いてきてくださいね」

旅館の駐車場に到着し、バスから自分の荷物を持って降りる生徒達を、真耶が先導して旅館の玄関に向かう。

玄関まで着くと、そこには千冬と旅館の仲居達が待つていた。

「ここが今日から3日間お世話になる花月荘だ」

生徒達にそう言うのと、今度は仲居の方を向いて

「ご迷惑になると思いますがよろしくお願いいたします」

「『よろしくおねがいします』」

千冬に続いて、生徒達も挨拶する。

すると仲居の中から、女将と思われる和服の女性が出て来て「ようこそいらつしやいました」と返事をする。

「それでは、お部屋に案内させていただきます」

班ごとに分かれた生徒達は、それぞれの仲居に案内された部屋へと向かっていく。翔と美波はそのまま、同じ部屋に通された。……寮の部屋割りとは全く変わらなかったわけである。

l s i d e 翔

「『海だああああ!!』」

部屋で水着に着替えて海辺に出たら、同じく水着を着たクラスメイト達が海に向かって走っていた。

臨海学校では、1日目が自由時間、2日目が『ISの日限定空間における稼働試験』、言ってしまうえばISの新型装備を学園以外で動かそうというわけだ。



そんなことを考えてるうちに、みんな海で泳ぎ始めたり、ビーチバレーでも始めるのか、ネットを張り始める人もいた。

「翔ちゃん、私達も行くようよー」

後ろから手を引かれて振り向くと、そこには美波のほかに、セシリアと鈴の姿もあった。

美波は白のフレアビキニ。その水着で泳げるのか出発前に聞いたところ、「今回は泳ぐのは無しでいいかなー」とのことだった。

セシリアはブルーのビキニ。腰にパレオを巻いていて、ビーチパラソルを持っているところからして、こちらもあり泳ぐ気はないのだろう。

鈴は白とオレンジのタンニキタイプ。こっちはセシリアと違い、動きやすさを優先したのか泳ぐ気満々のようだ。

さらに3人の後ろから、シャルロット（女に戻った後、ラウラと同じようにお互い呼び捨てにしようとした）とラウラがやってきた。

「あ、翔達もここにいたんだね」

「うむ。海なんて軍の訓練以来だから、今日は楽しませてもらおう」

シャルロットはオレンジのビキニで、ラウラが……。

「あ、あの……ラウラさん？」

「それはどうなのよ……」

セシリアと鈴がラウラを指さすが……

「別に問題なからう。むしろ普通の水着より機能的だぞ？」

そう胸を張って答えるラウラの恰好は……学園指定のスクール水着だった。

いやまあ確かに、機能面だけで言えばそうかもしれないが……。

「ま、まあいいわ。とりあえずナミママ、私達も泳ぎましょう！」

「あ、あの、翔さん。実はわたくしにサンオイルをですね……」

「あゝ！ シャルロットちゃんとラウラちゃん！ ビーチバレーの人数足りないんだけど、入ってくれないかなー!？」

「バレー？ いいよー！ ラウラはどうする？」

「ふむ、海に入る前の準備運動にちょうどいいかもな」

そんな感じで、俺はセシリアに、美波は鈴に連れていかれ、シャルロットとラウラはビーチバレー組に付いていったのだった。

—————

サンオイルを塗った俺と塗られたセシリアが顔を真っ赤にしたり、準備運動をせずに海に飛び込もうとする鈴を美波が叱ったり、ビーチバレーでシャルロットとラウラのコンビを倒せず、最終兵器が投入されたりと、あつという間に時間が過ぎて夜になった。

大広間をいくつか繋げた宴会場で、みんなは夕食を取っていた。

ただ、俺や美波、セシリアは別の部屋にいたのだ。

「すみません……お二人にはお気遣いを……」

「気にしなくてもいいよー」

「そうだぞ、無理しても飯が不味くなるだけだからな」

浴衣姿のセシリアを、俺と美波は慰めていた。

この旅館では『食事中は浴衣着用』、さらに座敷なので正座という決まりらしい。

ただ、そこは宿泊客がIS学園ということもあり、多国籍や多民族・他宗教というのを考慮して、宴会場の隣部屋にテーブル席も用意してもらっている。

で、正座が苦手なセシリアに付いていく形で、俺と美波もテーブル席にいるわけだ。

ちなみに鈴は2組なのでそもそも別部屋だし、シャルロットとラウラは「日本文化に挑戦してみよう」ということで、そのまま宴会場に残っている。

「それにしても、部屋も贅沢だったが、食事も贅沢だなあ」

刺身に小鍋、山菜の和え物に、味噌汁と漬物。しかも刺身はカワハギ（肝付）というのだから、どれだけ金がかかっているのだろう。

「そういえば、セシリアは生魚は平気なのか？」

今でも欧米では苦手意識を持つてると思うんだが。



Inside 美波

「いやー、満腹満腹ー」

夕食を食べた後、私は一人で部屋に戻っていた。

翔ちゃんも男の子だから、大浴場の利用時間が限られてるんだよねー。だから急いで入りに行ったんだー。

♪

「およ？ 束ちゃんから？」

着うたからかけてきた相手が分かった、私はスマホをカバンから取り出して受信ボタンを押した。

「もしもしー？」

『ナミママー、束さんだよー！』

「やつぱり束ちゃんかー。あ、そうそう。この前は色々手伝ってくれてありがとねー」

『デュノア社の事？ 別に構わないよお。あの後デュノアの社長って名乗る男と取引できたし』

「取引ー？ 悪いことじゃないよねー？」

『全然！ ちよつとした物々交換だよ』

「交換？」

なんだろう？ 東ちゃんがわざわざ他の人と取引してまで欲しいものってー。

『東さんの要らなくなった第3世代機の情報と、あつちの倉庫に死蔵されてる機材を交換したんだよ。宇宙進出用の資材に再利用できそうだったからね』

「第3世代機？ そんなのあげちゃっていいのー？」

『いいのいいの。どうせ紅椿を作り始めた時点で不要だったし、それにプラスして、将来SRCが宇宙進出した際には協賛するように密約も交わしたしね』

なるほどー。今回のことをきっかけに、地固めをしていったわけだー。

『で、今日連絡した本題なんだけど』

「あ、そうだったねー」

『実はナミママ達に、伝えておこうと思ってることがあつてね』

「何かなー？」

『明日の臨海学校、東さんも行くから』

l s i d e 美波 o u t l

## 第28話 臨海学校2日目

——ハワイ沖某所

(これでよし……)

整備員の恰好をした女は、細工を終えたISを見て満足げな笑みを浮かべた。

正規の整備員ではない。とある組織から送り込まれた、作業員と呼べる存在だった。

(この『銀の福音』シルバリオ・ゴスベルを暴走したように見せかける……)

仕込んだのは、ある特定の人物を探し出し、抹殺するプログラム。

そしてその人物とは……

(これで北山翔を始末すれば、千冬様の弟君が”唯一”の男性操縦者となる……そう、それ以外の男なんて不要なのよ……！)

織斑千冬至上主義者の彼女にとって、織斑一夏以外の男がISを操縦できるなど許されることではなかった。

だからこそ、自分の上司——女性権利団体の幹部——から今回の話を聞いた時、我先に志願したのだ。

(ドイツの小娘を利用した連中は失敗したけど、今回こそは……！)

なにせ、今回は軍用ISを使うのだ。万が一にも仕損じることはいらないだろう。

近い内にもたらされるであろう成功を妄想しながら、作業員の女はIS格納庫を後にした……

—————

――side 箒――

臨海学校2日目。今日は丸一日、ISの各種装備試験運用とデータ取りをするらしい。まあ、専用機持ちちに比べ、私を含めたクラスメイト達はそこまで忙しくないだろうが。

「さて、それでは各班ごとにISの装備試験を行う。専用機持ちは専用パーツのテストだ」

ほら、各班で分担するなら、そこまで時間はかからないだろう。

そう思っ、て、クラスメイト達の輪の中に入ろうとしたが

「篠ノ之。お前はちよつとこっちに來い」

「はい？」

なんだろう？ 千冬さんが苦虫を噛み潰したような顔をしている。それに……美波、だったか。彼女も苦笑いをしている。

「お前には今日から専――」



「ちーちや~~~~~ん!!」

「こ、この声は、まさか……!」

「会いたかったよちーちゃん! さあハグを——ぶへっ」

「うるさいぞ、束」

砂煙を上げながら千冬さんに突撃、アイアンクローで迎撃されたのは……間違いなく、姉さんだった……。

「やあ箒ちゃん!」

「……どうも」

千冬さんのアイアンクローを受けたまま、こちらに向かって手を上げる姉さんに、私はそう返すしかなかった。

「おい束。自己紹介ぐらいしろ。うちの生徒達が困ってるだろ」

「うーん、それじゃあまずその手を放してくれるかなあ」

「はあ……」

ため息をひとつついて、千冬さんが姉さんを解放する。

「ISの生みの親、篠ノ之束だよー。身内以外に名前を呼ばれるのは許容しないから、適当に篠ノ之博士とでも呼んでー」

「「……」」

姉さんの自己紹介にクラスメイト達がぽかんとしていたが、私や一夏、千冬さんといった、いつもの姉さんを知ってる面子もぽかんとしていた。

(ね、姉さんが……普通の自己紹介をしている……!?)

身内と呼べる、私や織斑姉弟以外には、まっとうなやり取りをしなかった姉さんが!?

「えつと……こういう場合はどうしたら……」

山田先生もうろたえている。

「山田先生は各班のサポートをお願いします。ほら1年、手が止まってるぞ」

そう言つて千冬さんが促すと、山田先生とクラスメイト達は自分達の担当装備がある場所に移動していった。

「それで、姉さんがなぜここに……?」

いや、姉さんなら『ちーちゃんに会いに来たんだよー!』だけで乱入してきそうではあるが。

「うつふつふつ。実は箒ちゃんにプレゼントがあるんだよ。さあ、ご覧あれえ!」

びしつと直上を指さす姉さんに、私や他のみんなも空を見上げた。

——ヒュウウウウ……ズズーンツ!!

「な、なな……!?!」

激しい衝撃と轟音を伴って落ちてきたのは、銀色をした金属の塊だった。

その金属の塊の正面がぱたりと倒れると、中にあったのは……

「じゃじゃーん! 箒ちゃん専用機、『紅椿・改』! 箒ちゃんのことを思って、東さん、夜なべして作ったんだよ!」

この、赤い装甲のISが……私の、専用機……?

「ど、どういうことですか!? 私に専用機なんて……!」

「それはね……」

そう言うと、姉さんはいつもの顔から真剣な顔になって

「箒ちゃんを守るためだよ」

「私を、守る?」

「うん。箒ちゃん、IS学園に入ってから今まで、危険な目に何度も遭ってるよね?」

「……」

そんなことはない、と言いたかったが、思い返せばクラス対抗戦に学年別トーナメントと、危ない目には遭っているなと思った。

「だから、箒ちゃんにも自衛の手段が必要だと思ったんだ……余計なお世話だったかな?」

「それは……」

なんなのだ、これは。本当に、目の前にいるのは“私の姉さん”なのか？

勝手にISなんてものを作って、私達家族を離散させた諸悪の根源。そう、思っていたのに……

だが、これがあれば、あ学年別トナメントの時の北山とセシリアのように、私と一夏もなれるかもしれない。

そうなれば、一夏もきつと、昔のように――

「いえ。有難く、もらいます」

「そっか！　じゃあさっそくフィッティングとパーソナライズをしちゃおう！」

Is side 箒 out

Is side 翔

「相変わらず、身内とそれ以外の差が激しいですわね……」

「そうね……あたし、箒に束姉のこと言うのが怖いんだけど……」

「タイミングが悪いと、修羅場りそうだねー」

などと、束さんのことを知ってる面子は、極力あちらに近づかないようにしていた。

あちらでは、篠ノ之が紅椿・改に乗って、試運転をしているようだ。ぱつと見、かつて研究室で見た紅椿と変わらなさそうだが……。

「美波、もしかしてお前、束さんが来るの知ってたのか？」

「あははー、バレてたかー」

そりや、織斑先生と一緒に苦笑いしてたからな。

「昨日連絡が来てねー、箒ちゃん用に防御重視の専用機を渡したいってー」

「あれ、防御重視なのか……」

その割には、空割のエネルギー帯でミサイルを迎撃してるんだが？

「た、大変です！ 織斑先生っ！」

突然の声にみんなが振り向くと、いつも以上に慌てた山田先生が走ってくるのが見えた。

「どうした？」

「こ、これをつ！」

渡された小型端末の画面を見て、織斑先生の顔が曇った。

「匿名任務レベルA……」

「ハワイ沖で試験稼働を……」

「山田先生、機密事項を口にするな」

「す、すみませんっ」

2人は小声で話していたが、その後は手話なのか、口を閉じて手だけを動かした。しばらくその手話が續いていたが、お互い領くと、山田先生はまた走っていった。

「……全員、注目！」

織斑先生がパンパンと手を叩いてみんなを振り向かせる。

「諸事情により、今日のテスト稼働は中止になった。各班はISを片付けて旅館に戻る。連絡あるまで各自室内待機とする。以上だ！」

「ちゅ、中止？」

「突然なんなの？」

先ほどまで装備のテストをしていたクラスメイト達は、訳が分からないと騒ぎ始める。

「さっさと戻れ！ 以後、許可なく外へ出たものは身柄を拘束する！」

「「はっ、はい！」」

「拘束」という言葉に、非常事態であることを認識した全員が慌てて動き始める。

「専用機持ちは全員集合！——篠ノ之もだ！」

—————

「では、現状を説明する」

旅館の一室に集められた俺達の目の前には、大型の空中投影ディスプレイと織斑先

生。

「2時間前、ハワイ沖で試験稼働中だったアメリカ・イスラエル共同開発の軍用IS  
シルバリオ・ゴスベル  
『銀の福音』が暴走、監視空域より離脱したと連絡があつた」

「……」

全員、厳しい顔をして黙り込む。

俺と美波は原作を知っているから。代表候補生の面々も、こういった事態に対して、自分達が何を期待されているのか理解しているからだろう。

織斑と篠ノ之だけが、なぜ自分達にそんなことを知らせるのかという顔をしている。これに関しては仕方ないだろう。

「その後、衛星による追跡と進路予測の結果、福音はこの花月荘上空を通過、本州内陸部を目指していることが分かった。学園上層部からの通達により、我々がこの事態の対処に当たることとなった」

我々、ね。

「教員は空域及び海域の封鎖を行う。よって、福音の迎撃は専用機持ちに行ってもらう」  
織斑なんかは「なんで俺達が？」みたいな顔をしてるが、教師陣の訓練機と専用機を比較したら、スペック的には俺達の方が勝算があると思われたんだろうな。

「福音の詳細なスペックデータはありますか？」

セシリアが挙手しながら質問する。

「あるが、これらは2カ国の最重要軍事機密だ。口外するな。情報漏洩した場合、諸君には裁判と最低2年の監視が付けられる」

「了解しました」

話がどんどん進んでいき、代表候補生達が開示されたデータを元にあれこれ相談を始める。

「広域殲滅型……オールレンジ攻撃が行えるようですね」

「攻撃と機動力特化ね。しかもスペック上ではあちらが上か……」

「この特殊武装が曲者だね……ちようどりヴァイヴ用の防御パッケージが来てるけど、長くは防げないかな……」

「それにしても情報が少ない……教官、偵察は行えないのですか？」

「無理だな。この機体は現在超音速飛行を続けている。アプローチは1回か、多くても2回が限界だろう」

そう織斑先生が返すと、候補生達はうくと唸り始める。

「1, 2回だけのチャンス……ということやはり、一撃必殺の能力を持った機体で当たるのが……」

そう山田先生が口にしたところで、今まで静かだった一角から手が上がり



「千冬姉！ 俺にやらせてくれ！ 俺なら、俺の零落白夜ならやれる!!」

ああ、やつぱりそうなるのか……。

l s i d e  
o u t  
l

## 第29話 VS 銀の福音く愚者の裏切りく

l s i d e 翔一

昨日散々遊んでいた砂浜で、専用機持ち全員が集合していた。

「じゃあ、箒。よろしく頼む」

「本来なら女の上に男が乗るなど言語道断だが、今回は特別だぞ」

そう言いつつ、妙に機嫌がいい篠ノ之。まあそうなるか。

「織斑君と箒ちゃんだけで終わればいいねー」

「そうですわね……」

「あたしとしては、出番がないのは微妙だけどねえ」

「僕は出番が無い方がいいと思うけどなあ」

「同感だな。後詰など、出番が無いに越したことは無いからな」

そんな2人のやり取りを見て、俺を含めた他の専用機持ち達が微妙顔をした。

——30分前

「千冬姉！俺にやらせてくれ！俺なら、俺の零落白夜ならやれる!!」

「織斑、これは訓練ではない。実戦だぞ」

「分かってるさ！ チャンスが1, 2回だけで、一撃必殺の攻撃が必要なら、零落白夜が最適なんだ！」

「うむ……」

織斑先生も、零落白夜がこの作戦に最適なのは否定できないだろう。織斑がそれを使いこなせるかは別として。

「だが、どうやってお前を福音まで運ぶ？ 福音がこちらに来るまで待つて迎撃は許可できんぞ」

「はい、周囲の被害を考えると、できれば海上で迎撃したいところですね……」

山田先生も困った顔をして同意する。

「……姉さん」

「箒ちゃん？」

「この紅椿・改なら、一夏を目標ポイントに運ぶことは可能ですか？」

「……」

そう篠ノ之に聞かれ、束さんが困ったような、悲しそうな顔をする。

篠ノ之の望みは叶えたい、だけど危険な事をしてほしくもない。そんな気持ちなのだろう。

「束」

「……可能、だよ」

織斑先生に促されて、観念したように束さんは首を縦に振った。

「そうか……では、本作戦を伝える。篠ノ之が織斑を目標ポイントまで運搬。織斑の零落白夜による強襲により、対象を無力化させる」

「よし！ 絶対やり切ろうぜ、箒！」

「あ、ああ！」

作戦は決まったが、これだと不安が残るな……。

「きょうか、織斑先生」

途中で言い直しながら、ラウラが挙手した。

「なんだ？」

「意見具申。不測の事態に備え、私を含めた残りの専用機持ちを後詰に付けるべきです」

「なるほど……」

「そんなのは必要ねえよ！ 俺と箒でやり切ってみせる！」

「いいだろう」「千冬姉!」

——ゴンッ！

「織斑先生だ。実戦では何が起こるか分からん。不安の穴は出来る限り塞いでおくべき

だろう」

織斑にいつもの鉄拳制裁を入れると、こちらに向き直り

「30分後に作戦を開始する。それまで各自I Sの調整を行え。以上だ!」

—————

そして現在、先ほど出発した織斑・篠ノ之組の後詰として、俺達も目標ポイントを目指していた。

『もう少して目標ポイントだ。用意はいいか、一夏!』

『ああ! 絶対に成功させるぞ!』

オーブン・チャネルで2人の会話も聞こえてくる。

『見えた! 一夏!』

もう接敵するのか!? 早すぎるだろ!

『いくぜええええええ!!』

織斑の威勢のいい声が聞こえたと思ったが

『一夏!』

篠ノ之の驚く声が被る。

「な、何があつたの!?!」

「不測の事態か!?!」

後を追っていた俺達にも、動揺が走った。

『一夏！　せつかくのチャンスになぜ——!?』

『船がいるんだ！　海上は先生達が封鎖したはずなのに——密漁船か!』

『密漁船!?　なぜそのようなものが……!』

『ああもうっ！　段取り台無しじゃない!』

通信越しに何が起こったのか知ったセシリアと鈴が声を上げる。

そして目標ポイントに着いた俺達の前には、福音に追い回される織斑と篠ノ之、海上をのそのそと動く船があった。

『織斑君も箒ちゃんも、攻撃を避けるので精一杯みたいだよ!』

『不味い状況だね……』

シャルロットの言うように、非常にまずい状況だ。

何より、まともな回避行動が取れない船が下にいるのが問題だ。篠ノ之はともかく、織斑は流れ弾を恐れてか、被弾が増えている。

『北山より織斑先生へ』

『こちら織斑だ』

こうなった以上、現場指揮官の指示を仰ぐしかない。

『緊急事態発生です』

『何があつた?』

「作戦区域に密漁船が迷い込んだ模様。その船を織斑が庇つたため、強襲は失敗です」  
『何だと!』

通信越しで織斑先生が驚いているが、それより問題なのは――

「それで、どうしますか?」

『どうする、とは?』

「作戦を中断して船を助けますか? それとも、作戦を続行して福音撃破を優先しますか?」  
現場指揮官である織斑先生の指示を願います

『……』

「おい翔! 船を見捨てるっていうのかよ!」

通信を聞いていたであろう織斑が怒鳴り散らす、実戦とはそういうものだ。

不測の事態に陥った時、何を優先させるのか。船と日本本土、どちらを危険に晒すのか。

それを決める権利と、それに伴う責任を持つのが指揮官というものだ。

「千冬姉! 俺達なら大丈夫だから――!」

『……作戦参加中の各員に通達』

『作戦を強襲から包囲戦へ変更する。各個で福音に対して攻撃を行え』

「「了解！」」

「そ、そんな……」

俺のホワイト・グリント、美波の不知火、セシリアのブルー・ティアーズ、鈴の甲龍、シャルロットのラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ、ラウラのシユヴァルツエア・レーゲン。

呆然としている織斑と、その織斑を後退させる篠ノ之以外の専用機持ちは、福音を囲むように展開した。

そして攻撃を、と思った矢先に

「La……」

甲高いマシンボイスと共に、福音のウイングスラスターに付いた砲門から、エネルギー弾の一齐射が飛んできた——俺にだけ。

「なっ!？」

どういふことだよ!?　なんで俺だけ!?

そう思いながらも、福音は他の連中には目もくれず、俺にだけ総攻撃を仕掛けてくる!



「どうして翔さんだけ……!?!」

「あたしらは、眼中にないってこと!?!」

そんな中、俺はこの状況に既視感<sup>デジャヴ</sup>を感じていた。

そう、ほんの数日前。IS学園のアリーナで……

(まさか、ラウラのVTSの時と同じで、こいつの狙いは……!)

それと同時だった。

本来誰もいないはずの背後から、衝撃と激痛を感じたのは――

l s i d e 翔 o u t

l s i d e 織斑

「そんな……千冬姉、どうして……」

どうして、あんな指示を出したんだ……。

あの船には人が乗ってるはずなんだ。それなのに、どうしてそれを見捨てるようなことを言うんだ……。

「一夏! しつかりしろ!」

「ほう、きう!」

「お前の零落白夜も、あと1回が限度だろう!?! なら、最後のチャンスを逃すな!」

「最後の、チャンス……?」

「そうだ! 北山達が福音を引き付けてくれてる間に、お前がとどめを刺すんだ!」

「俺が……とどめを……」

そうだ。俺はまだ戦えるんだ……なら、戦わないと……!

そう自分を奮い立たせて顔を上げると、

「……あれ?」

おかしなことに気付いた。

福音はなぜか、翔にしか攻撃をしていないのだ。

周りには他の専用機もいるのに、まったく意に介していないように。

(もしかして、福音の目的は翔なのか?)

その時、俺の中に妙案が思いついた。いや、これは天啓と言ってもいいかもしれない。

(もし福音の目的が翔を倒すことなら、あいつがいなくなれば……)

あいつは千冬姉に、船と作戦、どちらを取るかの選択をさせた。

どちらを見捨てるのかの選択を、押し付けたんだ。

でももし、俺の予想通りなら――

(翔1人だけで、みんなが救われるのなら――!!)

「はああああああ!!」

残っていたエネルギーで零落白夜を展開した俺は  
「二夏!？」

その刃で、

——ザシユウツ!!

「がつ……！ おりむ、ら……お、まえ……！」

翔の背中を切り裂いた。

l s i d e 織斑 o u t l

## 第30話　オリ主なんて居なくても

――sideラウラー

「翔ちゃー………んっ!!」

美波の悲鳴が海上に響き渡った。

織斑一夏、狂っているとは思っていたが、まさかこの期に及んで――!!

『どうした!?　誰か応答しろ!』

「ボーデヴィツヒです!　翔が撃墜されました!」

『何っ!?　福音の攻撃か!』

「いえ……織斑が裏切りました」

『なん、だと………ボーデヴィツヒ、何を言って――』

「繰り返します!　翔が織斑の零落白夜を背後から受けて撃墜されました!」

『そん、な………馬鹿な………』

くそっ!　教官もあまりの出来事に気が動転している!　これでは指揮系統が………!

「美波さん!　翔さんの救助をお願いします!」

そんな中、いち早くこの状況から立ち直ったセシリアが、美波に声をかける。

「でも、セシリアちゃんは？」

「わたくしは……」

そこまで言うとは、セシリアは今動きを止めている福音の方を見て

「当初の予定通り、福音を無力化します」

「ちよつと待ちなさいよ」

「なんですの鈴さん。まさか止めようだなんて——」

「馬鹿言つてんじゃないわよ。あたしも混ぜなさいつての」

鈴も青龍刀を両手に持つて、福音に眼を向けていた。

「まさか僕を仲間外れになんて、しないよね？」

シャルロットもライフルを展開して、鈴の横に並ぶ。

「それでラウラさん。貴女には後方からの砲撃支援と、指揮をお願いしますか」

「……私の指揮下に入ると？」

「ええ。この中で、部隊指揮を執ったことがあるのは、現役軍人であるラウラさんだけですから」

さも当然のようにセシリアが言う。ふつ、私も買い被られたものだ。……だが、悪くない。

「いいだろう。その役、引き受けよう」

「なので美波さん、一刻も早く翔さんを」

「うん……みんな、絶対無事でいてよー!」

セシリアに背中を押される形になった美波は少し悩んでいたが、顔を上げて頷くと、翔が墜ちたと思われる海域に向かって飛んで行った。

それを見送ると、私もブリッツを両肩に展開させて

「それでは……我々も始めようか!!」

「「ええっ!!」「うんっ!!」

私の号令に、改めて福音を包囲した3人が応えた。

l s i d e ラウラ o u t l

l s i d e 鈴音 l

「鈴、少しの間でいい。こちらの砲撃後、福音を正面から抑え込めるか?」

「誰に聞いているのよ! やってやるわよ!」

はっ！ ナミママを泣かせた罪、しっかり償わせてやるわよ！

「シャルロットは鈴の護衛、接近するまでうまく攻撃を凌いでくれ」

「了解！ ガーデン・カーテンの力、見せてあげるよ！」

「セシリアは鈴が福音を抑え込んでいる間にスラストを攻撃、まずは攻撃手段を奪うぞ」

「分かりましたわ！」

「よし……A n g r i f f !」<sup>攻撃</sup>

——ドオウウウツ!!

ラウラの両肩から砲撃が行われると同時に、あたしとシャルロットが福音に向かって突撃を開始した。

セシリアも<sup>遠距離</sup>スターダスト・シューターを展開、あたし達に紛れる形で、福音の背後に迂回した。

『敵機を認識。排除行動に移る』

福音はラウラの砲撃をエネルギー弾で迎撃してるようね。だけど——

——ガキイイイン！

「そつちばつか気にしてたら、あたしがバツサリやつちゃうわよ!」

砲撃の陰から青龍刀を振り下ろして、福音のスラスターの一部をもらっていったわ。それと同時に、福音も砲門をあたしに向けて……ってあぶな!

——ドドドドッ!

「おおっと!」

「ガーデン・カーテンは、そのくらいじゃ落ちないよ!」

あわや直撃しそうなところで、実体シールドを持ったシャルロットが割り込んで、攻撃を防ぎ切ってくれた。

さらに福音があたし達から距離を取ろうと下がったところで……

「そこですわっ!」

セシリアのスターダスト・シューターから放たれたレーザーが、福音の左スラスターに直撃。エネルギーの誘爆で片翼を潰せた!

「よしっ!この調子で——」

もう片翼も、そうラウラが言おうとしていた時だった。

『シルバー・ベル銀の鐘、最大稼働、開始』

福音が、残った砲門をこちらに向けて一斉射を放ってきた。

「鈴、セシリア、僕の後ろに!」



——ドドドドドドドドドドドツ！

「ぐっ……！」

エネルギー弾の雨を何とか受け切れたけど、今のでシャルロットの実体シールド2枚とエネルギーシールドはボロボロね……。それもそうだけど……

「防御もそうだけど、エネルギーもそろそろ危なそうね……」

「確かにそうですね……」

そう、ここまで飛行した分と、今戦闘を行っている分で、あたし達のSEは2割を切っている状態。もし次が来たら……

（それでも……！）

自分の中で覚悟を決めた、その時だった。

「なに……この光……」

あたしだけでなく、シャルロットも、そしてセシリアも……

自分達の周りに赤い光、そして金の粒子が舞っているのを、ただ眺めてた……。

## I side 鈴音 out

I side 箒

「何を……何をしているんだ一夏あ！」

一夏の暴挙に、私はあらん限りの声で怒鳴っていた。

「やっぱりだ！」

だが、一夏はそんな私が目に入らないのか、福音の方を見ている。

「やっぱりそうだ箒！ 福音の狙いは翔だったんだ！」

「何を……」

私も福音に目を向けると……確かに、福音は攻撃の手を止めて、その場に佇んでいる。  
まさか本当に……？ だが……だからといって、味方を斬っていいことにはならんだろう……っ！

「とにかくこれで、船を助けることが出来る。箒、誘導を手伝ってくれ！」

「一夏……北山を……味方を斬って言うことが、それだけなのか……？」

「何言ってるんだ？ 翔と船、より多くを救える方を選んだんだ。あいつが千冬姉に選択を迫ったのと同じだよ」

「……」

そうか……つまり一夏、お前はそういう奴なのだな……。

もう、昔のお前には……。

「織斑先生」

『織斑だ……』

先ほどのボーデヴィツヒの報告から立ち直り切っていない千冬さんだが、何とか応答はあった。

「紅椿・改はこれより……セシリア達と合流、福音との戦闘を再開します！」

『何だと!』

「箒!? 何言ってるんだよ! せっかく翔を墜として黙ってる奴を、わざわざ起こすような真似を——!」

「以上、通信終了!」

最後は怒鳴るように無理やり通信を切ると、セシリア達に合流すべく、一夏を置いて福音を目指してスラスターを全開にした。

そして私がつどり着いた時には、ボーデヴィツヒを除く全員が満身創痍だった。

そのボーデヴィツヒも、両肩のレールカノンで砲撃支援をしているが、限界が近い。それでもみんな、諦めていない。まだ戦っているのだ。

（私も、共に戦いたい。戦う力があるのに、皆に任せて背を向けるなど、したくない——！）

強く、強く願った。

その時だった。紅椿・改の装甲から、赤い光が、そして黄金の粒子が溢れ出したのは。

「これは……!？」

——絢爛舞踏、発動——

ハイパーセンサーからの情報で、ここまでの飛行で減っていたSEが回復していくのが分かった。

正直何が何やら分からないが、どうだっていい。私も共に戦える、それだけ分かれば十分だ。

（ならば、行くぞ！ 紅椿・改！）

その想いに応えるように、赤と金の帯がセシリア達を包み込んでいった——

l s i d e 箒 o u t l

l s i d e セシリアー

「みんな、これを受け取れ！」

「箒……?」

鈴さんの眩きに顔を上げると、箒さんのISから、赤い光と金の粒子が溢れ出ていました。これは、箒さんが……？

「これは……SEが……！」

「す、すごい……！」

そう、先ほどまで稼働限界が近かったわたくし達のエネルギーが、どんどん回復していくではないですか……！

「箒、これって……！」

「説明は後だ！ 今は福音を！」

「そ、そうね！ まずはそれが先ね！」

鈴さんがそう言って青龍刀を構え直すと、シャルロットさんもショットガンを両手に展開して

「SEも満タンになったし、全力で行こうか！」

鈴さんと一緒に、福音に向かって再度突撃していきましました。

そして、先ほどと同じく、シャルロットさんがシールドで攻撃を防ぎつつショットガンで牽制している間に、鈴さんが福音に肉薄し、

「食らいなさいっ！ 崩山の零距离砲撃を!!」

——ドゴオオオオツ!!

2門から4門に増えていた衝撃砲から、炎を纏った砲弾が放たれ、福音の無事だったスラストーを焼き尽くします。

「セシリアアアア！」

「お任せくださいまし！」

鈴さんの声に応えるように、わたくしもスターダスト・シューターを構え——

「これで、トドメですわっ!!」

——バシユウウウウウツ!!

最大出力で放たれたレーザーが胴体部分を貫き、そして——

『La……』

こちらに手を伸ばそうとしていた福音が……動きを停止して、海へと墜ちていきまし

た……。

「やった……のか……」

「やった、よね……?」

「やったわよ、ね?」

「ええ、おそらく……」

「ああ……」

「」「」「やった——っ!!」「」「」

l s i d e セ シ リ ア   o u t

l s i d e 翔

—— ちゃ——しょ——ん——

何だ……どつかから声が聞こえる気が……

「翔ちゃん!」

「うわっ！ 痛つつつ……!!」

跳び起きたものの、背中の痛みでそのままうつ伏せに倒れ込んだ。どっかの島にでも流れ着いたのか、倒れ込んだ拍子に顔が砂まみれに……。

「翔ちゃん、良かった生きてたよー!」

うつ伏せで顔は見えないが、俺の呼び方と声から、美波なのだろう。

「美波……あれからどれだけ経った?」

「20分くらいかなー」

「20分……なら、まだみんな戦ってるはずだな……」

墜ちる前の最後の推測通りなら、俺が墜ちたことで福音が役目を果たして撤退している可能性もあるが、もしそうでなければ……

「それは……あつ、もう心配しなくてもいいみたいだよー」

「何?」

福音は撤退したのか? いや、今『あつ』って……

「ほらー」

そう言つて美波が指さす方に顔を向けると、そこには



海に向かって墜ちていく福音と、勝鬨を上げるセシリア達だった。

「マジかよ……」

「すごいよねー。原作じゃ織斑君の零落白夜任せだったのにー」

「ははは……マジかよ……」

もはや笑うしかなかった。

「原作主人公織斑も俺達も、オリ主今回ばかりは出番無しだな」

原作乖離も、ついにここまで来たか。

「それじゃあ、とりあえず……」

「とりあえず?」

「みんなのところに帰ろつか」

「……そうだな」

l  
s  
i  
d  
e  
翔  
o  
u  
t  
l

俺が頷くのと、美波が通信であいつら<sup>セシリア達</sup>を呼ぶのはほぼ同時だった。

## 第31話 分かり合えなかった姉弟、分かり合えた姉妹

翔を斬り、船の誘導を終え、意気揚々と帰還した織斑を待っていたのは、国際ＩＳ委員会の人々と、武装した委員会直属のＩＳ部隊だった。

「ど、どういふことだよ!？」

「どういふ、とは?」

「俺は福音を止めて戻ってきたんだぞ!? なんて銃を突き付けられなきゃいけないんだ!」

そう怒鳴る織斑の言う通り、彼はＩＳ部隊のラファール6機から、アサルトライフルの銃口を突き付けられていた。

「千冬姉を出してくれ! こんな間違ってるって——」

「彼女は君とは別に移送中だ」

「移送……お前ら、千冬姉に何を……!」

——ドンッ!

「がっ!」

委員の男に襲い掛かかんとした織斑だったが、正面にいたラファールのアサルトライ

フルの射撃を受けて仰け反った。

「はあ……。織斑一夏、国際IS委員会及び日本政府の決定により、君の白式を剥奪する」

そう言つて男が手に持った端末を操作すると、織斑の白式が強制的に展開解除された。

「なっ!？」

「そのISを手配したのは誰だと思つているんだね？ このくらいの手段は用意しているよ」

男の言う通り倉持技研、ひいては日本政府は、クラス対抗戦での失態で織斑が懲罰房行きになった時、取り上げていた白式に対して、緊急用の解除手段を用意していたのだ。

「くそっ！ 離せ！」

白式が解除された織斑に抵抗する手段などあるはずもなく、あつという間にラファール部隊に取り押さえられ、待機状態の白式を右腕から取り上げられる。

「そして同時に、君は研究所行きになることが決まつている」

「け、研究所!？」

「そう。君が帰る場所はもう、IS学園じゃない。国立IS研究所の隔離室だ」

「ふ、ふざけんな！ なんで俺がそんなところに……!」

『次に何か問題を起こした場合、織斑一夏は専用機剥奪の上、研究所送りとする』。君が先月の学年別トーナメントで馬鹿をやった折、国際IS委員会と日本政府でそう決定したのだよ。もちろん、織斑先生にも伝えて、きちんと手綱を握るよう要請していたのだがね」

「そ……そんな……千冬姉!」

「どうやら、彼女は何も説明していなかったようだな……愚かな」

重要なことは何一つ弟に話さなかった、千冬の悪癖が響いた形だった。そう、彼女は何も話さなかったのだ。今回のことも、何一つ……。

「そもそも、俺がどんな問題を起こしたっていうんだ!」

「ほう? 味方である北山翔を背後から斬った裏切り行為について、君はどんな言い訳をするつもりかね?」

「裏切ってなんかいない! 福音の狙いが翔だったから、あいつを墜とせば全て丸く収まるから、そうしただけだ!」

そんな織斑の言い訳を聞いて、男は頭が痛くなったのか、額を手で押さえた。

(何なのだ、こいつは。まるで支離滅裂ではないか……)

そもそもどうしたら、福音の狙いが北山翔だと状況証拠だけで断定し、彼を斬ろうという思考になるのか。男には目の前の織斑一夏が理解できなかった。

もはや、ため息しか出なかった。

「連行しろ。味方を背後から斬る愚か者とは言え、貴重なサンプルであることに変わりはない。自害などさせるな」

部隊長と思われるラファールが領くと、6機の内4機が織斑を取り押さえながら、ミニバンに偽装した護送車に向かっていった。

「さて、篠ノ之博士。情報提供いただき、ありがとうございました」

「それはどうも」

委員の感謝の言葉に、東は適当に返事をした。

そう、織斑のやらかしが発生してから30分と経っていないのに、なぜ委員会の人間がこの花月荘にいたのか。

それは、美波の不知火から送られてきた映像を、東が国際IS委員会にリークしたからであった。

翔が織斑に斬られたあの時、彼女の中で織斑一夏は身内の対象外になった。

”親友の弟”から”討つべき敵”に変わったのだ。

「それでは私共もこれで」

そうやって頭を下げると、委員と護衛として残っていたラファールは引き揚げていっ

た。

――――

――side 箒――

負傷した北山と、停止した福音の残骸を回収して花月荘に戻ってきた私達を、山田先生と姉さんが迎えてくれた。

「山田先生、織斑先生は？」

「それは……」

シャルロットの問いに、山田先生が口ごもってしまった。何かあったのか……？

「ちーちゃん……連行されたよ」

「れ、連行!？」

「どういうことですか?!？」

れん、こう？ 千冬さんが……なぜ……

「とあるゴミが危険行為や裏切り行為を繰り返してね。姉であるちーちゃんも事情聴取を受けることになったんだよ」

「ゴミって……姉さん？」

姉さんは発言に、私は寒気を感じた。

千冬さんが姉……ということは、姉さんが言った『ゴミ』って……まさか……  
「そう、かー」

そんな中で、北山兄妹だけが理解したような顔をしていた。

「ちよつとナミママ、どういふことなの……う？」

「つまりねー……」

「織斑姉弟は、”見限られた”ってことだよー」

「見限、られた？」

千冬さんが……一夏が……見限られた？ 一体誰に？

「ごめんね、箒ちゃん」

混乱している私を、いつの間にか姉さんが抱きしめていた。

「箒ちゃんがあれが好きだってことは知ってたよ。でも……それでも、許せなかったんだ」

「姉、さん？」

なんだ、その言い方は……それじゃあ、まるで、姉さんが一夏のことを……

「うん……福音との戦闘映像を国際IS委員会にリークしたのは、私だよ」



「っ!？」

姉さんが……姉さんが一夏達を……!？」

「ずっと見てたんだ……クラス対抗戦からずっと。あの時からあれは、箒ちゃんを危険に巻き込んだ。私にはそれが許せなかった」

「……」

それは……否定できない。確かに一夏はクラス対抗戦の時、観客席のバリアを破つて皆を危険に晒した。

だからと言って、どうして……

「だから、箒ちゃんの想いを無視して、ごめんね……」

「……なぜだ」

「箒ちゃん……?」

「なぜ貴女はそんな悲しそうな顔をする!」

そう一度口にしたら、もう止められなかった。

「いつものように堂々としていればいいだろう! 勝手にISを作つて、勝手に家族を離散させて! いつも勝手にしていた頃のように!」

そんな姉さんだから、私は貴女を恨むことができた。憎むことができた。これまでの不幸を、貴女の所為にできた。なのに――!

「なぜ今更になつてそんな顔をする!?! 私に謝る!?!」

「籌ちゃん……」

「ああ分かつてるさ! 姉さんがI Sを認められず悩んでいたことも、本来の宇宙開発ではなく兵器扱いされて苦しい思いをしていたことも!」

だからと言って、家族は離散し、私は要人保護の名目で各地を転々とすることを余儀なくされた事実は変わらないのだ。

「だから、そんな悲しそうな顔をしないでくれ……謝らないでくれ……」

そんなことをされたら、私は――

「そんなことをされたら、私は……貴女を憎めなくなってしまうのではないか……」

ああ、そうか……ここまで口にして、私はやっと理解した。

きつと私は、心のどこかで、今の姉さんを許そうとしているのか……

一夏を切り捨てた姉さんの行動に、理解を示しているのか……

「……姉さん、お願いがあります」

「何、かな?」

「些細な事でもいいです。もっと私に思ったことを言ってください」

「箒ちゃん……？」

ああ、そうだ。あの頃の姉さんが相手では無理だったろう。でも、今の私なら、今の姉さんなら――

「今の私なら、今の姉さんを」理解したいと思えるから……」

「箒、ちゃん……！」

姉さんが泣いた顔、初めて見た気がする。

「ごめんね、箒ちゃん……！」

そんな姉さんを、私も抱きしめた。そして泣いた。周りに皆がいるのも関係なく、姉さんと一緒になって泣いた。

その時、私と姉さんは、本当の意味で家族に、”姉妹<sup>わかしあえた</sup>になれた”のだと思う。

l s i d e 箒 o u t l

## ENDING

## 第32話 爆弾発言

臨海学校から数日後、1年1組では大きな変化と小さな変化があった。

大きな変化は、担任である千冬が休職したこと。

名目としては病欠で、夏休み明けまで自宅療養ということになっている。

そのため、副担任であった真耶が担任になるとともに、IS実習の教官も引き継ぐこととなった。

小さな変化としては、織斑一夏がIS学園を去ることになったこと。

こちらについては、理由も去った後のことも発表されず、生徒達の間で様々な憶測が飛び交った。

事実を知るのは真耶と専用機持ちだけだが、機密事項である福音暴走事件にも絡むため、誰も憶測はそのままとなった。

—————

「ところでみんな、夏休みはどうするのー？」

昼休みの食堂、いつもの面子＋（箒、シャルロット、ラウラ）に、美波が問いかけた。

「わたくしは、一度本国に戻ろうと思っっていますわ」

「あたしは日本に残ろうかなあ。管理官にレポート出したら、戻らないといけない用事も無いし」

セシリアと鈴音はすでに予定を決めていたのか、美波の問いに即答した。

「僕はフランスに、デュノア社に戻ろうと思ってる」

「親父さんに、会うのか？」

「うん……もう一度、ううん、今度こそ、本当のことを聞きたいんだ。お父さんの口から」

「そっか……」

シャルロットの決意に、北山兄妹を始め、そこにいた面子は、この親子の会話が上手くいくことを祈った。

「私は司令部から帰投命令が出ていないのだが……」

「VTSのこと、ですの……？」

「ああ。幸い、私や本国の部下達が詰め腹を切られることは無いようなのだが……」

そこは国際I S委員会の強制査察によって、研究機関の一部が独断でレーゲンにVTSを載せたことが発覚したためであった。

もつとも、査察が入った時点でVTSを載せた実行犯は行方を晦ませており、動機については不明のままなのだが……。

「私は、一度父さんに会おうと思っている。姉さんと一緒にな」

「そうなんだー……あれから、ちゃんとお話しできてるんだねー」

「そうだな……正直まだきこかないが、昔よりも話す時間が長くなったな」

そういう筈の顔は、苦笑ではあるものの、入学時から険の取れたものだった。

「昨日の夜も話をしたのだが……姉さんがとんでもない事を言つてな……」

そこまで言つて、筈は額に手を当てた。

「な、何よ？ 何があつたのよ？」

鈴音の問いに、筈は食堂に設置してあるテレビを指さした。

そのテレビでは、バラエティ番組後の星座占いが流れていた。

と、1位と12位が発表されるかと思われた瞬間、

『やつほー凡人共ー！ 篠ノ之東さんだよー！』

「「「ぶっ！」」」

指をさしていた筈以外、テレビを見ていた全員が吹き出しそうになった。

そう、東は何を思ったか、各国の電波をジャックしたのだ。

『今日は凡人共に、面白いニュースを用意してきたよー！』

「分かりませんわ……わたくしも、あの方の思考は読めませんもの……」

『まず1つ目。IS学園で起こっていた事件についてだね』

「あ、あれ！ 学年別トーナメントの時の！」

食堂にいた誰かが声を上げた。

画面の右側には、学年別トーナメントでVTSによつて操られたラウラ、ブリュンヒルデもどきが映っていた。

『束さんのＩＳにこんな不細工なもの載せた奴が許せなくてねー。どこの誰がやったか調べてただけど……』

そこでセリフを切った束は、

『女性権利団体だっけ？ お前ら、何してくれてんの？』

[[[!-]]]]

画面越しでも分かる殺氣と突然変わった束の口調に、食堂の生徒達は一瞬、心臓が止まった気がした。

『しかもお前ら、これだけじゃないよな?』

さらに画面が切り替わり――

「た、束さん……それは……」

翔も顔を引きつらせた。

切り替わった画面には、先日戦った銀の福音が――アメリカとイスラエルがアラスカ条約の裏で開発していた軍用IS――が映っていた。

ISを軍事利用しない約束

『束さんは別に、アメ公達を責める気はないよ。意図してなかったとはいえ、白騎士事件でISの軍事的価値を仄めかしちゃった束さんにも非はあったし、アラスカ条約なんてこつちには関係ないし』

けどね、と束は先ほどよりも殺意を込めて

『てめえら、これを使って束さんの“理解者”を殺すつもりだったな!?!』

あまりの殺意と怒声に、何人から立っていられなくなつて床に座り込む。

『お前らがこれらをやった証拠、あらゆる機関に流したからな。他人の作ったもの<sup>s</sup>、あ



りもしない威光に乗っかる……いや、乗れてすらいらないのに威張り散らすお前らなんか消えちやえよ』

そこまで言うとは、

『さて！ 次は2つ目の話だったね！』

さつきまでの殺意はなんだったのかというぐらいに、コロツと笑顔に変わる。

「ま、まだあるの……？」

シャルロットが口にしたセリフに、そこにいた全員が頷きそうになる。

『今まで女性しか扱えなかったISなんだけど……』

『なんと！ 男も使えるようになりましたー！ パチパチー』

「「「はあっ!?!」」」

これには皆の声がハモった。おそらく、世界中でこの放送を見ている人全員とハモったであろう。

なにせ、今まで開発者すら解明していなかったISの謎が、当の開発者によつて解決してしまったのだから。

『いやー、まさか白騎士のコアが、男性を乗せないようにしてたなんて思わなかったよ。ま、東さんがコアネットワークに入って説得したらあつさり解除してくれたけど』

((（ええ……）))

『嘘だと思うなら、実際に試してみればいいよ。この世の男性全員とはいかないけど、数打てば当たると思うしー』

当の本人はあつけらかんと言っているが、今この瞬間、IS委員会を始めとした、実際にISコアを持つっている機関や企業はてんでこ舞いになっているだろう。

『そして面白いニュース、ラスト3つ目ー』

「こ、これで最後か……」

聞いているだけのはずだが、翔を筆頭に皆くたくたになっていた。

『東さん、前々から会社を興してただけど、今日から本格始動しようと思ってまーす！』

「篠ノ之博士が、会社？」

「そんな話、一度も聞いたことが……」

動揺した声が辺りから聞こえてくるが、それは当然である。

確かに東は会社S.R.C.を興しているが、それを知っているのは北山兄妹とセシリア、鈴音に、協賛を約束したデユノア社シヤルババの社長だけだからだ。

『というわけで、スター・ラビット・カンパニーは、宇宙開発事業に参入します!』

それは束が、かつての夢に向かって再び歩き出したことを意味していた。

『あ、それとこれは業務連絡ね』

不意に何かを思いついた束は、ニヤリを笑うと

『ショウママとナミママ。宇宙開発を手伝ってほしいから、夏休みになったらSRCに顔出してねー!』

最後にとんでもない爆弾を落として、電波ジャックは終了した。

「た、束さん……」

「い、言っちゃったねー……」

この爆弾には翔はもちろん、美波も顔を引きつらせるしかなかった。

「今、ショウママとナミママって……」

「2人とも、篠ノ之博士と面識が!？」

「そうだよ! だってSRCって、2人の専用機を作った会社じゃん!」

どんな騒動が食堂中に伝播していき、気付けば北山兄妹は生徒達に囲まれていた。

「北山君! 北山さん! 今の放送はどういうことですか?!!」

終いには、先ほどの放送を見た真耶も突撃してきた。

「だ、誰か助けて〜！」

兄妹揃って助けを求めるが、セシリアと鈴音は顔を逸らし、シャルロットとラウラは。

残った箒は

「ふ、二人とも、姉さんとういう関係なんだ!!? なぜ最初に知り合った時に教えてくれ

なかつた!?!」

ブルータス、お前もか。  
他の生徒達と同じだった。

その後、北山兄妹は篠ノ之束と知り合ったきっかけから、これまでの経緯を（クラス対抗戦のこと以外）洗いざらい吐かされた。その結果、

「「ええ話や〜……」」

生徒達+真耶は感動に涙し、

「ありがとう……姉さんが変わったのは、お前達のおかげだったんだな……」

箒から感謝されることとなった。

## 最終話 宇宙（そら）へ

束の電波ジャックから数日。世界はまた、色々と変わっていった。

女性権利団体は消滅した。

福音事件を含めた様々な悪行の証拠、それらが束によってネット上にばら撒かれ、それによって世界規模の逮捕劇が繰り広げられたのだ。

これまで女権団の権力を笠に着た圧力によって、悪事を見逃すしかなかった警察および司法組織の熱意はすさまじく、とある国では『国内受刑者の大半が元・女権団関係者』という、冗談のような話もあった。

これによりＩＳ学園でも、少なくとも人数の女尊男卑主義者が姿を消す事態となったが、残った生徒達からは哀れみも同情も無かった。

ＩＳが男でも乗れる。これも事実であった。

アメリカ合衆国が、『陸軍内で緊急検査を行ったところ、1個旅団約5000人中2人という、女性に比べ低い割合ではあったが、確かに起動させることが出来た』と、束の電波ジャックから2時間も経たずに発表したのだ。

その報を受けて、各国もアメリカに倣って軍内で緊急検査を実施。その結果、各国で最低1人は男性操縦者が見つかるという、1年前では想像もできない事態となった。

女性権利団体の消滅と男性操縦者。この2つによって、10年前の白騎士事件から続いていた女尊男卑思想は急速に廃れていくことになる。

IS学園もそれを受けて、方針の転換を行っていくことになった。

元々明記はされていなかったが、ISが女性しか乗れない以上、IS学園も実質女子校と呼べるものであったし、設備等もそのようになっていた。

しかし、今後男性操縦者が増えることを想定し、現在もIS委員会と協議しつつ、共学化および男子寮の建設を検討し始めていた。

スター・ラビット<sup>R</sup>・カンパニー<sup>C</sup>の宇宙開発事業。これについては上記の2つほどではないが、やはり話題となった。

あのIS開発者・篠ノ之束がいつの間にか会社を設立していたこともだが、その発表とほぼ同時に、最近息を吹き返したフランスのデュノア社が、突然SRCと事業提携を結ぶことを発表したのだ。

さらに、IS学園に在籍している”2人目の男性操縦者”北山翔と、妹の北山美波を名指ししたことで、各国首脳、特に日本政府は混乱の極みにあった。

そんな北山兄妹が、今どこにいるかというと――

――――  
I s i d e 翔――

真つ暗な世界。目は開いているのに、目の前に映るものが何もない、ロキ<sup>神</sup>部屋とはまた別の世界。

宇宙空間。ISが、本来いるべき場所。

そんな世界に今、俺と美波はいる。

「翔ちゃん、こっちの準備は終わったよー」

「おう。こっちも終わりそうだ」

『シヨウママ、ナミママ。こっちも2人が設置した装置の信号をキャッチしたよー！』

「了解です。そんじゃ、一旦離れるか」

「そうだねー」

俺達はISのスラスターを全開にして、今さっきまで立っていた場所――火星から離れていった。

そう、俺達は今、火星に来ているのだ。

夏休み初日にSRCに行くと、そこにはなぜかリュックサックを背負った東さんがい

て

「さあ二人とも、さっそく出発だよ！」

「と言い出し、何が何だか分からぬうちに人参型ロケットに乗せられ、気付けばほんの10分で地球の大気圏を突破していた。

そこからさらにロケットは、ISのPICを笠に着た加速を行って、半日もかからずに火星圏まで来てしまったのだ。

そして俺達はそのまま、束さんからロケット内で渡された装置を、火星の地表に設置したわけなのだが……。

「なあ美波、あの装置って何だと思う？」

「うーん、そうだねえ……」

俺の問いに、美波はIS・不知火に乗ったまま器用に腕を組んでいたが、

「翔ちゃん、『トータル・リコール』って映画見たことある？」

「何だよ突然。たぶん見たことないけど」

「まっとうな人間だった頃の記憶も掘り返してみるが、今言われたタイトルは出てこない。」

「火星が舞台の映画なんだけど、もし私の予想が合ってたなら——」

『二人ともー、こっちの準備が整ったよー！ それじゃ、ポチツとなー！』

「え、ちよ、束さん!？」



東さんからの唐突な開始コールに、変な声が出た。

——ゴゴゴゴゴゴゴ……！

「……おかしいな。宇宙空間なのに、変な音が聞こえてくる気が……」  
「翔ちゃん、たぶん本当に聞こえてるんだと思うよ……」

——ゴゴゴゴゴゴゴ……！

「えーつと……」

——ゴゴゴゴゴゴゴッ！

「た、東さん!？」

『よし、もうちよつとで……!!』

だめだ、全然聞いてねえ！

——ドゴオオオオオオオオンッ！

「うおっ！」「きやつ！」

宇宙空間からでも分かる轟音に、俺と美波は身を竦ませた。

「翔ちゃん、あれ！」

美波が指さす方を見ると

「マジ、かよ……」

『やった—————！！ 成功だよ—————！！』

ここから見えていた火星が、見えなくなった。いや違う、火星自体はある。だが……

「雲……？」

赤茶けた大地が見えるだけだった火星に、薄っすらとだが、雲のようなものがかかっていた。

「東ちゃん、これって空気ー？」

「空気って……まさか!？」

『そうだよ！ 二人に設置してもらったリアクターで、火星の北極地下にある氷から、酸

素を作ったんだ!』

まさか、火星で呼吸ができる、のか？

『あとは残った氷の層を順次溶かしていけば、地球ほどじゃないけど人の住める惑星になるはずだよ!』

「おおー! 夢が広がりんぐ」

「……」

「翔ちゃん?」

美波からの声に答えず、俺は再度火星に降りていった。

火星の地表に着いた時、最初あれだけ薄暗かった空が、気持ち青くなっている気がした。

「翔ちゃん、一体どうし——」

少しして追いついた美波を置いて、俺は

ISを、展開解除した。

「翔ちゃん!?!」

「……はっ」

「美波！ 普通に息が出来る！ ちゃんと空気がある惑星だ！」

そう言った後、俺はただただ笑うしかなかった。

……そして当然、美波と束さんから怒られた。

「突然ISを解除するとか、何考えてるのかなー？」

『もー！ 束さんもビックリだよお！』

「はい、すみません……」

あまりの感激に思考停止して動いてました、申し訳ありません。

『ま、まあ、とにかく二人とも、一度ロケットに戻ってよ。今回の成功を祝して、盛大にパーティーしようぜい！』

「そうだね、一度地球に戻ろうー」

「パーティーって、俺達3人だけでですか？」

『うーん、日本に残ってる箒ちゃんとか、りっちゃんを呼ぶ？』

「鈴か……呼べば来そうだな」

「箒ちゃんも、篠ノ之神社のお祭りはまだのはずだから、寮にいると思うなー」

「そういや、セシリアも帰国は来週つて聞いてたから、まだ寮にいるかもな」

「シャルロットちゃんやラウラちゃんも、誘ったら文字通り欧州から飛んできたりしてー」

東さんの発言に、俺と美波はそれぞれのスケジュールを思い出す

『まあいいや。それは地球に戻ってから考えよう!』

「異議なし！」

というやり取りをしている間に、俺達はロケット内部に戻ってドアロックを解除、出発時に座っていた席に戻ってきた。

『お客さん、どちらまで？』

「地球の日本のIS学園入口まで」

「タクシーかよ」

そんなしようなやり取りもしつつ、ロケットはバーニア噴射で向きを変え、地球に向かって加速を開始した――

side 翔 out

1  
2  
3  
4  
5  
6  
7  
8  
9  
10  
11  
12  
13  
14  
15  
16  
17  
18  
19  
20  
21  
22  
23  
24  
25  
26  
27  
28  
29  
30  
31  
32  
33  
34  
35  
36  
37  
38  
39  
40  
41  
42  
43  
44  
45  
46  
47  
48  
49  
50  
51  
52  
53  
54  
55  
56  
57  
58  
59  
60  
61  
62  
63  
64  
65  
66  
67  
68  
69  
70  
71  
72  
73  
74  
75  
76  
77  
78  
79  
80  
81  
82  
83  
84  
85  
86  
87  
88  
89  
90  
91  
92  
93  
94  
95  
96  
97  
98  
99  
100  
101  
102  
103  
104  
105  
106  
107  
108  
109  
110  
111  
112  
113  
114  
115  
116  
117  
118  
119  
120  
121  
122  
123  
124  
125  
126  
127  
128  
129  
130  
131  
132  
133  
134  
135  
136  
137  
138  
139  
140  
141  
142  
143  
144  
145  
146  
147  
148  
149  
150  
151  
152  
153  
154  
155  
156  
157  
158  
159  
160  
161  
162  
163  
164  
165  
166  
167  
168  
169  
170  
171  
172  
173  
174  
175  
176  
177  
178  
179  
180  
181  
182  
183  
184  
185  
186  
187  
188  
189  
190  
191  
192  
193  
194  
195  
196  
197  
198  
199  
200  
201  
202  
203  
204  
205  
206  
207  
208  
209  
210  
211  
212  
213  
214  
215  
216  
217  
218  
219  
220  
221  
222  
223  
224  
225  
226  
227  
228  
229  
230  
231  
232  
233  
234  
235  
236  
237  
238  
239  
240  
241  
242  
243  
244  
245  
246  
247  
248  
249  
250  
251  
252  
253  
254  
255  
256  
257  
258  
259  
260  
261  
262  
263  
264  
265  
266  
267  
268  
269  
270  
271  
272  
273  
274  
275  
276  
277  
278  
279  
280  
281  
282  
283  
284  
285  
286  
287  
288  
289  
290  
291  
292  
293  
294  
295  
296  
297  
298  
299  
300  
301  
302  
303  
304  
305  
306  
307  
308  
309  
310  
311  
312  
313  
314  
315  
316  
317  
318  
319  
320  
321  
322  
323  
324  
325  
326  
327  
328  
329  
330  
331  
332  
333  
334  
335  
336  
337  
338  
339  
340  
341  
342  
343  
344  
345  
346  
347  
348  
349  
350  
351  
352  
353  
354  
355  
356  
357  
358  
359  
360  
361  
362  
363  
364  
365  
366  
367  
368  
369  
370  
371  
372  
373  
374  
375  
376  
377  
378  
379  
380  
381  
382  
383  
384  
385  
386  
387  
388  
389  
390  
391  
392  
393  
394  
395  
396  
397  
398  
399  
400  
401  
402  
403  
404  
405  
406  
407  
408  
409  
410  
411  
412  
413  
414  
415  
416  
417  
418  
419  
420  
421  
422  
423  
424  
425  
426  
427  
428  
429  
430  
431  
432  
433  
434  
435  
436  
437  
438  
439  
440  
441  
442  
443  
444  
445  
446  
447  
448  
449  
450  
451  
452  
453  
454  
455  
456  
457  
458  
459  
460  
461  
462  
463  
464  
465  
466  
467  
468  
469  
470  
471  
472  
473  
474  
475  
476  
477  
478  
479  
480  
481  
482  
483  
484  
485  
486  
487  
488  
489  
490  
491  
492  
493  
494  
495  
496  
497  
498  
499  
500  
501  
502  
503  
504  
505  
506  
507  
508  
509  
510  
511  
512  
513  
514  
515  
516  
517  
518  
519  
520  
521  
522  
523  
524  
525  
526  
527  
528  
529  
530  
531  
532  
533  
534  
535  
536  
537  
538  
539  
540  
541  
542  
543  
544  
545  
546  
547  
548  
549  
550  
551  
552  
553  
554  
555  
556  
557  
558  
559  
560  
561  
562  
563  
564  
565  
566  
567  
568  
569  
570  
571  
572  
573  
574  
575  
576  
577  
578  
579  
580  
581  
582  
583  
584  
585  
586  
587  
588  
589  
590  
591  
592  
593  
594  
595  
596  
597  
598  
599  
600  
601  
602  
603  
604  
605  
606  
607  
608  
609  
610  
611  
612  
613  
614  
615  
616  
617  
618  
619  
620  
621  
622  
623  
624  
625  
626  
627  
628  
629  
630  
631  
632  
633  
634  
635  
636  
637  
638  
639  
640  
641  
642  
643  
644  
645  
646  
647  
648  
649  
650  
651  
652  
653  
654  
655  
656  
657  
658  
659  
660  
661  
662  
663  
664  
665  
666  
667  
668  
669  
670  
671  
672  
673  
674  
675  
676  
677  
678  
679  
680  
681  
682  
683  
684  
685  
686  
687  
688  
689  
690  
691  
692  
693  
694  
695  
696  
697  
698  
699  
700  
701  
702  
703  
704  
705  
706  
707  
708  
709  
710  
711  
712  
713  
714  
715  
716  
717  
718  
719  
720  
721  
722  
723  
724  
725  
726  
727  
728  
729  
730  
731  
732  
733  
734  
735  
736  
737  
738  
739  
740  
741  
742  
743  
744  
745  
746  
747  
748  
749  
750  
751  
752  
753  
754  
755  
756  
757  
758  
759  
760  
761  
762  
763  
764  
765  
766  
767  
768  
769  
770  
771  
772  
773  
774  
775  
776  
777  
778  
779  
780  
781  
782  
783  
784  
785  
786  
787  
788  
789  
790  
791  
792  
793  
794  
795  
796  
797  
798  
799  
800  
801  
802  
803  
804  
805  
806  
807  
808  
809  
810  
811  
812  
813  
814  
815  
816  
817  
818  
819  
820  
821  
822  
823  
824  
825  
826  
827  
828  
829  
830  
831  
832  
833  
834  
835  
836  
837  
838  
839  
840  
84

l  
s  
i  
d  
e  
織斑  
l

臨海学校のあの日、俺は国立ＩＳ研究所に送られ、それから、ベッドに縛り付けら

れながら検査用の器具を取り付けられる日々を送っていた。

「どうして俺が、こんな目に遭うんだ！」

最初はそう叫んでいた。だけど、もう今はそんな気も起きない。

研究所の奴らから毎日のように浴びせかけられる、罵声と嘲笑。

「なあこのモルモット、入学初っ端にやらかしたって奴だろ？」

「ええ。この女尊男卑の世の中で、堂々と男尊女卑な発言をして学園中から顰蹙買ったんですって」

「しかもこいつ、その後のクラス対抗戦で自分から観客席のシールドバリアを破ったんだってよ」

「マジかよ、観客を殺す気満々だったんじゃないか。とんだ疫病神だな」

「しかも終いにや、”2人目”を背後から闇討ちしたんだってよ」

「うわーさいてー」

（違う！俺はそんなことを思ってたわけじゃ……！）

何かを言われる度に、俺は否定した。だが、否定しても否定しても、あいつらは俺を責め続ける。そして……

突然、俺は解放された。

最初は喜んだ。やっと解放された、自由になった、間違いが正されただと。だけど、違った。

「篠ノ之博士がISのバグを解消してな、世界中で少しずつだが、新しい男性操縦者が出てきたんだ。つまり、お前の希少性は無くなった。調べる価値が無くなったんだよ」

ただ、要らないから捨てられたのだ。

（もう、どうでもいい……）

もう、何も考えられない。ただただ、俺の足は研究所の出入口を目指していた。

そして、出入り口の自動ドアが開いた瞬間――

「一夏……」

懐かしい声が、聞こえた気がした。

いや、最後に聞いてから、10日やそこらしか経ってないはずなのに、妙に懐かしく感じた。

「一夏……！」

その懐かしい声が……千冬姉が、俺を抱きしめていた。

「千冬、姉……」

「すまない、一夏……私は、お前を、守る、ことが出来、なかった……」

言葉が切れ切れの千冬姉……もしかして、泣いてるのか？

「いや、違う……お前ともっと早く、ちゃんと話をしていれば……家族として、お前と向き合っていれば……」

「千冬姉……」

何だろう……前にも、こんなことがあつた気が……。

（そうだ……モンドグロツソ……）

俺が誘拐されて、千冬姉が2連覇を逃した時と、同じだ……同じなんだ……。つまり俺は……

（あの時から俺は、何も変わってない、変わっていない。千冬姉どころか……何も、守れてないじゃないか……！）

「お願いだ、千冬姉。泣かないでくれ……千冬姉が悪いんじゃない、悪いのは……」

悪いのは……俺だ。

「ごめん、千冬姉……俺、何も見えてなかった……理解できてなかった……」



やつと、俺は理解した。

今までの俺は全て、間違いだらけだったと。自分の中の正しさを否定されることを認められず、自分が変わることも出来ず、ただ喚き散らすだけのクソガキだったと。

それを、こんなになつて……千冬姉を泣かせて、ようやく気付いた俺は……大馬鹿野郎だ。

「一夏……家に帰ろう。戻つて、話をしよう」

「ああ。俺も千冬姉と話がしたいよ」

今まで自分のことばかりで、本当の千冬姉を……世界を、知ろうともしなかった分を、取り戻したいんだ……

l s i d e 織斑 o u t l

一夏のくせになまいきだ E N D





『ん  
w  
w  
w  
一  
夏氏にはB  
A  
D  
E  
N  
D以外ありえ  
ま  
せんぞ  
w  
w  
w  
』

# おまけ（胸糞注意） Deus vult（神がそれを望まれる）

注意

今話は『（改悪レベルの）一夏アンチを見たい人』『作者と同じぐらい性格のねじ曲がつた人』の閲覧を想定しています。よって、

純粋なISファンや一夏ファン

アンチ・ヘイトものに対して少しでも嫌悪感がある

原作至上主義

原作リスpektが無いのは許せない

のいずれかに当てはまる方は、閲覧せずブラウザバックすることを強く推奨します。と言いますか、正直見るべきではありません。

上記の警告を無視して閲覧した結果、不愉快な気分になったとしても当方は一切関知しません。



本当によろしいですね？

警告はしましたよ？

ある時、突然織斑は研究所から解放された。

彼は喜んだ。やっと解放された、自由になった、間違いが正されたと。

だが、違ったのだ。

「篠ノ之博士がI・Sのバグを解消してな、世界中で少しずつだが、新しい男性操縦者が出てきたんだ。つまり、お前の希少性は無くなった。調べる価値が無くなったんだよ」

ただ、要らないから捨てられたのだ。

（もう、どうでもいい……）

もう、何も考えられない。ただただ、彼の足は研究所の出入口を目指していた。

そして、出入り口の自動ドアが見えた瞬間、織斑の背後に女性がぶつかり

——ドンッ！

——ザシユッ！



「え……う？」

背中にまず衝撃を、続けて痛みと熱を感じて、織斑はそのまま前のめりに倒れ込んだ。「お前の……お前のせいで、私達は破滅よ！」

そう口にしなから、その女——先日消滅した、女性権利団体の残党——は織斑の背中に跨り、

「くそっ！ くそっ！ 千冬様の！ 千冬様の弟のくせに！ このっ！ 出来損ないがあっ！」

——ザシユツ！ザシユツ！ ザシユツ！ ザシユツ！ ザシユツ！ ザシユツ！

何度も何度も、手に持ったナイフを突き立てる。

「がっ！ あっ！ ごっ！」

（な、なんでだよ……なんで俺が、こんな目に……！）

こんな事態になっても、守衛はおろか、誰もこの入口のホールにやって来ない。そう、女が手を回していたのだ。

「千冬様の弟だから目をかけていたのに！ ポツと出の2人目に惨敗するわ！ クラス対抗戦で醜態をさらすわ！」

——ザシユツ！ザシユツ！　　ザシユツ！

「おまけに、せっかく2人目を消してあげようと、ドイツ娘のI SにV T Sを仕掛けたにも関わらず、余計なマネをして、千冬様の顔に泥を塗り重ねるわ！」

——ザシユツ！ザシユツ！　　ザシユツ！

（俺が、千冬姉の顔に、泥をだと……？　そんな……俺は……！）

この期に及んで、織斑はまだ自分のやらかした罪を理解していなかった。彼にとつて、己の善意から為した事が時に罪なり得るとは、想像の埒外なのである。

「はあ……はあ……」

やがて、女が馬乗り状態から立ち上がる。そして、あらかじめ用意していたのか、通路の脇に置いていた小さなポリタンクを持ってくると

——バシヤアアツ！

中身の液体を、織斑に向けてぶち撒けた。

「な……？」

「私達だけが破滅するなんて許せない。お前が生きているなんて許されない……！」

（なんで俺が、こんな目に……）

最後に織斑が見たのは、女が自分に向かって投げつけた、火のついたマッチだった――

続いてのニュースです。本日午前9時20分頃、国立IS研究所で火事がありました。

現場は研究所のエントランスホールで、当時、スプリンクラーが点検のため停止していたため、初期段階で鎮火がされず、被害が拡大したとのことでした。

火は40分後に消防によって消し止められましたが、この火事で、エントランスホールにいたと思われる人物の焼死体が、消火後に発見されました。

遺体は完全に炭化・白骨化しており、警察ではDNA鑑定は不可能とし、残った歯型などから身元の判明を急いでいます。

現場にはガソリンが入っていたと思われるポリタンクが見つかっており、警察では殺

人・放火事件の可能性を視野に入れて捜査しています――

『上手に焼けましたっ!』

どこかで、北欧神話の悪戯神誰かが叫んだ――

TRUE END 『織斑のロースト 無恥と逆恨みを添えて』